

大

学

2026

01

No.

426

時

報



｜特集｜

大学がまちにひらく
ーキャンパスから広がる関係性ー

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748 2026(令和8)年01月20日発行【隔月刊】

東海大学



東レ・カーボンマジック本社(滋賀県米原市)で展示されている
2011年型ソーラーカー「東海チャレンジャー」



東海大学湘南キャンパス(神奈川県平塚市)で保管されている
09、13、19、23年型ソーラーカー「東海チャレンジャー」

世界一となったソーラーカー「東海チャレンジャー」シリーズ

石油資源枯渇と地球温暖化の懸念が深刻化する中で、電気自動車に必要とされる先端技術開発のプラットフォームとして、1991年に東海大学ソーラーカープロジェクトが始まった。当時、この初代監督に就任したのは松前義昭工学部助教授（現在は総長・理事長）である。1992年に1号車を開発し、1993年には2号車でオーストラリア大陸3千キロを縦断するワールド・ソーラー・チャレンジ（WSC）への出場を果たした。

2006年に文部科学省の現代GP採択を受け、大学による社会的責任（USR）活動を推進するチャレンジセンター（現在のキャンパスライフセンター）が設置された。この初代推進室長に木村英樹ソーラーカーチーム監督（現在は学長）が着任した。その中のプロジェクトの一つとして、学生チーム＋研究チームが合体した現在のソーラーカーチーム体制へ変貌を遂げた。2008年より、パリ・ダカール・ラリーで日本人初の優勝者となったOBの篠塚

建次郎氏を迎え、翌2009年にはシャープの三接合化合物太陽電池モジュールとパナソニックの高容量リチウムイオン電池を搭載したソーラーカー「09東海チャレンジャー」で、WSC初優勝を成し遂げた。2011年にはパナソニックの太陽電池モジュール「H-T[®]」と東レの高強度＆高弾性率炭素繊維「トレカ[®]」を使用した「11東海チャレンジャー」で2連覇を達成した。その後、8台の東海チャレンジャーが誕生した。

これらで用いられた技術には、高効率DDモーターや衛星画像処理による日射量推定システムなどがあり、市販化につながった技術としてトヨタ・プリウスPHVの太陽電池モジュール付きルーフや、ブリヂストンの環境技術を集約した「ENL-E[®]」などがある。ソーラーカー「東海チャレンジャー」シリーズは、湘南キャンパス内だけでなく、東レ・カーボンマジック本社やブリヂストン久留米工場などで展示されている。

CONTENTS

82	80	78	70	62	56	50	42	36	34	18	12	10
<div> <div> <div>だいがくのたから</div> <div>東海大学</div> </div> <div> <div>大学点描</div> <div>中央大学</div> </div> <div> <div>巻頭言</div> <div>行動する知性。</div> <div>河合久</div> </div> <div> <div>年頭所感</div> <div>私立大学の今後の使命―過去4年半を振り返つての思い―</div> <div>田中愛治</div> </div> <div> <div>視点</div> <div>首都圏と地方の境界にある小規模大学の取り組み</div> <div>―変えることのできるものと、変えることのできないもの―</div> <div>小池茂子</div> </div> <div> <div>座談会</div> <div>生成AIで何が変わるか?―事務室の日常から―</div> <div>湯澤恵介／坂倉康平／武田享也／喜多真一／(司会)河越英代</div> </div> <div> <div>特集</div> <div>大学がまちにひらく―キャンパスから広がる関係性―</div> <div> <div>地域とともに未来を共創する大学</div> <div>―理論・実践・対話の特徴とするCOIUの挑戦―</div> <div>今永典秀</div> <div>地域のウェルビーイング活動のために―さいたま市見沼区・大宮キャンパスの挑戦―</div> <div>澤田英行</div> <div>交わることで、未来が生まれる</div> <div>―Spark Baseがつくる多様な人々の挑戦と共創のコミュニティ―</div> <div>永野誠</div> <div>共創型キャンパスにおける新たな挑戦</div> <div>三宅雅人</div> <div>「門のない大学」を超えて「まちと融合した大学」へ</div> <div>北野寧彦</div> <div>地域連携教育の新展開</div> <div>―知的好奇心が伝播する格好つけない愛知大学の地域連携教育―</div> <div>太田幸治</div> </div> <div> <div>ずいそう</div> <div>「自由の学び舎」を守るために</div> <div>吉村和真</div> </div> <div> <div>小特集</div> <div>大学ブランドに寄与するマスコミキャラクター戦略</div> <div>創立者の想いをつなぐメッセンジャー―ピーチくん流ブランド戦略―</div> <div>宮越美紀子</div> </div> </div> </div>												



137	135	134	124	122	120	118	112	108	104	100	98	92	88
私大連ニュース		執筆者・出席者のご紹介（掲載順）	新会員代表者紹介	クローズアップ・インタビュー	加盟校の幸福度ランキングアップ《広場・中庭編》			明日への試み	私の授業実践〜教育現場の最前線から〜	応援団長ライナくんー南山生の闘志に火をつけろー			
編集後記			豊田工業大学	鈴木志保子さんに聞く（聞き手）外川智恵	ケヤキコートが育む学生と地域の絆ー学生生活と地域交流の場ー			日本女子大学食科学部	もしワークシヨップのファシリテーターが	野見山智道			
					教職学協働でつくる「居心地のよい」大学				大学の大教室授業をワークシヨップとして設計したら				
					真理を探究し、ともに学びを深める空間								
					菅沼隆昭								
					春田和恵								
					中島啓								
					菊地映輝								
					吉田敦								
					南雲健介								



行動する知性。

Knowledge into Action



行 動 す る 知 性 。

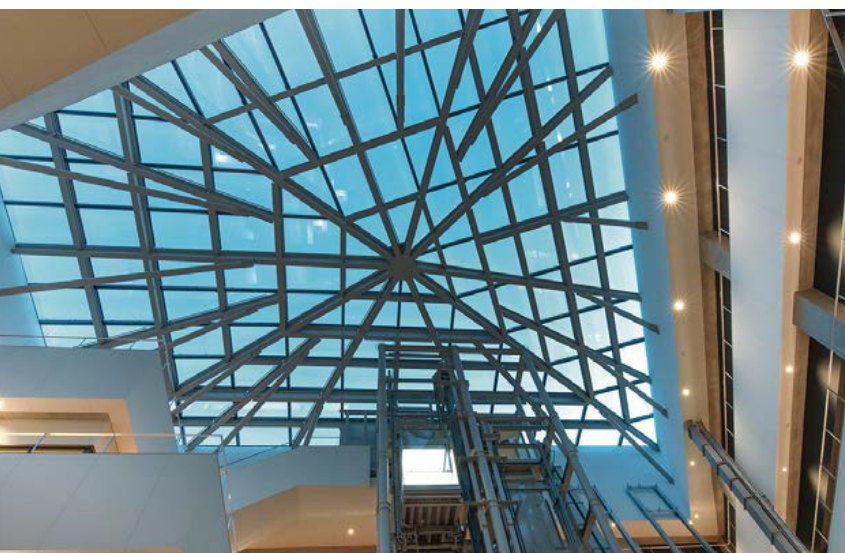


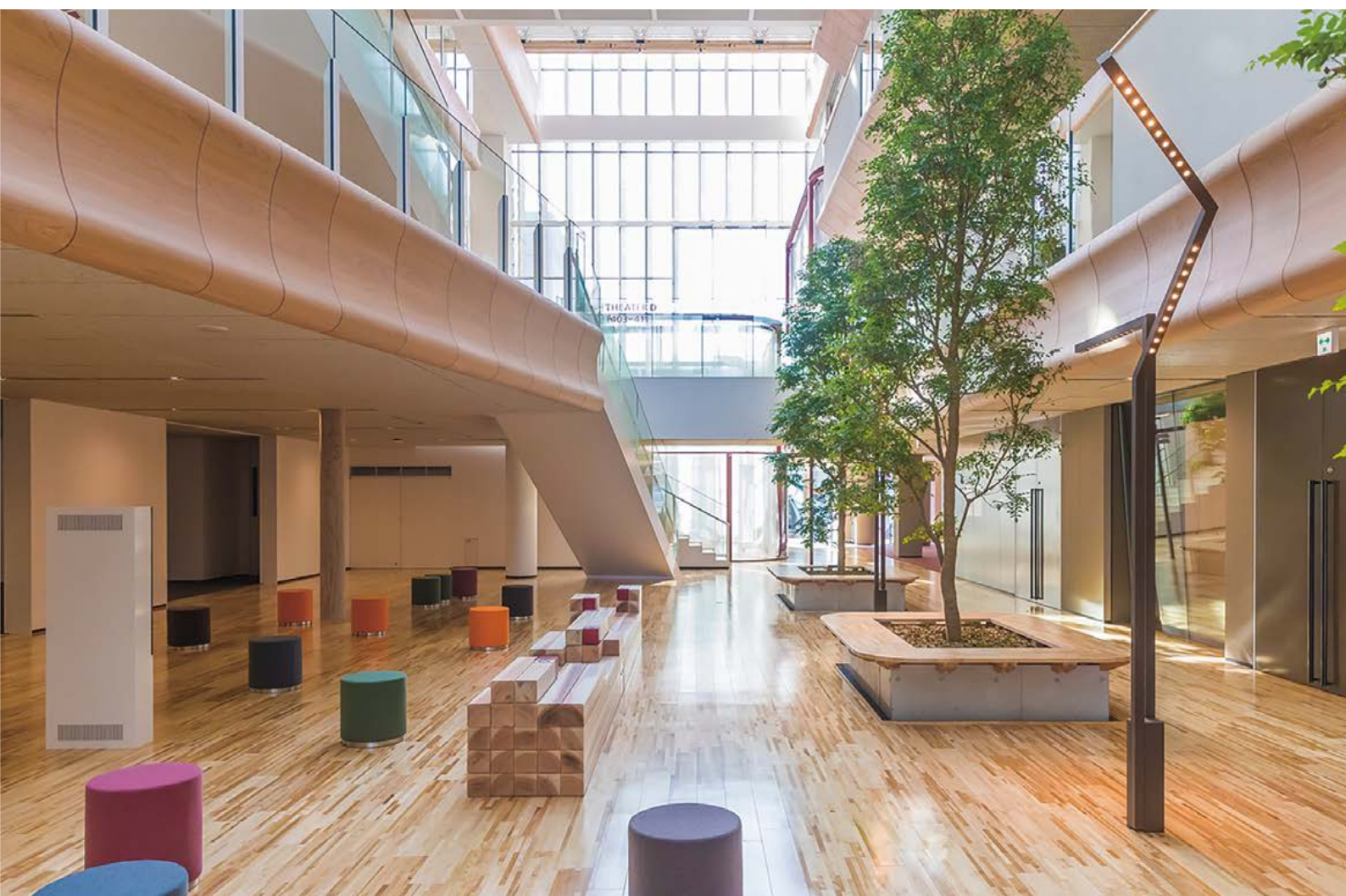


行動する知性。

中央大学

CHUO UNIVERSITY





行動する知性。

 中央大学

University Current Review

大学時報

2026.1/NO.426



行動する知性。

河合久 中央大学学長

「知識」を「行動」によって検証し、課題解決の糸口へと昇華させる営みこそが、真に「知性」と呼ぶべき知的探求である。中央大学は、複雑かつ多様な現代社会において、的確な解決策を導く「行動する知性。」をユニバーシティメッセージに据えている。多様な学問と実践的な学びを通じて、他者の幸福を願い、自らの成長を追求する意志ある学生が集う場でありたい。知を携え、心をひらき、世界にやさしく、そして力強く働きかける人物を育む高等教育機関として、私たちは歩み続けていく。

私立大学の今後の使命

―過去4年半を振り返っての思い―

田中 愛治 日本私立大学連盟会長・早稲田大学総長



新年おめでとうございます。本年の日本私立大学連盟（私大連）加盟大学のご発展と、関係者の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

私がこの「年頭所感」を述べさせていただくのは、今回で5回目となります。この間を振り返ってみますと、2022年はコロナ禍を通して学んだ私立大学の責任について述べ、2023年はDX（デジタル・トランスフォーメーション）に対する私立大学の役割について、2024年には18歳人口の減少に直面する時代における私立大学の役割を、2025年には私立大学が生成AIに対応すべきかについて私見を述べました。この様に、過去4年間のテーマは、私立大学のみならず日本社会が近年において直面してきた課題の多くを示唆しているように思われます。

言い換えれば、疫病等によるパンデミックや自然災害等の環境的要因の変化による危機に如何に対応すべきか、人口の減少にどう対処すべきか、そしてそれらの課題に対して、いかにDXとAIという科学技術上のテクノロジーを活用して解決策を打ち出すべきなのかを考えることが、日本社会全体にも日本の私立大学にも求められている課題であり、それらが近年に一度に噴き出してきたと捉えることが出来ると思います。

このような状況を見つめ直すと、日本の私立大学がどのような教育を学生に提供して、どのような人材を育てなくてはならないのかを考えさせられます。もちろん、私大連の加盟校の中にも多様性があり、研究を重視する大学、教育に特色を持つ大学、地域社会への貢献を重視する大学と、担う役割が異なっていることも確かです。私大連加盟校以外の私立大学を含めれば、一概に全ての私立大学が同じ目的を持っているわけではないことは言うまでもありません。しかしながら、今後の日本社会において

私立大学として生き延びていくためには、共通の使命があることも認識すべきだと思います。その使命とは人材の育成であります。今後、18歳人口が減少し、大学で学ぼうとする若い人の数が減少していくばかりでなく、日本社会では高齢者が増加し、労働人口が減少していく中で、全国の大学生の8割が学んでいる私立大学は、相当の覚悟で教育を学生に提供していく必要があります。働く人の数が減る中で助けるべき人の数が増えるのですから、AIを活用して省力化して仕事量を増やさなくてはなりません。また自然災害に限らず様々な危機的状況に直面した場合には、根拠となる事実やデータを基に冷静に判断することが必要になります。そのためには、データ・サイエンスなどのデータによる根拠を基に考える力が必要になります。これらの能力は、研究を重視する大学、教育に特色を持つ大学、地域社会への貢献を重視する大学のいずれであっても、学生に育んでもらいたい能力であり、大学でこそ育てられる能力です。

また、今後日本での労働人口が減少することに対しては、海外からの労働者も肉体労働者ばかりでなく、知的労働者も受け入れて活躍してもらう必要があります。そのようなダイバーシティを受け入れる寛容性、または自分と異なる人の立場に立つてものを考えられる共感力 (power of empathy) を育む必要がありますが、これこそが大学教育を通してこそ育むことが出来る能力だと思います。

言い換えれば、今後の日本の私立大学は、科学技術の発展に貢献する能力の教育とともに、多様性を受け入れる寛容性と共感力を育む人文学や社会科学における教育も提供する必要があると思います。したがって、今後の日本の大学は、特に私立大学は理系と文系を分け隔てなく教育する総合知の教育を目指すことが必要になると思います。

そのためには、大学入試の改革が必要です。学力試験では、1点の出来を競う試験ではなく、自分の大学の自分の学部に入學するのにふさわしい基礎学力があるか否かを確認する試験として、大学入学共通テストを利用すべきでしょう。各大学各学部の独自の入試では各受験生の意思や適性を見極める選考になることが理想であると思われます。とすれば、大学入学共通テストの実施時期は多くの私立大学が利用できるように、高校3年生の12月に実施するか、出題範囲を高校3年生の前期までに絞って9月に実施するなどの工夫も必要であろうと考えています。

首都圏と地方の境界にある

小規模大学の取り組み

―変えることのできるものと、変えることのできないもの―

小池 茂子

聖学院大学学長

はじめに

聖学院という名を、大木英夫という神学者と結び付けてご存知の方もおいではないかと思う。「聖学院は、ラインホルド・ニーバーの祈りを翻訳し、わが国に紹介した大木先生が理事長をしていた学校法人ですよ」という言葉を今なお耳にする。大木英夫が『終末論的考察』（1970年）において日本に紹介したニーバーの祈りをつぎに紹介する。

神よ、変えることのできるものについて、それを変え
るだけの勇気をわれらに与えたまえ。
変えることのできないものについては、それを受けい
れるだけの冷静さを与えたまえ。
そして、変えることのできるものと、変えることので

きないものとを、識別する知恵を与えたまえ。

明治期に米国より来日したプロテスタント・キリスト教の宣教師によって開学した神学校をルーツとする聖学院120年の歩みの中で、学校法人聖学院は幼稚園2校、小学校1校、6年間一貫教育の中学・高等学校2校、大学1校を有する総合学園となっている。その中で大学は1988年、政治経済学部1学部をもって埼玉県上尾市の地に開学し、現在、政治経済学部、人文学部、心理福祉学部の3学部5学科からなる総合大学となっている。聖学院大学は法人の中で最後に開設された学校であり、法人の本部及び幼・小・中・高の学校群が東京都北区に所在する一方で、大学はJR大宮駅から一駅の場所に所在する。首都圏に隣接する、あるいは地方都市としての埼玉

県上尾市に位置する小規模大学として、大学のアイデンティティをいかに描き、少子化に伴う大学淘汰の時代をどう乗り切ればよいのか。常にニーバーの祈りが脳裏をよぎる。



[写真1] 聖学院大学チャペル外観

学長となって2年半余、入学定員の見直し、学科の名称変更、大学院のリスキリング需要に応える新たな研究領域の開設など怒濤のような日々を過ごしてきた。拙稿では、この歩みの中で取り組んできた教育改革の一端を紹介させていただく。

1. 本学の教育において変わらないもの

国立大学の第3期中期目標を作成する際の留意点としては、文部科学省によって2015年度に示されたつぎの通達がある。「特に教員養成系や人文社会科学系の学部・大学院については、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めること」、この通達は、その後の国の高等教育政策として国立大学のみならず特に人文・社会科学を中心として構成された私立大学の行く末にも大きな影を落としていると思う。

これまで聖学院大学が形づくってきた学問的・人的・財的・物的資源の状況からみて、国の施策にある成長分野に属するとされる新学部・新学科の開設は難しいと感じた。学長として初めに着手したことは、「聖学院大学の教育は何をを目指すのか」というビジョンを明確にし、そ

れを全教職員一丸となって達成すること、そして現代社会の要請に応える全学共通科目の再編という教育・カリキュラム改革であった。

学部や学科の専門性は異なっている、聖学院大学の教育・研究あるいは学生への支援を通じ、私たちはどのような人を育て、社会に送り出していくのか」という教育目標を全教職員が理解し、その達成を目指す教育活動がブレないよう、学長として努めて繰り返し語ってきた。

本学の教育において変わらないもの。それは「神を仰ぎ人に仕う (Love God and Serve His People)」という聖学院の建学の精神と、その下に大学が掲げる「グローバル社会が進展する社会・地域の中で、『主体性をもって他者に仕えることができる専門人』の育成」という教育目的である。

この「主体性をもって」という言葉には、つぎの2つの思いが込められている。1つは、大学における自律的な学修を通じて自らの意志で主体的に学び、問題解決に当たる人間の育成を目指すこと。もう1つは、新約聖書のヨハネによる福音書にある「真理は人を自由にする」という、キリスト教主義大学としての教育的信念である。

さらに「人に仕う」という言葉には、本学の教育の目指すところに「本学での学びを通じ、自分が有している知識・技能・経験・財・時間などを他者の為に喜んで差し出すことができる人間を育て、養う」という人格陶冶^{とうや}があることを意味している。

2. 変えることのできるもの(変えるべきもの)

前述した「変わらないもの」を基盤に据えながら、同時に「変えることのできるもの(変えるべきもの)」を検討し、専門教育の前提となる全学共通教育の見直しを図り、今年度(2025年度)より全学共通科目の新カリキュラムがスタートした。

文部科学省が示す「学士力」修得に向け、専門的な学修の前提となる基礎教育科目群としてこの全学共通科目があるわけだが、本学ではこれをつぎの4領域から構成した。第1は聖学院大学論、キリスト教概論、キリスト教社会倫理、キリスト教文化論、キリスト教人間学から構成される聖学院コア科目、第2は世界や社会・地域で他者とつながるための力を養うコミュニケーション、AI・情報リテラシー・データサイエンス関連科目、第3は

世界と社会・地域で他者と共に生き、市民として課題解決に取り組む力を養うシティズンシップ科目、第4は世界を理解するために必要となる人間理解、社会理解、自然理解からなる教養の修得を目指す科目から構成されている。

ご承知の通り、伝統的な大学教育は将来指導的立場になつていく者を対象に、幅広い教養、専門職業能力（知識・技能）を教授し、指導者にふさわしい徳性を涵養（かんよう）することであった。1991年の大学審議会答申「大学教育の改善について」によって、設置基準の大綱化（たいこうか）・自由化が打ち出され、それを受けて多くの大学では事実上一般教養課程が廃止になり、それに代わって専門教育の時間の増加と早期化が進められた。しかし、高等教育のマス化・大衆化・ユニバーサル化の進展、あるいは予測困難で不確実性が高い現代社会を生き抜く力の育成や、世界と自分のWell-beingをデザインするという観点から、ここに来て教養教育の意義が見直されていると思われる。また、これからの社会においてAIやデータ分析によって導かれる回答を無批判に受け入れるのではなく、真実と虚像を見極める批判的思考力を養う意味でも、人文学

をはじめとする教養は不可欠なものとなると考える。その意味で本学でも全学共通科目の領域に、人文、社会科学、自然科学領域からなる教養教育を据えている。

また本学では「変わることでできるもの（変わらなければならぬもの）」として、時代や産業界からの要請に応え、「21世紀型スキル」や「コンピテンシー」の育成を目指す全学共通科目のカリキュラムを新設・再編した。ICTリテラシー、データサイエンス・数量的スキル、コミュニケーション力、協働する力、世界で通用する倫理観の育成という教育課題を達成するための科目群である。同時に、高校時代に「探究の時間」を通じて課題解決型の学習に慣れ親しんできた学生たちに、基礎教育の段階から学外における体験的学習や課題解決型学習に触れさせ、問題意識の喚起、社会や世界の理解、自己形成につなげていきたいと考えている。

そのために、学内の組織である地域連携・教育センター、サステイナビリティセンター、ボランティア活動支援センターを学外との教育資源と大学を結ぶ窓口として強化。大学が所在する地域の企業、行政、学校、NPO、地域住民をはじめとする学外の方々の力を借りて、多彩

な体験型学習・問題解決型学習のカリキュラム開発に取り組んでいる。

首都圏に隣接し、埼玉県のさいたま市・上尾市という地域に所在する本学は、都市型の学修体験と地方の持つ地域課題の解決という複眼的な視点から、学生たちが学修や体験を行うことが可能であり、それが本学の強みである。またこれらの体験に裏づけられた能力は、グローバル化が進む世界のどの地域にいても、そこにある課題を解決する力となりえると考えている。

最後に ―少人数教育の強み、

キリスト教主義大学であること―

本学には、学生たちの指導にあたって教職員が心にとどめるタグラインがある。それは「一人を愛し、一人を育む。」というものである。一人一人の学生が入学時から卒業に至るまで教職員に覚えられながら大学生活を送る中で、学生たちは大学の中に自分の居場所を見出し、安心感をもって学修あるいは大学生活を送ることができている。いわゆるST比と呼ばれる学生数と専任教員数の比率を表す値があるが、本学では教員1人当たりの学生

数は19・9である。

学生は、キャンパスの中で、誰かに覚えられ大切にされているという感覚を抱き、学問的にも人間的にも成長すると私どもは考えている。これがキリスト教主義大学として、本学が変わらず今後も携えていく教育の信念である。



[写真2]入学式

グローバル化、少子化、高度情報化などの時代の変化に晒される中で、変えることのできるもの（変えるべきもの）と変えることのできないもの（変えるべきではないもの）を見極めながら、これからも大学の歩みを進めていきたいと考えている。

生成AIで何が変わるか？ ―事務室の日常から―



MEMBER

湯澤 恵介

学校法人梅村学園中京大学学術情報システム部
情報システム課

坂倉 康平

学校法人上智学院総務局経営企画グループ

武田 享也

駒澤大学総合情報センター情報ネットワーク課
アプリケーション係

喜多 真一

国立大学法人大阪大学情報推進部
デジタル戦略推進室専門職員

司会
河越 英代

慶應義塾広報室長、
広報・情報委員会大学時報分科会委員



英 Syllabus

中 教学大綱

仏 Plan de cours

授業計画



生成AIの可能性を実感

トライアルから本格導入へ

河越 近年、生成AIが急速に普及しています。当初は、学生のレポート作成などにおける影響を憂慮するようなネガティブな反応が多くを占めていましたが、現在では、「いかに生成AIを活用するか？」に焦点が移り、積極的に利用する流れが生まれています。大学事務においても、業務が多様化する中で、生成AIを活用して、効率化や質の向上を目指し、新たな業務への取り組みを進める動きが出ています。今回は、実際に生成AIを導入してい



る大学の皆さまと、現場での経験を共有いただきながら、生成AIが大学事務にもたらす影響や変化について議論を交わしたく思います。初めに、生成AIを導入した背景についてお話しただけですでしょうか。

湯澤 中京大学の湯澤です。本学は2024年6月に企業向けのプラットフォーム「Grafter AI Studio」を導入しました。今後、人口減少に伴い職員の数も減っていくことが予想される中で、持続的な大学運営と業務の質向上を目指し、生成AIの可能性を検証するために導入を検討しました。業務においてどの程度の効果があるか検証を行った結果、職員に広く浸透し、エントリーシートの添削などのキャリア支援、国際化に伴う翻訳業務など多くの分野で活用され、質的な変化が見られたことから、本格的な導入に至りました。

武田 駒澤大学の武田です。本学では、職員1人当たりの学生数を示すSS (Student-Staff) 比率が、同規模大学や競合大学と比較して高い水準にあります。その分、職員の業務負担が大きく、新規事業に取り組む余裕がないという課題がありました。そのような状況を打開するために、DXによる業務効率化を推進していましたが、生



成AIが登場したことで、そのインパクトに期待して導入を目指しました。2023年にChatGPTが登場した頃から業務における利用価値の検証を始め、約2年後の2025年4月に、正式に職員全員が利用を開始しました。利用開始から半年後にアンケートを取ったのですが、用途のトップ3が、生成AIの得意分野である文書作成、メール対応、議事録作成でした。業務の質の向上に関しては、ミスが減った、精度が上がった、新しいアイデアや視点の獲得につながったという意見が届いています。

利用ガイドライン制定、 大学専用環境での利用 安心・安全な利用を目指す

坂倉 上智大学の坂倉です。本学ではグローバル化対応と業務効率化の推進を背景として、2023年秋ごろから一部部署で生成AIチャットの試行を開始するなど組織的な事務利用を本格化し、2024年1月には事務利用向け生成AIガイドライン整備や利用説明会を開催するなど、業務での安全な利用に向けた取り組みも行っ



います。現在、全教職員がマイクロソフトの「Copilot」を利用できる環境になっていますが、本学の生成AI利用の特徴は、特定の生成AIツールに利用を限定するのではなく、個々の業務ニーズに応じて使いやすい生成AIをマルチに利用している点です。例えば、国際的な業務が多い部署を対象に文書翻訳AIツールを個別導入するなどしています。最近では職員の間でもさまざまな活用アイデアが出てきており、知恵を結集してより良い活用方法を探っていきたいと考えています。

喜多 大阪大学の喜多です。本学は、2023年に生成AIの無料トライアルができるようになった時、希望する職員に実際に使用してみてもらいました。その後、アンケートを行ったところ、文書の要約、翻訳業務、企画立案をする上での壁打ちなどで活用されており、「非常に便利だった」、「もっと高性能な生成AIが使いたい」という声が多く見られました。一定の業務効率化が見込まれると判断し、いろいろな生成AIを比較検討した結果、「Knowledge Stack」を選定し、2024年5月に全学の事務部門を対象に本格導入を開始しました。このシステムは、マイクロソフトが提供するクラウドコンピュー



湯澤 恵介氏

ティングサービス「Azure」の大阪大学専用の環境内で運用されており、プロンプトに投入されたデータは国内の閉域サーバ内で管理される仕組みになっていることから、職員が安心して生成AIを活用できる状態になっています。

導入で生まれた変化

さまざまな工夫から生まれた可能性

河越 各大学がどのような目的を持って、生成AIを導入しているのかがよく分かりました。続いては、具体的な活用事例とそれに伴う導入効果について伺いたく思います。生成AIを利用して、職員の反応などもあります。したらお聞かせください。

坂倉 先ほど申し上げたとおり、本学ではグローバル化対応も生成AIの利用を促す要因となっています。2024年に学内の発信文書・会議資料の英語化を義務付けるガイドラインが策定されたため、文書翻訳AIツールを導入し、主に学部・学科事務室や国際系業務を行っている部署の職員に提供しました。その結果、半年で学内文書の英語化率が、従来の2割程度から5割程度まで高まりました。また、翻訳の他にも、文章処理が必要な業務でのニーズの多さを実感しています。メール作成や議事録作成といった日常的な業務で活用している職員もいますし、学生アンケート調査の自由記述回答から傾向分析を行うなど、より専門的な業務で活用する職員もいま

す。また、大学事務はさまざまな会議も多いと思いますが、会議資料の準備や議事録作成での生成AI活用も増え、効果を実感している職員が多くなっていると感じています。他にも、再雇用のベテラン職員の方がいるのですが、かなり生成AIを使いこなしており、官公庁向けの申請書類作成のような複雑な業務においてもリサーチから資料作成などさまざまな場面で活用しています。ベテランならではの経験に基づくファクトチェックも機能するため、人と生成AIの理想的な協働ができています。

武田 これまでさまざまな生成AIサービスの検証やAIチャットボットのプロトタイプ開発を行い、学内での活用可能性を検討してきましたが、それを通して生成AIの利用を学内で広く浸透させるためには、ツールを切り替える手間をかけず、普段の業務環境で生成AIを活用できることが重要だと考えました。そこで、日常業務で利用している「Google Workspace for Education」に付帯する「Google AI Pro for Education (旧Gemini Education)」を導入しました。現在の利用状況は、月間アクティブユーザー率が約80%、1日当たり約30%となっています。アンケートで満足度を調査しているので



坂倉 康平氏

すが、利用者の85%が「満足している」という結果になり、80%が「業務の質の向上を実感している」と回答しました。また、「どのくらい時間削減効果が得られていますか」という質問においては、平均削減率65・5%を達成していることが分かりました。

先日、学内のトップユーザー3名に活用事例を紹介して

もらう学内セミナーを開催したのですが、非常に興味深かったです。1名は、キャリア支援部署への異動直後もすぐに活躍できるよう、企業分析レポートのテンプレートを作成し、学生の相談を聞きつつ生成AIが企業情報を収集する仕組みを作り、その情報を参考に学生をサポートしていました。他には、留学関連の部署でイベント開催を告知するためのWebサイトを生成AIで作成した、複雑化し属人的となった業務を生成AIと共に改善した、という事例が紹介されました。これらの例から、業務に適した生成AIの使い方をそれぞれ工夫して、実用的に、そして自走して運用していることが分かりました。

教員からも利用希望が 使用しない層へのアプローチも必要

喜多 本学職員の生成AIの毎月の利用状況は約50%となっており、その多くが企画の立案や文書の翻訳、要約業務など汎用的に使われています。また、教員が研究資金を調達する際の応募書類や申請書類の添削を事務職員が担当しており、生成AIを使うことでその作業に要する

時間が大きく削減されたという報告も聞いています。本学の生成AIのサービスは、当初は職員にのみ展開していましたが、教員側からも使用したいという要望があり、試験的に提供することにしました。その結果、多くの申し込みがあり、論文の作成やプログラミングの支援に活用されています。本学の生成AIサービスの特徴として、「プロンプトに入れた情報が外部に漏れることなく、学習にも使われない」という点が挙げられます。教員側としては、やはり自分の研究情報を外部に出したくないという要望があるため、セキュリティが担保された生成AIサービスに対するニーズは高いようです。

湯澤 本学で2024年に生成AIを導入した当初の利用率は50%前後でしたが、2025年10月時点で約80%まで拡大しています。そのことから、学内で生成AIが非常に活発に使われるようになってきたことが分かりました。その一方で、どう活用したらいいか分からないという職員もいるため、効果測定も兼ねて事例共有会を開催しています。まず、アイデア出しや文書作成といった基礎的な活用事例を紹介して生成AIの可能性を認識してもらうことから始めました。何度か開催する中で、職

員の間で生成AIの業務への利用が浸透してきたため、今後は成功事例を横展開することを目的にさらに深掘りしたテーマで事例共有会を実施していきたいと考えています。また、生成AIの具体的な用途としては、エントリシートの添削のようなキャリア支援に加え、財務部門においては、複雑化している予算集計業務を、エクセ



武田 享也氏

ルマクロの自動生成によって標準化し、業務の効率化を実現しました。他にも、「[Google Workspace]の機能を自動化・拡張するための、JavaScriptベースのプログラミングプラットフォームである「[Google Apps Script]」のプログラミングコードを生成してアプリケーションを構築するなど、高度な業務効率化と職員のスキル拡張に直結する活用方法も見られます。

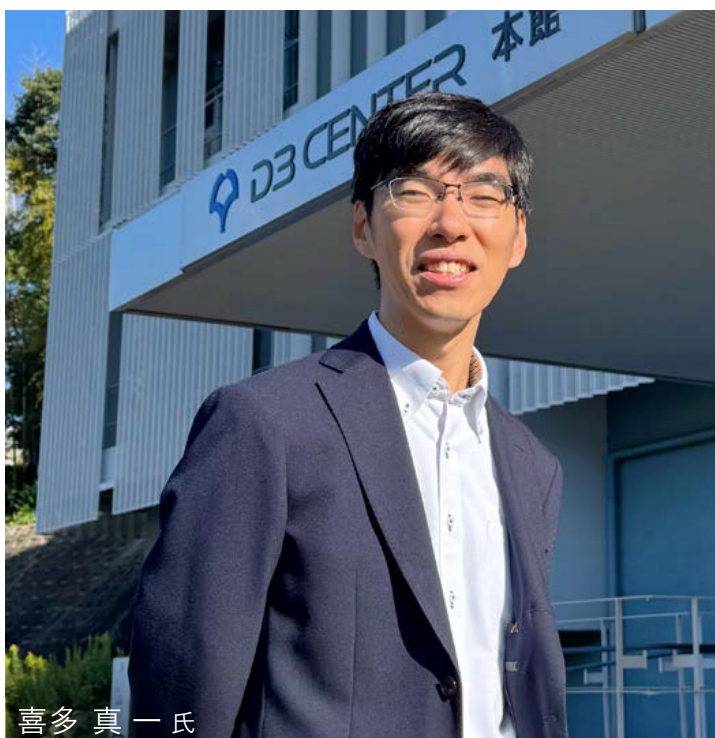
セキュリティをいかに確保するか

河越 皆さまのお話を聞いて、成功事例が多くあることが分かりましたが、その一方で情報漏洩のリスクや運用の難しさといった課題もあるかと思っています。その点に関して、各大学で独自の取り組みがありましたら教えてください。

武田 本学では、Googleが提供するGoogle AI Pro for Educationを大学として正式に契約しています。学習機能が適用されず、やり取りのデータも大学が保持するという契約になっているためです。それ以外の生成AIの使用も許可していますが、ガイドラインを作成し、個人情報

報や機密情報は入力しないように通達しています。また、課題の一つとして、生成AIを使う人と使わない人に二極化している状況があります。生成AIを使わずに独自の工夫で業務効率化を実践している職員もおり、生成AIの必要性を疑問視する声も聞かれますが、彼らに対して生成AIの利用価値を伝えていくことも必要だと思っています。そのため、セミナーの開催や、具体的な活用事例やプロンプトを投稿して共有できる生成AI活用推進サイトを作るといった取り組みも行っています。それでも、セミナーに参加せず、サイトも見ないという職員





喜多 真一 氏

がいますので、今後は手続きフローや注意点を確認できる有用性の高いチャットボット等を提供し、生成AIに触れる機会を増やしていきたいと考えています。

喜多 本学も一般の生成AIの利用に対する制限は設けていませんが、やはり個人情報や機密情報は入力しない使い方を前提にしています。入力が必要な場合は、大学

で定められたセキュリティの手続きを踏んだ上で使用してもらうようにしています。また、生成AIはどうしてもハルシネーション^{※1}を起こしてしまうので、回答に対する最終的な判断は必ず人間が行うようにセミナーを通して指導しています。本学で正式に導入している生成AIは一般的なものではなく、セキュリティを考慮して独自にカスタマイズしています。そのため、一般的な生成AIで可能な画像や動画、音声データを使った質問や、Web上の情報の検索ができなくなっています。その点において利便性が落ちるため、セキュリティを確保しつつ、どう使いやすくしていくかが課題となっています。また、検証を繰り返しながら導入を進めていますが、生成AIは進化のスピードが速いため、1年前のバージョンでも機能が十分でないと感じる職員もいるようです。そのため、よりスピード感を意識して導入を進めなければならないと思っています。

使用有無の二極化が課題

コンプライアンスに関わるリスクも

湯澤 本学においても、皆さまと同様に個人情報や機密情報の取り扱いに関してはガイドラインを策定し、注意を促している状況です。また、ハルシネーションリスクや生成AIを使う層・使わない層の二極化は生産性向上を阻む課題の一つであると捉えています。一方で、生成AIを有効活用している事例を吸い上げ、知見を組織の共有財産にできていない状況も課題となっています。おそらくわれわれの知らないところで生成AIを効果的に活用している職員がいるかと思うのですが、そうした事例を積極的に収集し、成功事例を類型化して学内に広く周知することも必要だと感じています。部署に特化した生成AIを導入していきたいという現場からのニーズも上がってきています。今後はそうした学内全体での知見の蓄積を図るとともに、職員が生成AIを活用しやすくなるような構造的な仕組みの構築も進め、全職員による継続的な生成AIの活用を促進していきたいと考えています。

坂倉 セキュリティに関しては、通常業務でも利用して

いるOneDriveやSharePointといったクラウドサービスの利用に準拠した適切な利用であれば、過度に心配する必要はないと私は考えています。生成AIではデータを学習されないように気を付ける点は注意ですが、組織契約している生成AIサービスであれば通常はオプトアウト^{※2}が取り入れられており、事務利用であれば問題ないと思います。一方で、セキュリティリスクが高い個人契約の生成AIの使用は防ぐ必要があります。本学では業務環境として「Copilot」を利用できますが、幅広い業務ニーズに対応できない機能もあります。例えば、画像生成では「Copilot」より高精度で細かく出力調整できる生成AIサービスも登場していて、そういった生成AIを個人契約で利用されてしまう可能性もあります。万が一、個人の生成AIを利用されてしまうと組織の管理権限が及ばない領域で生成AIが使われ、入出力データの意図しない流出や生成AIモデルの学習への利用などのリスクが生じます。そのため、多様な業務ニーズに応じて使える生成AIの選択肢を業務環境として整えることが組織的なリスク管理にもつながると考えます。

また、システム面のセキュリティ管理に加えて、利用



する職員もコンプライアンスを意識した適切な利用をする必要があると実感しています。例えば、生成AIと著作権の問題があります。学内検証の一つとして、「RAG (Retrieval-Augmented Generation: 検索拡張生成)」を活用して外部研究費の事務処理マニュアルを解説するQ&Aボット作成を試みましたが、マニュアル自体の著作権は発行元機関が所有しており、生成AIで作成したボットの利用方法次第では著作権侵害につながる恐れのあることが判明しました。生成AI利用では、このような法的リスクも考慮し、法務担当部署とも相談しながら

利用方法を考えるなどの対応が必要とも感じました。

グローバル化に伴う

翻訳業務での生成AI活用

河越 これまでのお話にもあったように、グローバル化に伴い、翻訳における生成AIの活用の重要性が高まっているように感じます。例えば、建学の精神などを翻訳する場合、決まった単語を使うようなケースもあるかと思いますが、各大学でどのように翻訳で活用されているかお聞かせください。

坂倉 本学では、文書翻訳AIツールを導入していますが、本学固有の部署名・役職・用語を適切に訳出するために共通の対訳表を用意し、翻訳時に利用できるようにしています。最初に対訳表を作る手間はかかりますが、学内で共有することで他の生成AIでも利用でき、組織的な訳出の統一性が保たれ、翻訳品質の向上につながると考えています。

喜多 本学でも大学独自の組織や役職などについての専用用語の英語表記集を作成しています。それを生成AI

に読み込ませて翻訳に生かそうとしているのですが、余計な解釈が入ってしまうことがあり、こちらの意図に沿った翻訳をさせるのが難しいというのが現状です。そのため、現在は生成AIではなく、機械翻訳に表記集を反映させる取り組みを行っています。それが成功すれば、学内文書の翻訳もスムーズになると期待しています。

武田 本学では翻訳業務の範囲が限られているため、留学などに対応する国際センターでのメールのやり取りに生成AIを利用する程度です。そのため、対訳表などは特に用意していません。ただ、大学独自の学部名や役職名、組織図といった基本情報に関してはドキュメントを作り、教職員であれば誰でも使える状態にしています。チャットボットを作ったり、プロンプトを入力したりする際には、そのファイルを引用して生成AIが言葉を正しく認識できるようにする試みは行っています。

湯澤 本学では部署名や役職名は対訳表を作成し建学の精神等は学生便覧を翻訳し展開していますが、生成AIで翻訳する際に対訳表を呼び出せるような活用までではできておりません。グローバル化への対応力を高めるための生成AIを活用した翻訳支援体制について、具体的な



河越 英代氏

検討を進めていきたいと考えています。

生成AIと大学事務の未来像

河越 各大学で生成AIの活用が始まっていますが、今後の活用の幅はさらに広がっていくと予想されます。その時、

大学事務においてどのような未来像を描くことができるでしょうか。皆さまの展望を聞かせていただきたく思います。

喜多 本学では、検索と生成を組み合わせるRAGの活用がまだ不十分です。RAGを活用して生成型のボットを作ることができれば、人事や会計の規程、契約手続き等の業務にかかる時間を大きく削減できると思います。また、現在の生成AIは、職員が能動的に使わないと機能しません。しかし、近年は、問い合わせに対して自動で返信したり、業務上のやり取りを自動で記録する、能動的に動くエージェントのような生成AIも登場しています。そのレベルまで達すると、逆に人間がそうした作業をできなくなってしまうというデメリットも考えられますが、うまく調和しながら活用の幅を広げていきたいと考えています。

武田 本学では、エンロールメントマネジメントの取り組みの一つとして、さまざまなデータを集約して活用できるデータウェアハウスの構築を進めており、現在、実現可能性や効果を検証するための「POC (Proof of Concept)」を実施しています。データウェアハウスにより、それまで人間の経験や勘で行っていた業務をデータに基づいて適切に遂行できるようになります。また、そ

こに生成AIを組み合わせることで、データ分析や必要なアクションを提案してくれ、データ活用のハードルを下げることができます。生成AIにとって整備された情報は非常に有効ですので、データウェアハウスと生成AIをうまく連携させながら、教職員をサポートできる環境を作っていきたいと思っています。

生成AIがもたらすもの 生まれた時間で新たなチャレンジを

湯澤 RAGに関しては、本学でも既にPOCの段階まで進めており、24時間利用可能な生成AIチャットボットを導入して窓口の開設時間削減と即時性の高いサービス提供を目指していききたいと考えています。生成AIの導入から約1年が経ちますが、これまでの実績から大きな可能性を感じています。今後は、大学が掲げるビジョンの実現に向けて、生成AIをいかに戦略的に活用していくかが問われることになるでしょう。また、大学には、学生、保護者、教員などさまざまなステークホルダーが関わっていますが、それに対して新たな価値を提供できるような生成AIの活



用方法を本格的に検討していかねばならないと思っています。今後はDX化の次の段階として具体的なビジョンを明確にし、未来のモデルケースを創出するために、生成AIの活用に取り組んでいきたいと考えています。

坂倉 生成AIはもはや当たり前前の存在になっていて、学生にも想像以上のスピードで浸透しています。職員にとっては、生成AIを「使うか使わないか」という選択ではなく、生成AIが当たり前に使われる社会になっていることを前提に、業務や大学サービスを考えることが重要だと思っています。例えば、大学情報をWebで検索する場合も、生成AI要約による検索が増え、検索エンジン対策ではなく生成AIに参照してもらいやすくする対策が大事になっており、HPの作り方一つでも、生成AI前提に考えていく必要があります。

また、大学事務は書類ベースで、規程やルールに基づくマニュアル化された反復的な業務も多く、誰がやっても同じ結果を求められることが少なくありません。まさに生成AIによる代替効果が高い業務であり、将来的には大学職員の業務が生成AIに取って代わられる可能性も高いと思います。ただし、生成AIを脅威と捉えるか、機会と捉え



るかは、生成AIの使い方次第ではないでしょうか。重要なのは、生成AIの活用を時短・業務効率化にとどめるのではなく、業務やサービスの質的な変化をいかに生み出せるかにつなげていくことです。生成AIによる効率化やスキル拡張といった恩恵を受けることができれば、新しい業務・サービスを考える時間を増やせたり、今までできなかったことができるようになったりします。「生成AIのおかげで仕事が楽になった」ではなく、生成AI時代にあるべき大学の業務の進め方やサービスを考えて「生成AIで新しいことをやってみよう」という主体的なチャレンジ精神を職員は持つべきだと思います。そのために、本学でも多くの職員に生成AIに触れてもらい、生成AIの活用方法を考えていく機会を作っていきたいと思います。

河越 皆さまのお話を伺って、既に生成AIが当たり前前の存在になっており、大学事務の在り方も変わっていく局面にあることを実感しました。本日はありがとうございました。

※1 生成AIが、誤認や論理の矛盾を含む事象や、事実に基づかない情報を作り出してしまう現象のこと。

※2 個人情報の第三者への提供を許可しないことや、不要な情報を受け取ることを拒否することなど。

ed Campus

大学がまちにひらく
—キャンパスから広がる関係性—

少子化の進行に伴い、大学を取り巻く環境は一層厳しさを増している。しかし同時に、大学はその存在意義を問い直し、地域との共生を前提とした新たな挑戦を始めている。近年のキャンパス新設や移転、施設開設の動きのなかには、教育・研究の場にとどまらず、地域社会にひらかれた拠点を志向するものが増えており、地域連携や地域開放を意識した空間設計が施され、大学が「まちのインフラ」として機能する可能性が注目されている。

本企画では、大学キャンパスを単なる教育・研究の場としてだけでなく、地域住民との「共創空間」として捉え、都市部や地方などそれぞれの立地特性を踏まえながら共生型キャンパス整備を行う事例に着目するとともに

CONTENTS

地域とともに未来を共創する大学

—理論・実践・対話の特徴とするCOIUの挑戦—

今永典秀

コー・イノベーション大学事務局長・教授

地域のウェルビーイング活動のために

—さいたま市見沼区・大宮キャンパスの挑戦—

澤田英行

芝浦工業大学システム理工学部長・

環境システム学科教授

Community-engag

に、大学が担う新たな社会的役割について考察する。
大学がまちにひらかれることで、地域との結びつきは深まり、大学の存在意義そのものが再評価される。そうした取り組みの先進事例を取り上げ、今後の共生型キャンパスづくりを考える機会としたい。



交わることで、未来が生まれる

—Spark Baseがつくる

多様な人々の挑戦と共創のコミュニティ

永野 誠

関西学院大学

社会連携・インキュベーション推進課長

共創型キャンパスにおける新たな挑戦

三宅 雅人

立命館大学副学長・社会共創推進本部長・

OIC総合研究機構教授

「門のない大学」を超えて「まちと融合した大学」へ

北野 寧彦

早稲田大学キャンパス企画部長

地域連携教育の新展開

—知的好奇心が伝播する格好つけない

愛知大学の地域連携教育—

太田 幸治

愛知大学ささしま地域連携研究センター (ASITASIA)
センター長・地域連携室副室長・経営学部教授

地域とともに未来を

共創する大学

ー理論・実践・対話の特徴とする
COIUの挑戦ー

今永典秀

コー・イノベーション大学
事務局長・教授

はじめに

これからの日本社会は、人口減少・高齢化の進展に伴うさまざまな課題やAIをはじめとするテクノロジーの急速な進展などにより、これまでの価値観や社会構造を根本から問い直すような転換期にある。さまざまな地域課題・社会課題は複雑な要因が絡み合い、単独の知識による解決は困難な状況にある。こうした状況の中で、大学は単に知識を教える場ではなく、人と人、地域と地域、そして知と知を結びつけ、社会の課題とともに未来を構

想する「共創の場」としての再定義が求められている。コー・イノベーション大学 (Co-Innovation University) / 以下COIU (コアイユ) は、時代背景を捉えて2026年4月に誕生する新設大学である「図」。



〔図〕大学周辺マップ

COIUの建学の精神は、「共に文明を問い、未来を共創する」である。複雑化した課題に対して、分野や立場を越境し、課題解決を通して、未来を共に創り出す行為そのものを、学びの中心に据える。学部・学科は、共創学部



[写真]まちなかキャンパス

地域共創学科、定員は1学年120名である。キャンパスは岐阜県飛騨市の古川町地域に位置し、旅館・民家・ホテルを改装した建物を使用。この「まちなかキャンパス」は、地域の人たちにも開かれていることをコンセプトとしており、各キャンパス同士は徒歩10分圏内に位置している。入学初年度はここを学びの拠点とする「写真」。

1 地域に根ざし、全国の課題に応答する 大学構想の展開

COIUは飛騨市古川町地域を本拠地とし、全国の連携地域での実践を展開する。COIUの構想が具体化し始めたのは、2020年度に飛騨市との間で締結された包括連携協定に端を発している。この協定は、地域の未来を担う人材を育成し、地域課題の解決を通じて新しい社会的価値を創出することを目的として締結されたものであった。飛騨市という地方都市を舞台に、地域が大学を支え、大学が地域に開かれるという、双方向の関係を築くことを目指した先駆的な試みである。

しかし、飛騨市に限らず、地方が抱える課題は一地域

にとどまるものではなく、日本全体の社会構造的課題の縮図であるという認識が存在していた。人口減少、若者の流出などを発端とする地域におけるさまざまな課題は、全国の多くの地域社会にも共通して見られる。

この理念のもとで大学設立の準備が進むにつれ、飛騨市をはじめとして、北海道から九州に至るまで、複数の自治体、企業、NPOなどから賛同と期待の声が寄せられた。具体的には、宮城県仙台市、新潟県胎内市、富山県射水市、長野県小布施町、愛知県田原市、福岡県福岡市など、全国十五の地域との間で連携協定や要望書などの提出を通じて大学設立への参画を表明している。このようにして、COIUは、飛騨という一地域から出発し、全国の地域課題に応答する大学へと構想が発展していった。

COIUの理念の核にある「共創」は、ただ、一緒に手を組んで取り組むことを意味するわけではない。「コー・イノベーション」という大学の名称も本学独自の造語であるが、地域課題を捉えて、解決に向けて踏み出すこと、イノベーションを創発することを意味する名称を名付けたことにも込められている。COIUにとっての「共創」

の定義は、地域、組織、所属する立場を越境し、異なる環境に属する人たちが、各々の知識や経験を掛け合わせ、複雑な課題を解決することを目指して、一緒に行動することである。

2 COIUの学びの特徴

COIUが掲げる共創学は、経済学や経営学の学術的な理論を軸に、デジタル領域やデータ分析などの調査手法をもとに、地域や立場が異なる他者との信頼関係を構築し、他者と解決に向けて協働し、地域課題や社会課題の解決に向けて行動し、「理論」・「対話」・「実践」を往還することを目指すための学問である。

1年次には、全学生が飛騨市での学修を通じて、共創や探究の基本となる理論と対話の基礎を学ぶ。ここでは、地域社会の構造理解、課題の抽出、チームでの協働などを重視し、社会課題を主体的に捉える力を育む。

2年次には、学生が連携地域においてボンディングシップに参加する。週3日を実践に、残り2日をオンライン環境で知識の修得を目指す。現場での実践と理論的学び

を往還させることを実現する。

3年次以降は、ボンディングシップでの実践経験をもとに、「地域共創演習」や「先端共創演習」といった発展科目のいずれかを選択する。ここでは、学生自身が課題を設定し、地域・企業・行政と連携してプロジェクトを企画・推進する段階に移行する。このように、COIUのカリキュラムは「探究から実践、『理論』・『対話』・『実践』を往還し、共創へ」という学びのプロセスを体系的に構築されている。

3

ボンディングシップ ― 共創を体现する長期実践型学修 ―

COIUの学びの最大の特徴が、2年次に実施される「ボンディングシップ」である。「bond（絆）」と「Internship（実習）」を組み合わせた本学独自の概念であり、単なる就業体験や採用直結型のインターンシップとは一線を画している。学生が地域社会の中で他者と関わり合い、自己と社会の関係を見つめ直し、共に価値を創造する実践教育である。（「COIUボンディングシッ

プバイブル」参照*https://note.com/coiu_2026/na0d79947c5a8)

学生は現場において、地域の人々や企業、行政、NPOなど多様な主体と関わり、現実の課題を自らの学びの対象として引き受ける。

このプログラムの特徴は、学生は単に現場で経験を積むのではなく、地域の課題や組織の現状を分析し、現地の人々との対話を重ねながら新たな価値創出の手がかりを見いだす点にある。

ボンディングシップは、教育体系の中核に位置づけられた学修プログラムである。学びは段階的に構成され、1年次は飛騨での理論と対話の基礎、2年次は実践、3年次以降の発展的学習（「理論」・「対話」・「実践」の往還）へと連続的に展開していく。

4 ― 地域・企業・教職員の共創体制

ボンディングシップを支えるのは、大学、地域、企業が三位一体で形成する共創的教育体制である。地域や企業は、学生の教育を支援する「協力者」ではなく、学び

の「共創者」として位置づけられている。

受入地域や企業は、教育目的を理解した上で学生を受け入れ、現場での学びを共に設計する。大学側では、理論的支援と実践的助言を行う体制を整えている。教職員は学生の活動を日常的にモニタリングし、現場との対話を重ねながら学びの質を保証している。学生、教職員（大学）、地域・企業、地域の住民などの多様なアクターが一体となって、地域の課題・社会変革を目指して、共に未来を共創することに特徴がある。

5 3年次以降の学び「先端演習」 ー地域との共創へー

COIUの学びの体系は、段階的カリキュラムに加えて、「理論」・「対話」・「実践」を往還する探究の連続体として設計されている点に特徴がある。2年次のボンディングシップは、学生が社会と接続し、課題解決に挑む初めての本格的実践で、2年間の学びを踏まえて、3年次以降は「地域共創演習」「先端共創演習」のいずれかを選択する。いずれも、ボンディングシップで得た経験知を再

構成し、理論と対話の学びを統合し、社会変革を具体化に向けた実践と位置づけている。

2年間の理論と対話と実践の学びを起点に学生が主体的に課題を設定し、担当教員と共に、地域・企業・行政と協働して社会実装に挑むプロセスである。この2年間の中で「共創」を実現し、養成する人材である「共創の実現に向けて、『理論』・『対話』・『実践』を往還するプロセスを通じて、地域や立場を越境し、課題解決および社会変革を実行する力を備えた人材」となることを目指す。

おわりに ー共創型大学が切り拓く知の新地平ー

COIUは、社会の変化を観察し、分析する場ではなく、その変化を人とともに未来を創造する「共創の場」として構想された大学である。ここでは、学びが社会と切り離された体系的知として存在するのではなく、地域の現場に根ざした実践の中から立ち上がり、社会の変革を推進する力となる。

本学が提示する教育モデルは、学生と教職員、地域住民、

企業、行政がそれぞれの立場を超えて関わり合い、共に学び、共に成長し、共に未来を共創することを目指すものである。大学という場が社会の中に開かれ、人々がつながるハブとなることで、知が社会へと循環する新しい知的基盤が形成されることが期待される。

このような教育の根底にあるのは、「共創」「理論対話と実践」というキーワードである。理論を通して社会を構造的に理解し、対話を通して他者と向き合い、実践を通して社会を変革する。これらが往還することによって生まれる「地域・地域企業との共創」が、学生一人ひとりの成長を支えると同時に、地域社会そのものを変えていく駆動力となることが期待される。

4年間の地域と連携した学びの意義は、単に地域貢献や課題解決を目指す点にとどまらない。大学・地域・企業・行政の多様なステークホルダーが協働し、社会に新しい価値を生み出すプロセスそのものが、教育プログラムとして機能する点にもある。4年間COIUで学び、卒業した学生は、地域のさまざまなアクターとの共創を経験した人材である。地域との関わりを有し、地域課題・社会課題解決の担い手として、「理論」・「対話」・「実践」

を通して、共創し、未来を創造する担い手となることが期待される。

コー・イノベーション大学の挑戦は、決して大学内部に閉じた教育改革ではない。学生、教職員、地域住民、企業、行政、NPOなど、あらゆるステークホルダーが共に学び、共に考え、共に行動することで、日本の地域の未来を共創する社会的実践そのものである。こうした共創の輪が全国各地に広がっていくとき、大学は社会の変革を支える知のプラットフォームとして、持続可能な日本の未来とともに築く原動力となるであろう。

※ COIUボンディングシップバイブル
https://note.com/coiu_2026/n/na0d79947c5a8



地域のウェルビーイング活動のために

ーさいたま市見沼区・大宮キャンパスの挑戦ー

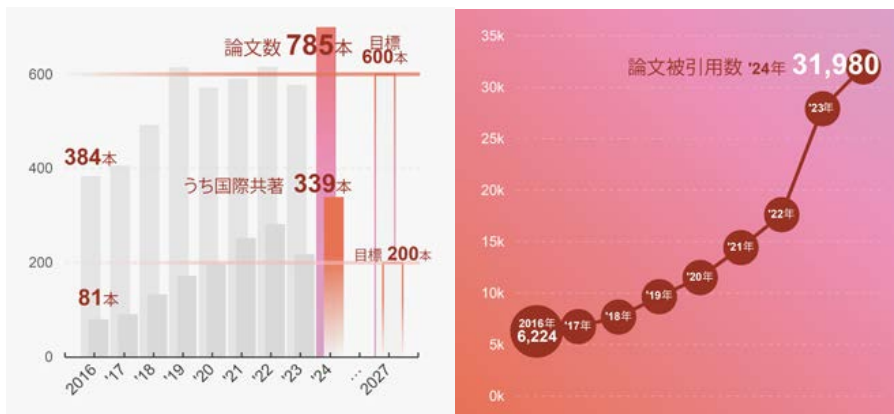
澤田 英行

芝浦工業大学システム理工学部長・
環境システム学科教授

1 新時代を担う 「社会に貢献する技術者」育成への挑戦

来る2027年、芝浦工業大学は創立100周年を迎える。この機に際し本学は、建学の精神「社会に学び、社会に貢献する技術者の育成」の原点に立ち返り、社会の要請に応える教育の質のさらなる向上を目指し、全学の求心力を高め、新たな挑戦に取り組んでいる。100周年達成に向けた長期ビジョン「Centennial SIT Action (CSA)」の実現を目的としており、特にキャンパスの再整備と教育研究環境の向上に重点を置くものである。C

SAの取り組み課題に「理工学教育日本一」「グローバル理工学教育モデル校」「教職協働トップランナー」「ダイバーシティ推進先進校」、そして「知と地の創造拠点」「図1」を掲げ、KPIをもって行程を管理し、PDCAサイクルを展開し目標達成に臨んでいる。



〔図1〕地と知の創造拠点ー研究力の強化と社会実装・社会連携
※いずれもElsevier社「Scopus」の集計から

2

元気な地域社会をつくる O-CAMP2027の取り組み

本学は、都市型の豊洲キャンパスと郊外型の大宮キャンパスを有し、4学部生7939名、院生1928名を擁する。2026年で60周年を迎える大宮キャンパスは、CSAの「知と地の創造拠点」における研究力の強化と社会実装力の向上、SDGs・脱炭素社会への貢献、さらには地域連携を強化することを目的とした再整備計画「O-CAMP2027 (Omiya Campus Master Plan 2027)」を実践中である。

O-CAMP2027の主な内容としては、分野横断型教育を促進し※1特定成長分野とされるデジタル・グリーン・ウェルビーイング※2の拡充を図る新たな教育研究環境を具現す



〔図2〕デジタル・グリーン・ウェルビーイングの分野を拡充する新校舎

る新校舎の建設〔図2〕、グリーンキャンパス※3の充実、キャンパス全体で取り組む脱炭素への貢献※4、そしてキャンパスの地域開放である。

3 地域住民のQOLを向上する大学キャンパスへ

大宮キャンパスを拠点とするシステム理工学部は、2026年度から分野横断型教育を促進する課程制を導入し、5課程11コースの教育プログラムに改組する。デジタル・グリーン・ウェルビーイングの分野である情報課程、建築・環境課程、生命科学課程は収容定員を増やす。生命科学課程は、生命活動を解明する「生命科学コース」と機能回復を支援する「医工学コース」の2領域に加え、健康な人のさらなる健康を目指す「スポーツ工学コース」〔図3〕を新設する。スポーツ科学に工学を掛け合わせることで、乳児から高齢者まで多様な人のウェルビーイング向上を目指すものである。生命現象の解明や健康寿命の延伸に寄与する生命科学領域と医療・福祉機器の研究開発や工学技術を基盤とした生体現象を解明する医工学領域、そして身体活動の機序を理解し、すべ

ての人々が楽しむためのスポーツ関連機器の研究開発を行うスポーツ工学領域を加えた3領域を展開することで、社会的役割を拡張する。それぞれ異なるアプローチで、人々の生活の質(QOL: Quality of Life)の向上に取り組む、「ウェルビーイング」の実現を目指す。生命科学、医工学、スポーツ工学が分野横断的に連動して機能すること、すべての人々を対象とした健康な生活や福祉の促進に貢献できる教育研究が可能となる。大宮キャンパ



【図3】健康増進・身体機能の発展を工学でマネジメントする「スポーツ工学コース」を新設

スの地域開放は、キャンパスを物理的に開放するだけではなく、地域の人々が学術的な知見を背景に、ウェルビーイングを学び、体験的に自らの「健康」を知ることができ大学として地域開放される。

4 地域住民と学生の共創活動

大宮キャンパスが立地するさいたま市見沼区が掲げる「見沼区のまちづくり」の施策は、①見沼の自然を生かし、身近に感じられるまち、②人にやさしく、ふれあいのあるまち、③動きやすく、生活しやすいまち、④地域ぐるみで進める安全・安心なまち、である。大宮キャンパスはそうした地域連携活動の場所ともなっている。自然に溢れた「グリーンキャンパス」を生かした「花植え活動」は、上の施策の実践的活動の一つである。学生活動団体「CMT (COLOR MY TOWN、私の街を彩る)」が主となる「CMTフラワープロジェクト」では、「花を咲かせ続けるためのコミュニケーションの証として『花』がある」をモットーに、地域住民・学生・教職員が一体的な共創活動を展開している。「花植え活動」は、「生きが



いづくり」「外出機会の創出」「健康増進」「社会的つながりの維持」を目的としており、地域住民の「個々の健康」と「まちのウェルビーイング」への意識の醸成につながっている。年1回春には、「見沼区オープンガーデン（見沼区花と緑のまちづくりの推進、区事業）」がキャンパスで開催され、学生・教職員と多くの地域住民の交流が図られている「写真1」。

[写真1] 地域住民・学生・教職員の協働活動「CMTフラワープロジェクト」

5―地域健康増進センター(仮称)―構想

2015年に「さいたま市と芝浦工業大学とのイノベーションに関する連携協定」、2023年には、「さいたま市と芝浦工業大学とのSDGs推進活動に係る連携協定」を締結し、さいたま市産学官金連携事業と本学100周年記念事業「O-CAMP2027」のタイアップを進めている。キャンパス全体の利活用を念頭に地域連携を促進するものである。特に、新校舎(2025年12月竣工)は、ウェルビーイングの実現に貢献するための研究・実験施設を装備し、生命科学分野の先進的な研究活動を拡充する教育研究の場である。広やかな芝生広場に面した1階には「地域健康増進センター(仮称)」「図4」とフィットネスジムや身体運動・筋力測定実験室などを配置し、学生・研究者と地域住民が交流を図り、ウェルビーイングについて体験的に学べる施設として利用される。

健康づくりに関する市民の声として、「運動する場所や時間がない」「健康の学び方がわからない」などが多く、一人一人の生活に応じた健康づくりの環境整備と機会創

出が必要であることがわかっている。「地域健康増進センター(仮称)」は、生命科学の学術的な知識・技術を背景にして、市民が自らの健康を知り行動するきっかけとなる、人々と地域のウェルビーイングを実現する活動拠点である。「さいたま市健康づくり計画(2024～2035)」の「地域と共につくる自分の健康」の具体的な取り組みとして位置付け、さいたま市との共同事業化を構想中である。

また、さいたま市は「さいたまスポーツシユレ」事業を進めており、「スポーツを『する場』『学ぶ場』を確保するとともに、企業・大学・団体などが持つ最新の知見・技術を活用した実証実験など、新たなスポーツ産業の成長の場」の創生を目指している。大宮キャンパスを拠点とするシステム理工学部は、将来のスポーツ振興の担い手の育成、持続可能なスポーツ環境の整備、さらにはスポーツビジネス・スポーツ産業の創出・活性化にも取り組み、本事業にも貢献できるものである。

新校舎には、eスポーツスタジオも設置する。eスポーツは、さいたま市のスポーツ施策への導入が検討されており、さいたま市と共同で、子どもを対象にeス

ポーツの実施がもたらす効果を検証している（eスポーツ実証事業）。今後、本施設において多世代にわたるeスポーツの可能性を探ることになる。

右記の施設群を社会に定着させるために、新校舎には産学官金連携拠点を設ける。地元企業、地域自治体、金融機関、大学が持つそれぞれの強みを結集し、イノベーションの創出を通して地域の活性化を図ることを目的とするもので、産学官金（「金」は「金融」）が日常的に情報交流し、共同研究を通してイノベーションを創発する共創拠点として運営する予定である。

6 立地特性を生かした 地域共生型キャンパスの可能性

さいたま市が手掛ける「さいたま発の公民学によるグリーン共創モデル事業」において、本学大宮キャンパスは、市の北エリアの拠点と位置付けられる。ハード面としては、新校舎を拠点としたデジタル・グリーン・ウェルビーイング分野の先進的な研究活動を支える施設群の整備、キャンパス全体で取り組む再エネ、省エネ、創エ



[図4] 研究機関を背景とした「地域健康増進センター(仮称)」構想

ネ（グリーンキャンパス）の実現を担い、ソフト面では、デジタル・グリーン・ウェルビーイングの先進的な教育研究の推進、学生主体のイノベーション促進、多様なステークホルダーとの連携による地域貢献の中核拠点の創出が主なる役割である「図5」。

システム理工学部教育カリキュラムは、実際の社会課題の解決を目的とした正課科目を数多く用意しており、地域社会に向いて学修する機会も多い。加えてキャンパス内でも同様の地域連携活動が展開されている。今後の新校舎完成後は、「社会に学び社会に貢献する」学修機会がますます増える。

しかし、このような開かれたキャンパスを実現するにはまだ多くの課題がある。各施設内の研究活動情報に関する秘匿性の確保、多様なステークホルダーの受け入れ時の安全性の確保、そして教職員の業務負荷の増大に対する解決など、ハードからソフトにわたる対応策が求められる。キャンパスのセキュリティ設備、および教職員の組織体制の見直しを図る必要がある。

社会や地域に巻き起こるさまざまな課題は、多様化、複雑化し、その解決のためには、複数の分野にまたがる専



〔図5〕まちと一体的に成長し続ける「グリーンキャンパス」

門知識とさまざまな価値観や異なる意見を持つ人々とのコミュニケーションが必要となる。地域社会に開かれた多様な人々が往来するオープンな学修空間の整備は、学生自身の主体的な社会貢献意識を醸成し、社会ニーズに応えるイノベーションを具現できるグローバル理工系人材の育成に欠かせない。工業大学として必ずやり遂げるべき挑戦である。

〈注〉

- ※1 複数の理工学分野の知識・技術を融合して問題解決できる人材を育成するために学科制から課程制へ段階的に移行中
- ※2 ウェルビーイングとは、個人の「健康」にとどまらず、「生きがい」など、将来にわたる持続的な幸福にまで広がる概念であり、地域社会全体の幸福感を示す指標としても位置付けられる。
- ※3 グリーンキャンパスとは、「環境に優しいキャンパス」として本学が商標登録（商標登録第4584482号）した大宮キャンパスの名称
- ※4 環境省「令和4年第1回脱炭素先行地域」において、本学はさいたま市、埼玉大学、東京電力パワーグリッドと共同提案し選定され計画を実践中

交わることで、未来が生まれる

ーSpark Baseがはくくる

多様な人々の挑戦と共創のコミュニティー

永野 誠

関西学院大学
社会連携・インキュベーション推進課長

はつめーKSC Co-Creation Villageの誕生ー

関西学院大学神戸三田キャンパス（以下、KSC）は、1995年4月に開設され、兵庫県三田市に位置する。自然と建築が調和するキャンパスで約6400名の学部生・大学院生が学んでいる。

現在、KSCには理系4学部（理・工・生命環境・建築）と総合政策学部があり、文理を超えた学びや国際プログラム、多様な研究テーマを志向する教育環境が構築されている。2025年春、KSCの隣接地に「KSC Co-Creation Village」が誕生した。これは、インキュベー

ション（起業支援）施設「Spark Base」、学生寮「創新寮」、商業施設から構成される複合施設である。

「KSC Co-Creation Village」の施設構成は以下の通り。

・インキュベーション施設「Spark Base」

2階建て延べ床面積約1100平米。1階にはワークショップルーム、ミーティングルーム、3Dプリンタなどを備えたラボ、カフェなど、2階はレンタルオフィス、共用のキッチンなどを設置。会員制度を有し、本学の学生と教職員に限らず、自治体、企業、地域住民も利用可能。

・学生寮「創新寮」

4階建て4棟構成、300室。共用部にはラウンジ、シアター、音楽スタジオ、シェアキッチン、カフェテリアなどを設置。

・商業施設

地域住民にも開かれた施設としてフィットネスジムを運営。

次章以降では、Spark Baseを取り上げ、具体的な取り組みや成果、今後の展望を紹介していきたい。

1 | Spark Baseの構想

Spark Baseは二つの柱を掲げている。具体的には、①起業家の育成、②研究成果の社会実装、③地域課題の解決である。これらは互いに独立した取り組みではなく、相互に関連し合い、結び付くことによって、KSCという特性を最大限に活かした共創拠点の形成を目指している。

第一の柱である「起業家の育成」は、単に将来の起業家を輩出することを目的とするものではない。自ら課題を見いだし、仲間と共にアイデアを磨き、社会に新たな価値を生み出す力―すなわちアントレプレナーシップを育むことに重点を置いている。

この価値創造は、会社設立に限らず、社会課題の解決や地域コミュニティへの貢献など、広い分野に及ぶ。

そのため、Spark Baseにはカフェやラウンジ、オープンスペース、ワークショップエリアなど、創造的な対話が自然に生まれる環境が整えられている。こうした空間では、学生同士のみならず、地域住民や企業関係者など学外の利用者との交流が生まれ、多様な視点の交差が新たな挑戦の芽を育んでいる。

第二の柱である「研究成果の社会実装」は、本学が持つ知的資源を社会に開き、地域や産業の発展に生かしていく取り組みである。KSCでは、環境エネルギーやバイオテクノロジーなど、多様な分野で先端的な研究が進められており、その成果を社会に還元することが求められている。

研究活動そのものはキャンパス内の研究室を拠点として行われるが、そこで得られた成果を社会へと展開していく拠点となるのがSpark Baseである。Spark Baseは、今後、研究者の知見を企業・自治体・地域社会など多様な主体と結び付け、社会課題の解決や新たな事業・仕組みの創出につなげていく「橋渡し」の役割を担う。

第三の柱である「地域課題の解決」は、大学と地域社会との新たな関係を築くうえで欠かせない視点である。三田市では、少子高齢化の進行に加え、それに伴う地域コミュニティ機能の維持や担い手不足が課題となっている。こうした傾向は全国の地方都市にも共通して見られるものであり、地域社会の持続可能性を左右する重要なテーマといえる。

Spark Baseを拠点に、教員や学生が地域の現場に入り、

住民・自治体・企業と協働して実践的なプロジェクトに取り組むことで、地域に新たな知見や技術をもたらすと同時に、地域側にも新しい視点や人的ネットワークが広がる。こうした協働は、地域の活性化と学生の成長を同時に促す好循環を生み出す可能性を秘めている。



〔写真1〕Spark Base 外観

2 Spark Baseが展開する取り組み

Spark Baseでは、利用者が、それぞれの経験や知識、価値観を持ち寄ることによって単なる「学びの場」を超えた協働と共創のコミュニティが形成されている点が特徴である。このコミュニティ形成を担っているのが常駐するコミュニティマネージャーである。日々、利用者に声をかけ、ランチミーティングなどの企画を通じて、偶発的な出会いやネットワークづくりを促している。さらに、コミュニティマネージャーは利用者から寄せられる願いや悩みに耳を傾け、それぞれの目標実現や課題解決を支援している。たとえば、「イベントを企画してみたいが経験がない」といった声を受け、まずは少人数での開催をサポートするなど、最初の一步を踏み出すきっかけを提供している。

その一方で、Spark Base運営を担う社会連携・インキュベーション推進センターも、Spark Baseを拠点に多様なプログラムやイベントを企画・実施している。これらは単なる講義形式にとどまらず、「実践」と「交流」の両面を重視して設計されており、参加者が主体的に考

え、課題に取り組むプロセスを大切にしている。テーマは、コミュニケーション、テクノロジー、地域課題解決、キャリア形成など多岐にわたり、アントレプレナーシップを学び始める初期段階から、実際に挑戦を形にしている実践段階まで、多様な層がそれぞれの関心やレベルに応じて参加できるよう工夫されている。

Spark Baseで実施した4つのプログラムを紹介したい。

● アイスブレイクを学ぶワークショップ

初対面の相手と円滑にコミュニケーションを図り、信頼関係を築くスキルを学ぶ機会として開催した。起業に直結するプログラムではないが、今後の挑戦や協働の基盤のひとつとなるスキルであり、単なる「場慣れ」とどまらず、挑戦するためのマインドセットを育む重要な一歩といえる。

このワークショップには多様な世代や所属の参加者が集い、テーマを学ぶだけでなく、世代や立場を超えた交流が自然に生まれた。

● ゼロからアイデアを生み出すアイディエーションワークショップ

AIを活用した事業開発ワークショップ。参加者は、



[写真2] アイスブレイクワークショップ

事業開発の基本的な考え方や、社会課題からビジネスアイデアを構想するための思考フレーム、AI活用事例などについて講師からレクチャーを受けた後、自らの「問い」を出発点にビジネスの種を見つけるワークに取り組んだ。さらに、AIビジネスプラン生成ツールを活用し、各自

が新しいアイデアを短時間で具体的な事業プランに落とし込む実践も行われた。「ぼんやりと考えていたアイデアが想像以上に短時間で形になった」といった参加者の声が寄せられた。

●さんだシードーあすへのたねまきワークショップ

自分自身の価値観や関心を見つめ直し、地域との関わり方を主体的に考える探究型のワークショップ。まず、自身の経験や感情を振り返り価値観を言語化することで「自分だけの問い」を発見。次のステップで、その問いを手がかりに地域課題との接点を探り、マーケティング思考などを活用して解決アイデアを構想する。対象は、地域活動に関心を持つ大学生・高校生で、地域活動実践への入口となるプログラムである。参加者からは「自分だからこそその問いを見つけ、行動のきっかけになった」といった声が寄せられた。

●ライフキャリアワークシヨップ

社会人のミドルキャリア層を対象としたワークシヨップ。同世代の参加者同士がそれぞれの経験や価値観を共有し、違いを認識することを通じて、自身のキャリアを振り返り、今後の生き方の方向性を考える機会となった。「立ち

止まって自身を見つめ直す貴重な時間になった」と振り返る参加者もいた。プログラム終了後には、自らの夢の実現に向けてSpark Baseのロハ・ユニティマネージャーに相談する姿も見られ、参加を契機として新たな行動が生まれている。このようなプログラムを通じて、Spark Baseがキャリアの再構築や挑戦のきっかけを提供する場になっていることが窺える。

このような取り組みの積み重ねがSpark Baseが目指す「共創の拠点」の実現につながるものである。

3 立ち上がり期の成果と今後の展望

Spark Baseが開設して約9カ月が経過した(2025年12月時点)。現在は運営体制やプログラム内容を模索しながら、試行錯誤を重ねている段階である。そうした中でも、プログラムやイベントを通じて、キャンパス内外の人々が交わる新しい動きが着実に生まれ始めている点は大きな成果といえる。

一方で、課題も見えてきた。特に、創新寮との連携は、まだ本格的には始まっていない。この規模の学生寮を併

設したインキュベーション施設は珍しく、また、寮生は Spark Base にとって最も近い学生であるため、Spark Base のへビュユーザーとして他の利用者との交流を通じた相互刺激が期待される。今後は、利用増を狙い、寮生向けの説明会や見学会、プロジェクト参加の機会を設けるなど、寮と Spark Base をつなぐ仕組みづくりが重要となる。

また、プログラム内容の体系化も大きなテーマである。現在、さまざまな企画を実施しているが、アントレプレナーシップの習得・発揮の各段階に応じた十分な構成とはいえない。初学者から実践者まで、幅広い層に適切な学びと挑戦の機会を提供できるよう、段階性の強化が求められている。

Spark Base は、いわゆるインキュベーション機能にとどまらない施設である。今後、より多くの人々がこの場に集い、互いに刺激を受けながら、新しい価値を創り出していく拠点となることを目指している。そのためには、やってみたいことや目標がまだ明確でなくても、まずは行動してみる、踏み出してみる第一歩として Spark Base を訪れてほしい。誰もがこの拠点を活用し、自らの挑戦

を形にしていくことを期待したい。その歩みは決して一足飛びではないが、三日月が満ちていくように、学びと経験を重ねながら確かな光を放っていく—Spark Base は、その成長を見守り、支えていく場所である。



[写真3] アイディエーションワークショップ

共創型キャンパスにおける 新たな挑戦

三宅 雅人

立命館大学副学長・社会共創推進本部長・
OIC 総合研究機構教授

はじめに

大阪いばらきキャンパス（OIC）は、立命館大学が掲げる「地域とともに歩む大学」の理念を体现する場として、2015年に開設された。大阪府茨木市という都市と自然が調和する地に位置し、単なる教育・研究の場にとどまらず、地域社会との共創を目指す「開かれたキャンパス」として設計された。OICの特徴は、キャンパスの境界に塀も門もなく、物理的な開放性と地域との心理的な距離の近さにある。キャンパス内には一般市民も利用できるカフェや広場が点在し、学生と地域住民が自然に交わる空間が形成されている。また、地域イベントや公

開講座などを通じて、大学の知的資源を地域に還元する取り組みも積極的に行っている。このようなOICの成り立ちは、大学が社会の一部として機能することの重要性を再認識させるものであり、教育・研究・地域貢献の三位一体の実現に向けた挑戦の第一歩であった。

1 大学が地域社会のハブとなる拠点に

2024年4月、映像学部・研究科、情報理工学部・研究科のOIC移転に伴い、新校舎であるH棟を建設した。このH棟は、単なる学部・研究科の移転先ではなく、2018年に制定された立命館の学園ビジョンR2030に照らし合わせて「挑戦をもっと自由に」、



[写真1] いばらき×立命館 DAYでの様子

そして社会とつながる「ソーシャルコネクティッド・キャンパス構想」を実現するための機能を持たせる「共創」をキーワードに設計された次世代型の学びの拠点である。設計コンセプトは「異分野融合」と「実践的学びの場の創出」である。1階にはガラス張りの研究室が9つ設置され、市民や企業の方など教育・研究活動の「見える化」を推進し、学内外の多様なプレイヤーとの協働を加速する場となっている。学生は研究内容を紹介する機会も増え、研究のプレゼンテーション能力も向上している。また、分野・領域を問わず、先端研究、SDGs、社会課題解決、地域連携、外部機関との連携など、開かれた大学を体現している「写真1」。

2 社会共創推進本部を新たに設置

この学部・研究科の移転に伴い、立命館大学は2024年度、「社会共創推進本部（R i C C I : Ritsumeikan Co-Creation Initiative）」を設置し、政府・自治体、産業界、地域社会、世界の大学・研究機関と連携し、社会課題の発見・解決と新しい価値創出に挑戦している。大

学全体で社会共創を進めるために全学の組織として設置されており、その拠点として新たにH棟の4階に「Co-Creation Hub」を設け、企業・大学・教員・学生が集う場所として運営している。この本部には各学部・研究科から教員がR i C C Iフェローとして参画し、さらに他部署の職員も学内副業制度を活用して所属している。これにより、社会共創という大きな課題に対して大学のリソースを最大限に活用し、運営している。企業や自治体から、これまで大学のどこに相談すればよいか分からなかった案件などを本部に集約し、研究・教育など幅広い展開を進め、外部有識者で構成される社会共創アドバイザリーとも連携し、社会課題の解決に向けたプロジェクトを推進している。

3 社会課題の供給元となる企業コンソーシアム

社会共創推進本部では、企業と大学を結び、課題解決型プロジェクトを創出する会員制ネットワーク「R I N C (Ritsumeikan Innovation Network for Co-Creation)」を設置している。この制度は、企業が大学の

研究力や学生の柔軟な発想を活用し、DX推進や新規事業開発、地域課題解決など多様なプロジェクトを推進することを可能にしている。さらに、参画企業は、企業・教員・学生が交流するネットワーキングイベント「RINC MIX」を毎月定期開催し、プロジェクトの発表や研究紹介を通じて新たな連携を生み出している。参画企業・自治体は35団体を超え、重工業、コンサルティング、金融、人材サービス、環境ソリューション、IT企業など幅広い企業が参画し、

自治体や海外大学との連携を進めている。社会共創推進本部は、大学を「社会課題解決の場」「実証実験の場」として開放し、挑戦と創発を通じて未来を切り拓くプラットフォームを運営している「写真2」。2024年10月以降、企業からの社



〔写真2〕RINC MIXの様子

会課題解決プログラムは20プロジェクトを超え、企業の関心の高さがうかがえる状況である。このプロジェクトでは、企業・自治体から寄せられた課題を整理し、大学内の人員・設備と結び付けてプロジェクト設計を支援し、実行している。

4 地域社会との交流が加速する 市民参加型イベント

立命館大学OICが目指す「共創型キャンパス」の象徴的取り組みとして、「いばらき×立命館DAY」がある。大学が単独で主催する文化祭的なイベントではなく、OICと茨木市が共催し、2015年のキャンパス開設以来、地域・社会連携の一環として毎年開催しているオープンキャンパス型の地域交流イベントである。2025年は、企業・市民団体・学生・自治体から180を超える出展があり、来場者数も過去最多の3万人が参加している。会場では、学び、遊び、体験が融合し、学生は実社会との接点を得て成長し、地域住民や企業は大学との関わりを通じた新たな価値を見出す場となっている。こ

の他、昨年までは「Asia Week」、2025年からは国際交流フェスタ「Global Week」というイベントも開催している。このイベントは、大学と地域の国際交流を目的としている。具体的には、学生による研究発表やサークルなどの団体の活動紹介、異文化体験・国際交流の体験ブース、海外の料理や地産グルメの販売、企業・行政・学生団体による連携企画もあり、キャンパスステージでは学生団体からプロの演奏家のライブなど多岐にわたっている。以上のように、地域社会との交流を年間複数回企画・実施し、地域社会に密着した展開をしている。

5 社会に開かれた施設群

Microsoft Base

2024年4月に国内で初めて教育機関内に開設された唯一の施設がMicrosoft Base Ritsumeikanである。企業の専任スタッフが常駐し、DX人材育成、スタートアップ創成支援、立命館オリジナルAI、研究領域における「Microsoft Azure」・「Microsoft Learn」の活用や「MCPD」(Microsoft Certification Program: マイクロ

ソフト認定資格プログラム)の取得サポートなど、研究・教育に関わる幅広い活動を行っている。本施設は立命館の学生や教職員だけでなく、企業・自治体など学外の方が無料で参加できる初心者向けから応用編まで幅広いコンテンツのセミナー・イベントを定期的に開催し、ワークスペースも無料で開放している。開設から1年半で利用者数3662人、イベント実施回数123回、イベント参加者数1240人、個別相談件数74件と賑わっている施設である【写真3】。



【写真3】Microsoft Base Ritsumeikan でのセミナーの様子

社会共創デスク

立命館大学OICに設置された社会共創デスクは、企業・自治体・地域・学生・教員をリアルおよびハイブリッ

ドに繋ぐ共創拠点である。この施設は大阪府の公式の4番目の勤務地として登録されており、大阪府の職員は出張という形ではなく、通常の勤務場所として大学キャンパス内で業務を実施できる。また、茨木市はこの部屋に市役所のイントラネットを引き込み、市役所と変わらぬ環境で業務が実施できる体制を整えている。設置場所がH棟の1階中央に位置しているため、自治体関係者が日常的に身近に存在し、公務員志望の学生が相談や交流を行う場となっている。さらに、研究や授業での課題相談にも活用されている。一方的に自治体の要望を大学で展開するだけでなく、自治体の予算化の段階から参画し、本学だけでなく大学が取り組みやすい補助金制度の制定なども議論している。

6 地域企業との地域連携

OICでは、地域企業との連携も積極的に進めている。特に、茨木市に拠点を置く企業との産学連携プロジェクトは、学生にとって貴重な実践の場となっている。例えば、地元企業と連携した商品開発や、地域課題の解決を

目指すビジネスコンテストなどが開催され、学生のアイデアが実際のビジネスに結びつく事例も生まれている。また、OICに隣接する大型商業施設「イオンモール茨木」との連携も注目されている。学生が企画したイベントや展示がモール内で実施されるなど、大学と商業施設が協働することで地域のにぎわい創出にも貢献している。2025年3月、立命館大学とイオンモール茨木による共創プロジェクト「みんなで描くみらいの茨木2025―みらいの担い手とつくる、感じる」が開催された。これは、昨春に実施された「みんなで描くみらいの茨木ポスターコンテスト」に続く2回目の開催である。大学と社会をつなぐ共創プラットフォーム「TRY FIELD」の始動から1年が経過し、立命館大学と自治体や企業との間で生まれ、育まれてきた数多くの社会共創の取り組みを、市民とともに体感し共有する場として企画されたものである。共有された共創プロジェクトは18件に及ぶ。会場であるイオンモール茨木に設置されたステージでは、共創に関連して制作された映像作品の上映、音楽と映像のコラボレーション、スポーツ体験などが行われた。また、店内各所に設けられたブースでは、展示のみならず体験



[写真4]イオンモール茨木との共創プロジェクトの様子

型の企画も実施された。フロアでは子どもたちがロボットと会話したり、最新技術を体感できる場も用意された。こうした普段とは異なる光景に、買い物に訪れていた多くの市民が足を止め、興味深くステージを楽しみ、学生の呼びかけに応じてブースでのイベントやワークショップ

に参加した。最終的な参画者数は2700人に達した。こうした取り組みは、大学が地域社会の一員として果たすべき役割を再定義し、教育と地域貢献の新たなモデルを提示している。

さいごに―挑戦と失敗が育む未来―

共創型キャンパスとしてのOICは、単なる教育機関の枠を超え、地域社会とともに未来を創る場として進化を続けている。OICで展開されている多様な取り組みは、すべてが「共創」という理念のもとに結びついている。そしてその中心には、未来を担う学生たちの挑戦がある。これからの大学は、知識を伝える場であると同時に、社会とともに課題を発見し、解決に向けて行動する場でなければならない。OICがその先駆けとして果たす役割は大きく、今後も地域とともに歩みながら、挑戦と失敗を恐れず、未来を切り拓いていく活動を進めていくのである。

「門のない大学」を超えて 「まちと融合した大学」へ

北野 寧彦

早稲田大学キャンパス企画部長

1 キャンパス整備の理念

2032年に創立150周年を迎える早稲田大学は、本学のあるべき姿の実現に向け2013年度から「Waseda Vision 150」としてさまざまな改革に取り組んできた。そして現在、創立150周年記念事業として、さらに先の2050年を見据え、建学の精神である「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」の三つの教旨、そして創設者である大隈重信が説いた「一身一家一国の為のみならず。進んで世界に貢献する抱負が無ければならぬ。」の理念に立ち返り、「世界人類に貢献する大学」へと進化することを目指し改革を加速してい

る。記念事業の三つの柱は、研究・教育・貢献であり、それぞれの中核拠点として設置した「Global Research Center (GRC)」「Global Education Center (GEC)」「Global Citizenship Center (GCC)」が密接に連携し、総合知による人類への貢献を目指している。

一方、1997年に策定した「早稲田大学西早稲田（現在は、「早稲田」）キャンパス整備指針」におけるキャンパス整備の理念は、次の通りである。

『大学のキャンパスは、教育研究の基盤である。しかも、世代や時代を超えて、知的活動を志す多くの人々が出会い、交流する場面である。キャンパスを整備していくためには、個々の建物を対象とするだけでなく、建物群として形成される都市的空間や、建物以外の要素（外



〔写真1〕早稲田キャンパス正門前

構、造園、各種設備、備品、他）周辺地区との関係も良好な環境として形成されなければならない。本学のキャンパスは、進取の精神、学問の独立を謳う教育理念を反映したものであり、学生・教職員にとって、生涯にわたり「こころのふるさと」にふさわしい環境として、整えていくべきである。』（指針作成の目的）より一部を抜粋）

この理念は踏襲しつつ、創立150周年を迎える2032年に向け策定した「早稲田キャンパス整備指針 Waseda Campus Master Plan 2023」では、「成長するキャンパスから成熟するキャンパスへの転換」の方針を掲げている。大学構内の教育研究環境だけでなく、大学と周辺地域との相互関係を包含、大学を中心としながらまちと大学が共存し融合した地域を創ることをデザイン理念とし、「門のない大学」を超えて「まちと融合した大学」を目指している「写真1」。

2 都市インフラとしての大学キャンパス

キャンパス周辺を広域的な視点で見ると、大学キャンパスは都市公園などと同様に大きなスケールを持ち、重

要なグリーンインフラであるとともに、閉鎖的な大学キャンパスはまちを分断する要因となることが分かる「図1」。キャンパスの整備は教育研究環境を整えることが本分ではあるが、都市インフラとしてキャンパス内の緑化を整えることはもちろん、地域に対して大学が持つ資源を還元し、まちに開くことも大学の使命と考えている。本学には、早稲田キャンパスに「坪内博士記念演劇博物館」・「會津八一記念博物館」・「早稲田大学歴史館」、戸山キャンパスに「早稲田スポーツミュージアム」、本庄キャンパスに「本庄早稲田の杜ミュージアム」、計5つの一般に開放されたミュージアムがある。その意義は、本学から生成される「文化」の力を発信することにより、大学と社会の結びつきをより強め、ひいては社会の豊かさに貢献することにあると考えている。

ここでは、近年行った代表的な事例を2件示す。

「早稲田アリーナ」（2018年竣工）は、戸山キャンパスにある卒業式・入学式などのイベントにも活用する多目的スポーツアリーナである。最大の特徴は、通常であれば地上に計画し、大面積の屋根が敷地の大半を占めることとなるアリーナ部分を地下に埋め、その屋根部分



[図1] 早稲田周辺のキャンパスの状況

を豊かな緑化を施した屋上庭園としたところにある。

円形の芝生マウンドを有する「戸山の丘」は、ラーニングコモンズとカフェに面し、学生の憩いのスペースとしてだけではなく、近隣の保育施設の散歩コースなどにも利用されている「写真2」。かつての戸山キャンパスは休日には門を閉めていたが、早稲田アリーナの完成とともに開放すること近隣にお住まいの方々を含め多くの方に公園のように活用されている。ラーニングコモンズで学ぶ学生にとって、多様な属性の人々の活動が見える環境は社会とのつながりを意識できる貴重な場でもあると考えている。

「早稲田大学国



[写真2] 「戸山の丘」を南西上空より望む

際文学館（村上春樹ライブラリー）は、村上春樹氏所蔵の貴重資料が本学へ寄贈・寄託されることをきっかけに2021年10月に早稲田キャンパスに開館した新しいタイプの図書館である。世界から集まる研究者や文学愛好者に向けて、文学・芸術の魅力を伝える役目を果たしている。

また、従来の図書館にはない、作家・評論家によるトークや朗読会、芸術家・音楽家によるパフォーマンスなどの活動も行っている。「階段本棚」、「ギャラリーラウンジ」、「オーディオルーム」、「展示室」、「村上さんの書斎」などを一般にも公開しており、館内には学生が運営するカフェも併設している「写真3」。



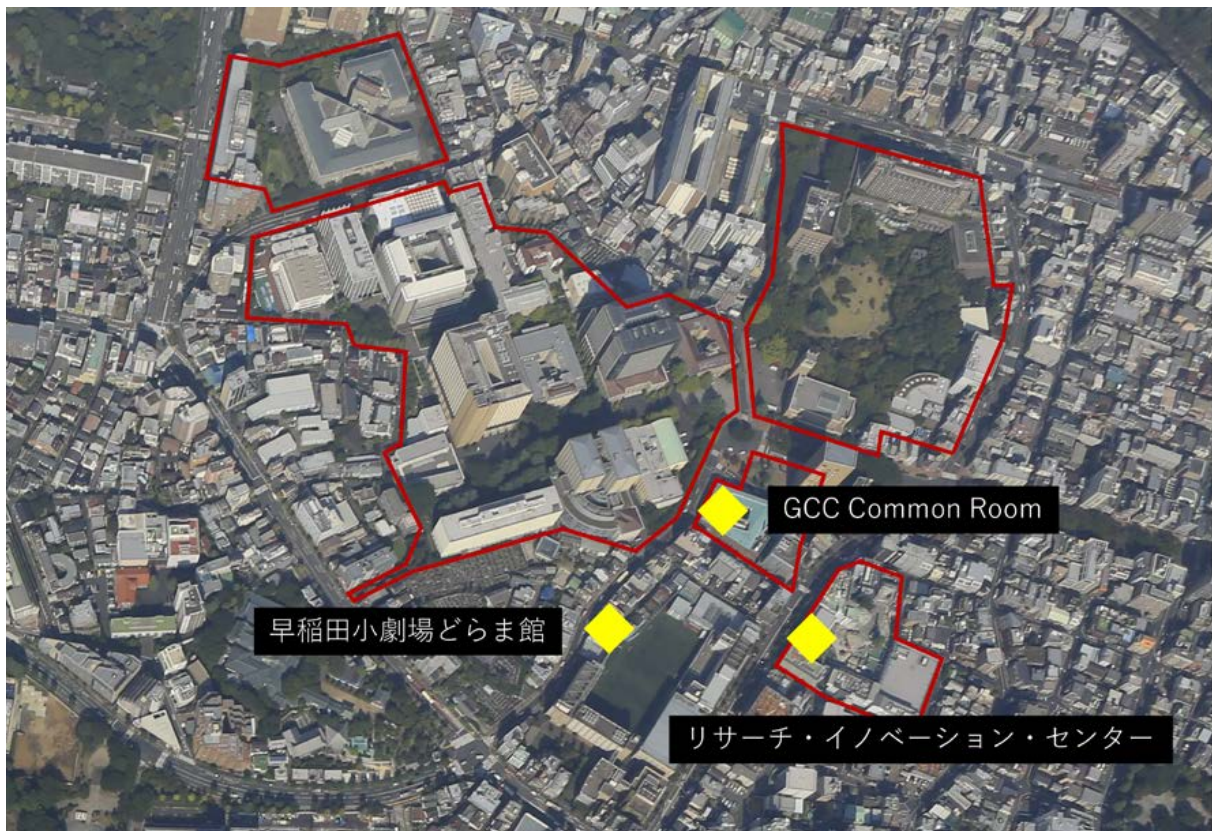
〔写真3〕「村上春樹ライブラリー」ラウンジの奥にカフェ(左)と階段本棚(右)

3— キャンパス周辺地域の活性化に向けた取り組み

大学を中心としながらまちと大学が共存し融合した地域を創るためには、周辺地域の活性化のため、本学が行う研究・教育・貢献を社会に還元・発信することが重要と考えている。特に、学生の居場所にもなる活気ある商店街は本学にとって貴重な資源と捉えているが、定期的に行っている学生へのアンケート結果などからは、近年の学生は、自宅とキャンパスの往復のみで商店街に滞在する割合が減っている傾向が見られる。このことから、商店街やまちに面して本学が所有する校地校舎を活用し、学生の地域貢献活動や文化発信、本学の最先端の研究成果を発信するスペースなどを整備している。

ここでは、早稲田キャンパス周辺で行った代表的な事例を3件示す「図2」。

「早稲田小劇場どらま館」（2015年竣工）は、早稲田キャンパスの南側、南門通り商店街の一角に建つ小劇場である。かつてその場所にあった「早稲田芸術文化プラザどらま館」が耐震強度不足の問題もあり閉館していたが、演劇を志す学生からの再建に向けた提案をきっかけ



[図2] 早稲田キャンパス周辺における3件の事例

けに「Waseda Vision 150」の「ワセダ演劇の発信力強化プロジェクト」として、新たな文化の創成と地域活性化に貢献することを目的に建設された「写真4」。

「ワセダ演劇」を継承・発展させ優れた演劇文化を発信、次代を担う演劇人や演劇を通して広く社会に活躍できる人材の育成とともに、学生を基軸とし、ドラマ館を早稲田の地域に根ざす劇場として商店街に賑わいをもたらし活性化にもつながることを目指している。



[写真4] 早大南門通りから望む「早稲田小劇場ドラマ館」

「リサーチ・イノベーション・センター」(2020年竣工)は、研究開発センターの敷地にある、産学連携を推進する最先端の研究施設である。同種の研究施設はその性質上、建物入口でセキュリティを確保しているため周囲に対し閉鎖的で、本来、社会実装を目指しているにもかかわらず研究内容が社会に伝わり難い建物であることを課題と捉えていた「写真5」。

当該施設では、通りに面した1階を研究会などのレクチャーにも利用できる広いコモンズ空間とし、日常的には本学の最先端の研究内容をディスプレイなど



[写真5]「リサーチ・イノベーション・センター」のコモンズ空間とカフェ

で外部に発信している。また、建物内部は研究ゾーンのセキュリティを確保することで、まちに対してオープンな空間としてカフェも併設している。カフェの利用者は学外の方が大半を占め、まちに賑わいをもたらすことにも貢献している。

「GCC Common Room」(2025年10月より利用開始)は、冒頭に触れた「Global Citizenship Center (GCC)」の「社会との接点」となる場である。GCCのミッションは本学が持つ「貢献」に関する研究・教育・実践の知見を結集し、研究・教育と有機的に連携して「貢献」を社会実装し「世界人類に貢献する大学」を実現することにある「写真6」。

早大南門通りに面し、学生たちが「まち」という一番身近な社会と直に接しながら社会について考える場となることを意図している。また、外との境界線をガラスとベンチで構成することで、開かれた場として対話や滞在が生まれやすいしつらえとしている。多くの学生・教職員が集い、校友や広く社会の皆様と連携して「早稲田らしい貢献」が創発されることを目指している。



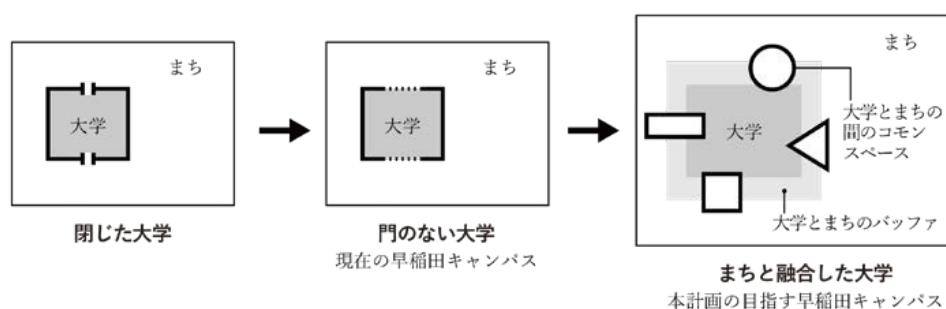
[写真6] 早大南門通りに開かれた「GCC Common Room」

4ーキャンパスとまちとの接点の整備

最後に現在計画中の整備を一つ取り上げる。「門のない大学」を標榜している本学ではあるが、その敷地境界は高いフェンスなどで囲まれ、まちと分断した姿を見せている。これを解消するため、「エッジ（線的な境界）」から「バッファ（厚みをもった緩衝空間）」への転換、すなわちキャンパスとまちの両方に開かれた豊かなコモンスペースをキャンパス外周部に新たに創出する計画である。学生・教職員だけでなく、近隣にお住まいの方々にも開かれた環境を提供することで、「門のない大学」を超えて「まちと融合した大学」となることを目指している「図3」。

この最初の取り組みとして、早稲田キャンパスとまちの最も重要な接続部分である正門周辺の3つの門、それぞれに広場を形成することを計画している「図4」。正門は、まちからキャンパスへ出入りする役割だけではなく、大学の敷居を示す重要な空間でもあることから、大隈記念講堂や正門周辺の道との関係性に着目してキャンパスの主軸を尊重しつつリデザインする。大学の境界部を地

域にまたがるようにすることで、キャンパスはまちと融合し、まちと共に成長できる学びの空間となることを目指している。「世界人類に貢献する大学」にふさわしい、新たな顔となることを期待している。



〔図3〕「エッジ」から「バッファ」へ——「門のない大学」を超えて「まちと融合した大学」へ（「早稲田キャンパス整備指針 Waseda Campus Master Plan 2023」より）



〔図4〕早稲田キャンパス正門周辺の整備方針（「早稲田キャンパス整備指針 Waseda Campus Master Plan 2023」より）

地域連携教育の新展開

ー知的好奇心が伝播する格好つけない
愛知大学の地域連携教育ー

太田 幸治

愛知大学

ささしま地域連携研究センター

(ASITASIA)センター長・

地域連携室副室長・経営学部教授

1 愛知大学名古屋校舎には門がない

愛知大学名古屋校舎のキャンパスモールでは、近隣の保育園の園児たちが先生に引率され散歩している姿を見かける。昼休みには近隣のオフィスで働くサラリーマンがキャンパスの学食やフードコートで食事をしている。このキャンパスには門がない。隣接する公園と繋がっている。

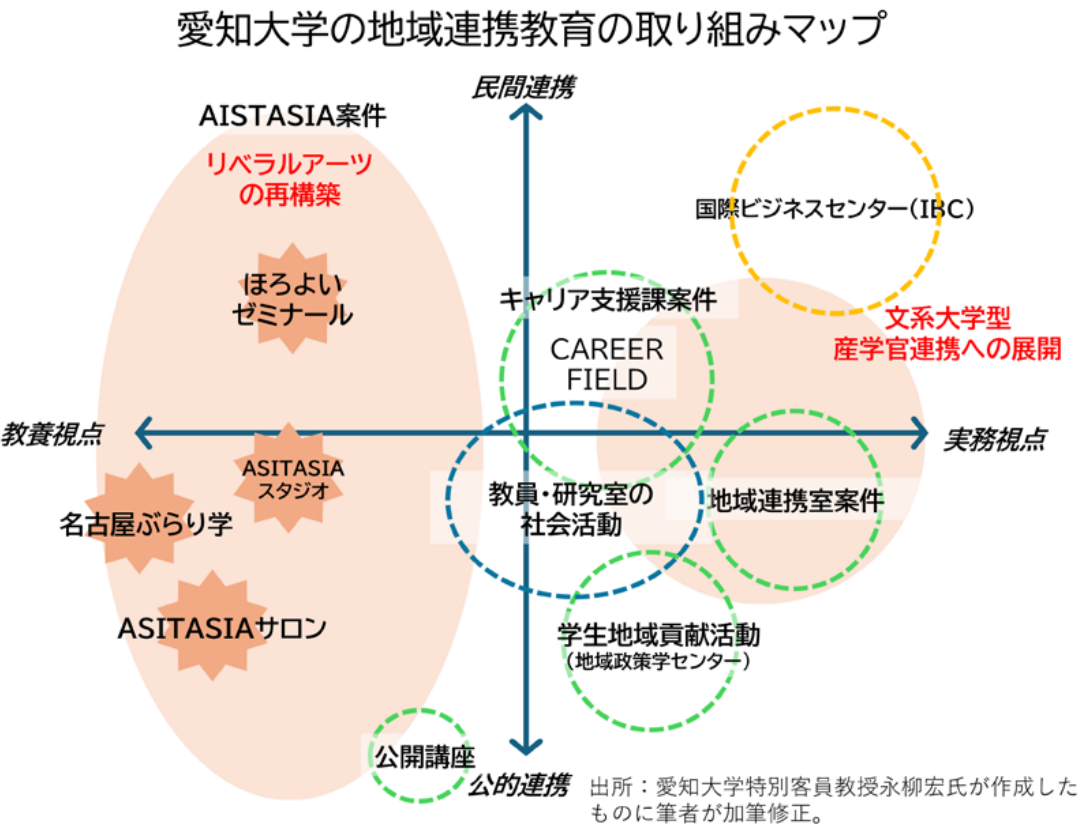
2012年4月に愛知大学名古屋校舎は名古屋駅から徒歩15分のささしまライブ地区に開校した。このささしまライブは、貨物列車の操作場の跡地で現在の東京の汐

留や大阪の梅田と同様に再開発されたエリアである。ささしまライブには、愛知大学の他に近代的なオフィスビル数棟に公園、映画館、JICA、ライブハウス（Zepp）そしてテレビ局まである。これらが空間的に一体化している。

現在、愛知大学には3つの校舎（名古屋、豊橋、車道）があり大学、大学院、短大の学生が学んでいる。基盤である大学部門に注目すれば、名古屋校舎に5学部（法学部、経済学部、経営学部、現代中国学部、国際コミュニケーション学部）と豊橋校舎に2学部（文学部、地域政策学部）があり、名古屋校舎では約7000人の、豊橋校舎では約2500人の学生が学んでいる。

2 愛知大学の地域連携教育

愛知大学の地域連携教育は、次ページの図のようにまとめられる「図」。図から分かるように、愛知大学の地域連携主体は、ゼミナールを含む教員・研究室、キャリア支援課（CAREER FIELDを実施）、国際ビジネスセンター（IBC）、地域政策学部主導の地域政策学セン



[図] 愛知大学の地域連携教育の取り組みマップ

ター、地域連携室、ささしま地域連携研究センター（通称ASTASIA：アシタシア）と多岐にわたる。

本稿では、愛知大学名古屋校舎の地域連携室、そしてアシタシアの活動を述べる。

3 地域の方々と学生がともに学ぶ 地域連携室の取り組み

愛知大学地域連携室が出している最新の報告書『カケル2024』によれば、愛知大学は24の自治体、そして12の企業・団体と地域連携協定を結んでいる。こんなに多くの自治体・企業と連携している大学はあまりないだろう。地域連携室の興味深い取り組みの一つに「自治体の首長によるリレー講義」の開講がある。この科目は共通教養科目として開講されており、単位化された科目である。当該講義では、本学と協定を結んでいる自治体のトップ14名が毎年授業をしている。この講義では、首長が、どのような夢を持って自治体を運営しているのか、自治体で働くということはどういうことなのかを説いている。科目を履修した学生は、市長など各首長が思い描く夢を

直接聞けることに喜びを感じ、その夢を実現するために多くの人が関わり、それぞれがどのような思いのなかでその夢を実現していくのかを学んでいる。

また地域連携室では、年に1回本学の協定先が一堂に会する「連絡協議会」を開催している。協定先の担当者がキャンパスに集まった姿は壮観である。この協議会では前年度に学生たちが行った自治体との取り組みの報告がなされる。学生たちの報告には、依頼した自治体、団体からの講評があるだけではなく、かかる取り組みに関心を持った他の自治体や団体の参加者が質問をくれる。このやり取りを通じて、学生はそれまでの学びとは異なる視点を得ることができる。また、当協議会は、参加自治体、団体担当者に創造的な取り組みのヒントとなるように、協議会後には名刺交換を含めた本学の協定先同士とのコミュニケーションがなされている。この連絡協議会には本学の学長、副学長も参加する。学長、副学長が報告した学生たちに協議会後に質問をしたり激励をしたりしている姿を毎年見かける。そのときの学長や副学長の表情が我々教職員に接するときとは異なる温和で教育者としての顔をしていることが微笑ましい。

4 「知的なエンターテインメント」を 標榜するASITASIA(アシタシア)

先の図からも分かるように、愛知大学の地域連携教育はPBL (Project Based Learning) に留まらない。図の第2、第3象限に注目していただきたい。これらの事業を担うのがアシタシアである。

アシタシアとは、明日の国をつくるという意味の造語で、当該センターの前身となる研究プロジェクトの名称である。そして、2024年に開設された研究センターは地域連携教育を研究するものである。アシタシアには、愛知大学7学部の教員がメンバーとして参加している。メンバーの専攻は多彩で政治学、都市計画、言語学、シェイクスピア、地質学、地球科学、社会保障、映像制作、中国外交、安全保障・防災、そしてマーケティングなどである。また教育学専攻の学外メンバーもいる。このメンバーの共通の関心は、大学教育にあった。ゆえに、アシタシアは地域連携の教育に注目した研究センターとなった。当該センターのコンセプトは「面白いことに気づき、自身の頭で面白く考える」であり知的エンターテ

インメントを標榜している。我々は劇作家の井上ひさし氏の言葉「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでゆかいに」にインスピレーションを得ている。アシタシアには2つの役割がある。ひとつは愛知大学のブランディングに寄与することであり、いまひとつは愛知大学の地域連携教育を研究することである。

アシタシアでは大学ブランディング事業としてアシタシア・サロン、アシタシア・スタジオ、ほろよいゼミナール等を展開している。アシタシア・サロンでは年に一度著名な知識人を招いた講演会を開いている。2025年夏には哲学者の國分功一郎氏を招き、アシタシアのコンセプトにもある「楽しさの本質」について講演いただきたい。また2024年春には本学のOBでタレントのつボイノリオ氏に長年ラジオパーソナリティを務めるにあたりどんな「学び」をしているのかをお話しいただいた。

アシタシアの特徴的なイベントに「ほろよいゼミナール」がある「写真1、2」。こちらは大学周辺の施設を借りて実施するイベントである。このイベントは、お酒

をほろよいに嗜みながら本学の教員の研究を楽しむものである。テーマの一例を示せば、地質学と地球物理学の教員による「地球が磁石じゃなかったら!」や地質



[写真2]ほろよいゼミナールの例2



[写真1]ほろよいゼミナールの例1

学の教員に学生がざくばらんに質問を繰り出す「しんかい6500」乗船記」などがある。このイベントのファンは増加傾向にあり、マイお猪口と徳利持参で参加する近隣のサラリーマンもいる。ほろ酔いで学問を楽しむというこのイベントでは普段の授業では静かな学生も学問自体を楽しんでいる。当イベントは、学生のみならず地域の方々と楽しい知的な時間を共有し知的なエンターテインメント空間を共創している「写真3、4」。



[写真3]ほろよいゼミナールの様子1



[写真4]ほろよいゼミナールの様子2

5

地域連携教育の研究 ―知的好奇心が伝播する地域連携教育―

アシタシアの自慢は会議体である。アシタシアのメンバーである教育学専攻の前原裕樹氏によれば、教育学に「『専門職共同体』としての教師の同僚性」なる概念があるという。アシタシアのセンター会議は右記の同僚性のもとで運営されている。いや、メンバーたちがその同僚性を楽しんでいる。かかる会議では、メンバーそれぞれが自身の研究を通じて、どのように愛知大学の学生を育てるかについての議論を交わしている。同会議メンバーには「学内に、どのように学生を育てるかをこれほど話している機関はない」という自負がある。同会議では専門科目の教員も共通教養科目の教員も担当科目に関係無く議論を交わしている。それは、メンバーが互いの研究領域、そして互いの教育に関心があるからである。この会議で分かったことは、学部ごとに教育の悩みが違うこと。PBLに飢えている学部もあればリアル・アーツに飢えている学部もあるということであった。そこで生まれたのが「名古屋ぶらり学」という単位化

された講義である「写真5、6」。この講義はオムニバスではなく毎回のクラスに2人の教員が参加して運営されている。以下では、当該科目の担当教員のひとりである古川邦之氏が雑誌『名古屋港』（44巻1号（通巻25



〔写真5〕名古屋ぶらり学の様子1



〔写真6〕名古屋ぶらり学の様子2

9号)、5〜7ページ、名古屋港利用促進協議会、2025年)に寄稿した「愛知大学『名古屋ぶらり学』で巡る熱田台地と堀川」を引用しつつ、当該科目を紹介したい。この授業で学生は、地形、歴史、そして地域発展との深い関わりを理解することを目指している。具体的には、1回目の講義では大学の周辺である熱田台地の地形を理解する地図実習を行なう。この実習では、Web版の地理院地図を使用し大学と周辺の位置関係を理解する。その後、かかる地図の機能を用いて大学周辺の地形を可視化する。ここで熱田台地がくっきりと浮かび上がっていること、そして名古屋の商業エリアが意外にも起伏に富んでいることが分かる。2回目の講義では前回作成した地図を持参して街歩きをする。日頃なんとなく歩いていた街にアップダウンがあることを体感する。歩いていく途中で自身が谷底にいることに気づく。そこには洲崎神社がある。本殿まで登ると、ここは昔は崖であったことも分かる。なぜ、この崖の上に神社ができたのか。その歴史もさらにたどると…ということがこの授業では展開されている。この授業では何気ない坂道も、その背景にある意味を知ること、重要な景観へと変わり、これ

まで気づかなかった街の潜在的な魅力に目を向けるようになることを目指している。それは表面的なものではなく、その土地固有の本質に近い魅力とも言えるのである。

名古屋ぶらり学では、学生に教員が考えている姿を見せる。教員も学生と一緒に考える。教員は学生に「分からないことは、分からない」と言う。教員は格好をつけない。学生には「この先生、なんか悩んでいるけど、実に楽しそうだなあ」と感じてもらう。アシタシアでは、これをリベラルアーツの再構築の基軸としている。

我々が「格好つけない」教育を志向したのは、「そこにいる教員が楽しくなければ、学生に楽しさは伝わらない」と確信したからである。この確信は、センター会議での専門分野の異なる同僚たちとの知の交流から生まれたものである。

普段、同僚たちの研究の話を聞ける機会は意外と少ない。先に示したほろよいゼミナールのような研究を通じた学生と教員の対話をする会は貴重である。かかる会に参加することで、学生や地域の方々のみならず我々教職員も知のワクワクを得ている。

本稿の筆者の専攻はマーケティングである。ゆえに筆

者はこれまでも今もPBL教育に関わっている。しかしながら、前述のようなワクワクのミメシス（感染的模倣）はPBLよりも面白い。PBLは決める力、実践する力がつく教育であろう。物事には締切がある。その締切までに物事を決定する力は大切である。しかし、その決定の前に「じっくり考えること」をしているだろうか。PBLは協働している企業や自治体の都合で短期間の実施が多い。その期間の短さゆえに、企業や自治体の担当者も教員も学生もじっくり考えることよりも決めることを優先しているように思われる。もちろん、意思決定は大事である。しかし、國分功一郎氏が『暇と退屈の倫理学』（文庫版、新潮社、2021年）で、谷川嘉浩氏が『人生のルールを外れる衝動のみつけかた』（筑摩書房、2024年）で説いているように、考えることと決めることは一緒ではない。逃げずに考え続けることを学ぶのが大学ならではの教育ではないだろうか。

6 結びにかえて

これまで述べてきたように、愛知大学の地域連携教育

は「知的好奇心が学生、教職員、地域の皆さんに伝播する」ことを目指して実施している。しかもそれを教員が格好つけずに行なっている。

これまで筆者が地域連携教育に関わって感じたものは学生の笑顔である。それは学ぶ際のワクワクとドキドキと何かが分かったときの学生の表情である。そしてこのような学生の表情を見たときの教職員の笑顔である。これはキャリア支援課や地域連携室主催のPBLであろうと、アシタシア主催のぶらり学であろうと変わらない。さらに、最近はアシタシアで同僚と地域連携教育について考えるワクワク、同僚たちの研究を同僚と学生と一緒に考えるワクワクも感じている。

一方で、悩みも尽きない。大学が行うまちづくりに関わっているが課題は多い。大学にまちづくりを期待されても、昨今の大学運営が直面する環境下では圧倒的に資金とマンパワーが足りない。大学にまちづくりを期待されることは分かるのであるが、ヒトもカネも足りないとというのが現実である。

私自身もここ1カ月は普段の講義に加えて、次年度のゼミ生の選考、入試に係る会議、入試業務、高校への出

前講義等々に携わっているという状況である。この原稿も、締切を過ぎている他の二つの原稿を一旦脇に置いて書いている。大学教員の本来の仕事は教育と研究である。研究はストイックに、教育は学生が育つように行いたい。それに加えて地域連携の仕事を、ともなると、正直なところやっていられない。本稿を読んでいただいた大学で地域連携に関わっている同志の皆さんに格好つけずに自戒を込めたメッセージを送り筆を置きたい。

「大学の地域連携は、ほどほどに『良い加減』にやりましょう。そうすれば長く楽しめるはずです。」

「自由の学び舎」を守るために

吉村 和真

学校法人京都精華大学理事長

私が理事長に就任したのは、2024年末のこと。その際、各方面に送付する挨拶状に少し趣向を凝らしてみた。新役員の氏名に続いて、1枚の絵（図…実物はカラー）を付したのだ。だが、これがいったい何を意味するのか、説明も紙幅も不足していた。そこで、この場を借りて、挨拶状の意図と本法人が目指すところを絡めてお伝えしたい。

この絵は漫画家さんの史代さんによる描き下ろしの水彩画である。『夕風の街桜の国』の主人公・平野皆実や『この世界の片隅に』の北條すずをはじめ、『長い道』『さんさん録』『日の鳥』と、複数作品の登場人物たちが京都精華大学のキャンパスで学生生活を謳歌している様子が描かれている。マンガ学部の教員でもある私が個人的に執筆依頼したものだ。2021年の制作だが、この絵に込められた2つのメッセージが新理事長からの意思表示として申し分ないと考え、三つ折りの挨拶状の一頁に配置させてもらった。

2つのメッセージとは何か。1つは、戦時下を含め、作中でいろんな時代を過ごした登場人物たちが、かりに現代日本に生きていて、自分の好きなことを自由に学んでいるとしたなら、どんなに素敵なことだろうとの想い。もう1つは、大学という専門も出身も異なる人々が集まる場所で、自分の考えや方法だけにとらわれず、多様な友人や他者との出会いを通じ、切磋琢磨できる環境の尊さである。

どこに誰がいて何をしているのか眺めるだけでも楽しい、この絵の中ほどには、本学の建学理念である「自由自治」の4文字を刻んだ石碑も見える。作中では原爆症で新調のワンピースを着ることなく絶命した皆実が編み物をしたり、絵を描くことが大好きなのに不発弾で右手を失ったはずのすずが写生していたりと、学生に扮した登場人物たちが思い思いに過ごしている。つまり「あの戦争がなかったら」という想像力が、この絵の奥行きを支えているのだ。

それだけに、誰もが安心して自由に学び合え

る居場所がいかにかけがえないものか、微笑ましくも切ないほど伝わってくる。「自由の学び舎」というタイトルには、そのような本学の理念や大学の本来的な存在意義が含意されている。このさんの作品を未読の方でも共感していただけの部分があると思うが、ご存知の方ならばなおのことだろう。

翻って現在、国際的に戦禍が広がり緊張感も高まる中、学問の自由どころか生命の危機にすら瀕している若者や子どもたちが増えている。アメリカにおける大学へのあからさまな政治介入も他人事ではない。一方、国内では、未曾有の少子化を見据えた教育業界の再編が進む中、扇動的な外国人政策に耳目が集まるなど、国内外の学生たちの将来が左右されかねない局面を迎えている。

そうした状況下、本学ではマンガ学部を中心に指折りの留学生比率を示している。その支援体制の構築や国内学生との協同には課題も山積みだが、多様な国籍の学生との対話や文化交流

を通じ、政治や経済上の緊張を緩和する糸口を見出すことがある。それは、本学のもう一つの建学理念「人間尊重」の大切さを再認識できる瞬間でもある。

すなわち、自由や人間が脅かされる時にこそ、京都精華大学の存在意義はいつそう高まるわけであり、今後の活路も開かれるということだ。それを念頭に、これからも国内外の学生たちにとっての「自由の学び舎」であり続けられるよう、中長期的な視野と臨機応変な手腕を備えた大学運営に励む所存である。



〔図〕この史代「自由の学び舎」

大学ブランドに寄与する マスコットキャラクター戦略

近年、大学におけるマスコットキャラクターの存在感は一層高まっている。入試広報や入学式・卒業式といった大学行事への登場、グッズやデジタルコンテンツへの展開など、従来の広報活動を補完するのみならず、大学の魅力や独自性を象徴する存在として機能している点が特徴的である。さらには、SNS用スタンプの制作や地域連携イベント、産業界とのコラボレーションなど、キャラクターを軸とした発信は、受験生や在学生にとどまらず、卒業生や地域住民など幅広い層へと広がりとある。いまや大学のマスコットキャラクターは単なる「マスコット」を超え、大学ブランドを体現し、親しみや信頼を醸成する媒体となっている。一方で、学内でのキャラクターの乱立や商標登録、ガイドラインの策定・適切な

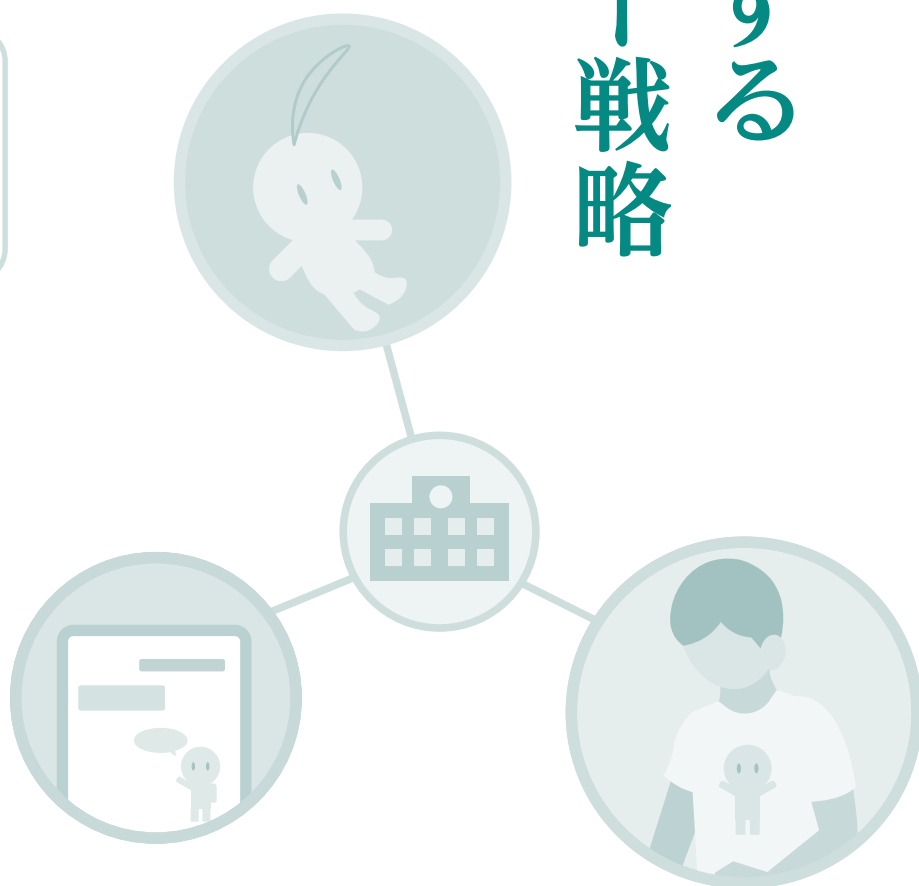
CONTENTS

創立者の想いをつなぐメッセンジャー

―ピーチくん流ブランド戦略―

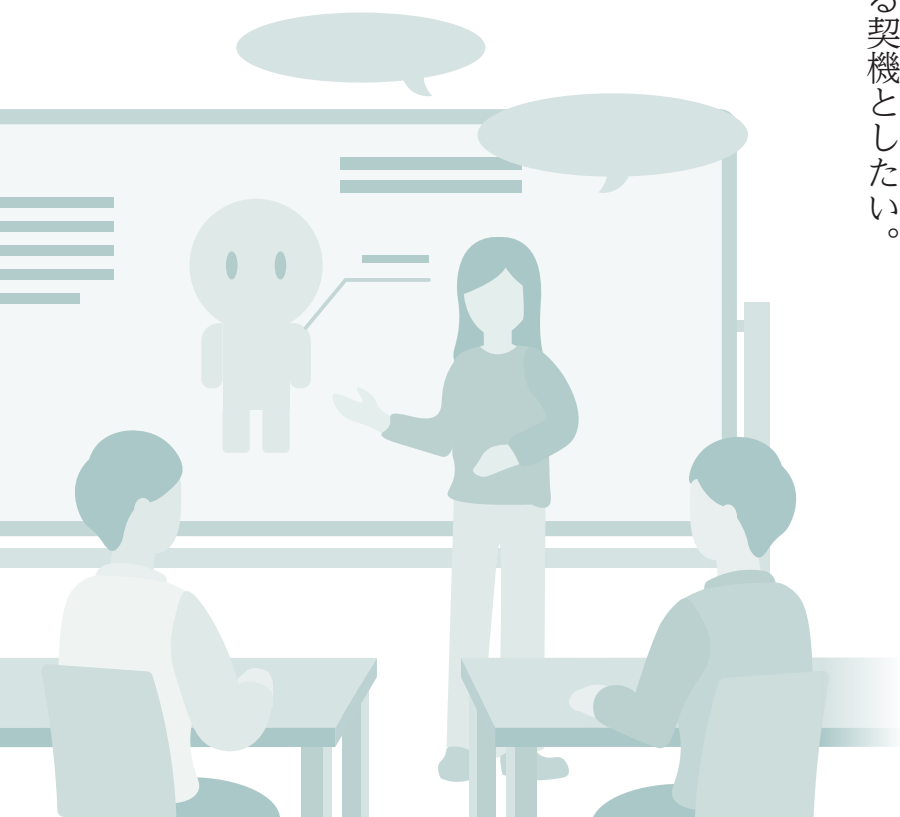
宮越 美紀子

学校法人成蹊学園総務部長兼
企画室広報担当部長



運用など、課題も少なくない。

本企画では、各大学におけるキャラクター誕生の背景や決定までのプロセス、設定されたコンセプトを整理するとともに、印象的な活用事例や最新の展開を紹介する。あわせて、キャラクター活用を通じて得られた成果や課題を多角的に分析し、導入を検討する大学にとって実践的な知見を提示する。大学のマスコットキャラクターという「顔」を通じて、大学と社会を結ぶ新たな可能性を探る契機としたい。



「なんぼーくん」ブランディング戦略

長谷川 裕晃 甲南学園広報部

大学公式キャラクターを用いたイメージ戦略

―明治大学・めいじろうの事例―

野見山 智道 学校法人明治大学経営企画部

広報課長

VIVI誕生から20年

―同志社女子大学の顔として―

川添 麻衣子 同志社女子大学

広報部広報室広報課長

つながりを紡ぐえこぴよん

―学生・教職員・社会をつなぐ存在として―

南雲 健介 法政大学総長室広報課課長

応援団長ライナンくん

―南山生の闘志に火をつけろ―

吉田 敦 南山大学学生部長・理工学部教授

創立者の想いをつなぐ

メッセンジャー

―ピーチくん流ブランド戦略―

宮越 美紀子

学校法人成蹊学園総務部長兼
企画室広報担当部長

1 ピーチくんの生い立ち

成蹊学園のマスコットキャラクター「ピーチくん」は、「成蹊」の名の由来である中国の諺「桃李不言下自成蹊（とうり ものいはざれども、下おのづから蹊を成す）」をモチーフとした桃の精である。現在では学内外から愛され、成蹊の顔とも言える存在になっているが、実は公式キャラクターではない。

ピーチくんは1924年3月3日生まれ、もうすぐ102歳を迎える。もちろんこれは「設定」であるが、実際に学内に登場したのは1999年。当時、学生課に勤

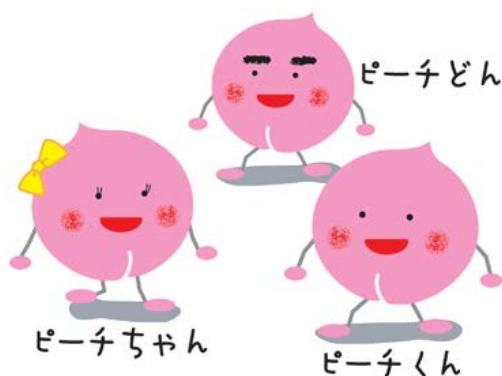
務していた私が描いたイラストが始まりであった。掲示物や印刷物に登場させ、ピーチちゃんやピーチどんなどのお友だちキャラも制作した。突然現れた謎のキャラクターという設定が学生にとって面白かったのか、ひそかに人気者となっていた「写真1」。

その後も、知る人ぞ知るキャラクターとして存在していたが、2012年の学園創立100周年を機に、再びピーチくんを広報に活用するチャンスが訪れた。

成蹊学園は創立者・中村春二先生が「知育偏重ではなく、人格・学問・精神にバランスのとれた人間教育」を目指して創立した学校で

ある。成蹊学園では、周年をきっかけにブランド作りを進める中で、在学生や若い世代の卒業生が建学の精神に触れ、母校に愛着と誇りを持つ機会を創出することを目標のひとつとしていた。

ピーチくんのコンセプト



[写真1] ピーチくんとお友だち

ト「桃李不言下自成蹊」は、司馬遷が『史記』の中で李將軍の人物を讃えるために引用した諺であり、「桃李」は創立者が理想とした人物像そのものである。創立者の想いをモチーフにしたピーチくんならば、難しくなりがちな「建学の精神」を若い世代にもわかりやすく伝えることができると考え、周年記念グッズに登場させることにした。この頃、社会にはゆるキャラ[®]ブームが到来しており、ピーチくんはその波に乗って瞬く間に学内での認知を高めていった。

2 進化の時代 2Dから3Dへ

ピーチくんがさらに躍進するきっかけが訪れたのは創立100周年直後のことである。非公式であるがゆえに地味に活動していたのだが、どういうわけか、キットカットのPRイベントからお声がかかったのである。シンガーソングライターのmiwaさんと15大学のキャラクターがコラボする受験生応援イベントであった。ピーチくんは非公式キャラであるし、当時はまだ着ぐるみがなかったのて一旦はお断りしたのだが、ご厚意でパネルを制作

いただき、着ぐるみのキャラクター達に混ざってパネルでイベントに参加した。このイベントが大きく報道されると、なぜ本学だけパネルなのだと、学内で3D化（着ぐるみ）を望む声が高まっていった。そして、2015年にとうとう3D化が実現した。さらには「成蹊学園広報大使」の称号をいただくことにもなり、公式ではないが、なんとなく公認[®]の立ち位置を確立した。このようにピーチくんは、おそらくあまり例のない形で組織の中に溶け込んでいったのである。

着ぐるみはキャラクターによる広報活動の場を大きく広げてくれる。余談であるが、これからキャラクターを検討しようという大学においては、是非着ぐるみにしやすいデザインという観点も留意することをおすすめる。というのは、ピーチくんはイラストからの出発であり、将来的に3D化するなど考えてもみなかったもので、どう考えても着ぐるみに向かない形状をしていた。そのため、着ぐるみ制作にあたって、イラストを再現することがなかなか出来ずに迷走し、諦めかけたという経緯がある。最終的には、空気を入れて膨らむエア型で制作することで、なんとかイラストの面影を残す着ぐるみを制作する



〔写真2〕3D化は広報活動の場を広げた

ことができた「写真2」。

3D化したものの、当初はキャラクターを広報に活用することを歓迎しない雰囲気もあったように思う。非公式であったこともあり、批判的な反応を避けながら、少しずつ慎重に活動の範囲を広げていた。しかし、その心配とは裏腹に、行事への出演だけでなく、授業に呼ばれたり、研究室を訪問したりと大学らしいアカデミックな活動も増えていった。

このきっかけになったのは、ある大学教員が「ピーチくん勝手に応援団長」を名乗り、学ランを着たカバのキャラクターに扮して盛り上げてくれたことが大きい「写真3」。応援者が増え、学内での存在感が高まっていき、3D化して1年後の



〔写真3〕「ピーチくん勝手に応援団長」と

2016年に大学生対象に実施された調査では、ピーチくんの認知度は88%にまで上昇していた。

3 ピーチくん流ブランド戦略

ピーチくんの活動で一貫して大切にしているのは、学生や教職員がピーチくんを通して成蹊学園に愛着と誇りを持てるようにすることである。こうした愛校心が、結局のところ、学園の社会的信頼を高め、ブランド形成に繋がると考えているからだ。そのために留意しているのは「うちの子、他とはちょっと違う」と感じてもらうための戦略であり、具体的には、①世界観に深みを持たせる、②ナナメ上いく広報活動の2点である。

①世界観に深みを持たせる

ピーチくんは、私立学校の差別化の核となる「建学の精神」と密接に関連したキャラクターである。そのため、世界観を構成するストーリーやパーソナリティには深みを持たせるようにしている。例えば、誕生ストーリーは成蹊学園の転換期の史実と重ね合わせたドラマチックな物語に設定。エモーショナルな背景により、キャラクター

に厚みを持たせている。対してパーソナリティは、創立者の想いを受け継ぐ桃と自負しながらも隙だらけで限りなくゆるい。学生と一緒に毎日を精一杯過ごしているという設定で親近感を持たせている。さらに、書き言葉は「かながき」を推奨していた中村春二先生の影響でひらがなが多めなど、細かい設定も多数設けている。これらは長い広報活動の中で変更を加えたり拡張したりしながら、ピーチくんの世界観を支えている。

②ナナメ上いく広報活動

現在ピーチくんは企画室広報グループが運営している。イベント出演、SNS、ウェブサイト、オリジナルグッズなど活動は多岐にわたる。「面白い」「他にはない」を意識した「ナナメ上」をいくピーチくんの広報活動は、どこかピン트가ずれつつも、学生や教職員、ファンへの愛に溢れあたたかい。

イベント出演は年間40回程。学内行事だけでなく、地域などの外部イベントに参加することもある。キャンパス内に突然現れることもあり、クリスマスには電飾を体に巻き付けて学生達にプレゼントを配ったこともあった。ダブルダッチを披露するなど、意外と運動神経も抜群だ。

着ぐるみのアクターは「種」と呼んでいる。学生が「種」となることもあり、お手伝いの学生をPA（ピーチアシスタント）として組織している。

SNSはファンとの交流の場であり、ピーチくんの私生活を垣間見ることができる。ウェブサイトも2024年に100歳記念でリニューアルし、世界観発信の重要なプラットフォームとなっている【図】。

オリジナルグッズはピーチくん自身が監修を手掛けているという設定で、ユニークなものが多い。また、学生と一緒にものづくりをするのも大好きだ。

一番人気の「もふもふストラップ」は、授業で行われた調査結果が基になっているし、学生団体が実施したビジネスコンテストで提案された「ピーチくん柄のトイレットペーパー」を商品化したこともあった。

さらに、地上波テレビドラマへの出演やゆるキャラグランプリ



ピーチくんウェブサイト



SNS・本桃えっくす(X)

【図】公式サイトとX

リ[®]でのベスト10入りは、大きな話題となり、学内だけでなく学外での認知も広げることができた。こういったメジャーな活動は、インナーにとって自慢の出来事であり、ピーチくんへの愛着をさらに高めた。

4

時代を越えたメッセンジャー

3D化から10年、ピーチくんは予想を超えて活躍の場を広げている。昨年実施したブランディングに関する学内アンケートでは、成蹊のアイデンティティとして「桃李成蹊」を挙げる学生が非常に多く、広報効果を実感している。10年前には成蹊の名の由来や建学の精神を知らない学生がほとんどであったことを考えると、大きな成果を残しているといえる。

ピーチくんに接触した人は、「なぜ桃？」という疑問から成蹊学園の「建学の精神」へと自然に導かれていく。ピーチくんは時代を越え、創立者の想いをつなぐメッセンジャーなのである「写真4」。

今後の課題であるが、ピーチくんは非公式ゆえガイドラインは設けず柔軟性を持たせて運用してきた。それが

機動力を高めたが、一貫した表現をスタイルガイドに纏め、クオリティを管理することも、今後ピーチくんが長きにわたって愛されるキャラクターであり続けるために必要なことであると考えている。



[写真4]多くの学生に創立者の想いを伝える

おわりに

ピーチくんを活用した広報に、キャラクター創作者として、同時に広報担当者として長い間携わってきた。その中で感じるのは、キャラクター広報はそれほど簡単ではない、ということだ。確かに、広報媒体としてのキャラクターの存在は、無限の可能性を持つ魅力的なものだ。ただし、キャラクターは作っただけでは人気も広報効果も生まれない。個性を持たせ、その世界観に沿って時間と手間暇をかけて育てていく必要がある。その背後には緻密な戦略とキャラクターを支えるスタッフの日々の努力が不可欠だ。なぜなら、ポリシーを失えば、世界観にブレが生じ、途端に愛されないキャラクターとなってしまうからである。

もし「キャラクター広報で一番大切なことは何か」と問われたら、私はこう答える。キャラクター広報に一番必要なのは——きっと「愛」である。

「なんぼーくん」 ブランディング戦略

長谷川 裕晃
甲南学園広報部

はじめにーなんぼーくんの紹介ー

甲南大学の公式キャラクター「なんぼーくん」は、2014年の大学祭「摂津祭」で誕生した。学内公募で集まった117体ものキャラクターデザインの中から学生投票によって選ばれた。2018年には甲南大学の公式キャラクターとして正式に認定し、同年に商標登録も完了している。

なんぼーくんの名前は、甲南の「南（なん）」とイノシシの子ともである「うり坊」の「坊（ぼー）」が由来となっており、甲南の「甲（かぶと）」の字にちなんでスクールマークを模した兜を被っているのが大きな特長で

ある。愛らしいルックスに加え、都市型キャンパスでありながらも六甲山の麓に広がる豊かな自然環境を有する本学の特色や地域性が垣間見えるキャラクター設定も、学内外から広く親しまれる理由の一つといえるだろう。

1 なんぼーくんの現在の活用内容について

なんぼーくんは、本学の「顔」として多岐にわたる広報活動をしており、これまでの具体的な活用内容としては、次の三点が挙げられる。

一つ目は、キャラクターグリーティング。本学が主催する各種行事に登場し、参加者とのふれあいや記念撮影



などを通じて記憶に残る体験を提供している。

二つ目は、キャラクターグッズの展開。甲南大学生活協同組合と連携し、ぬいぐるみやアクリルキーホルダー、ボールペンなどの文房具といったアイテムを、学内の生協などで販売。有志の職員メンバーが手掛けたLINEスタンプは第2弾まで販売されている。その他にも、オーブンキャンパスの来場記念品や学園広報誌のプレゼントグッズとして非売品の限定アイテムも配付しており、本学を身近に感じてもらうきっかけづくりとなっている。

三つ目は、SNSでの広報活動。本学のオウンドメディアである「KONAN-PLANET」では記者として、公式X（旧Twitter）では日々の

出来事を投稿する発信者としての役割を担っている。また、公式Instagramではイベントや四季折々の美しい風景とともに登場し、写真やリール動画で、「甲南大学の日常」を積極的に発信している。これらの活動により、なんぼーくん



は、親しみやすい視点から本学の魅力を伝える「顔」としての役割を果たしている。

他にもユニークな取り組みとして、本学の公式YouTubeチャンネルで展開している「なんぼーチャレンジ」がある。これは、なんぼーくんが大学にある部活動やサークルに訪問し、サッカー、テニス、楽器演奏、茶道など、様々なスポーツや文化活動に体当たりで挑戦するという企画である。各団体の活動内容はしっかりと伝えつつも、チャレンジの内容がなんともユーモラスで、なんぼーくんのかわいらしさが存分に発揮された動画となっている。公式チャンネルの再生リストから視聴いただけるため、ぜひその魅力に一度は触れていただきたい。

2 なんぼーくん活用の課題とブランドを体現する存在への新たな取り組みについて

なんぼーくんはこれまで、教職員や学生の自発的な活用を通じて、一定の認知・共感を得て、多様な形で親しまれてきた。しかしながら、体系的な運用指針がないことから、教職員・学生が各々の思いで活用・展開する

に留まっていた。この状況を打破し、なんぼーくんの魅力を最大限に高めるため、2025年度に組織横断的な「なんぼーくんブランディングワーキングチーム」を立ち上げ、戦略的なブランディングの推進が本格的に始動した。ワーキングチームでは、なんぼーくんを「甲南らしさを体現・発信する存在」として位置づけ、戦略的に甲南ブランドの発信・定着に活用することを目的としている。発信者としてのなんぼーくんには、①学内の一体感と愛着の醸成、②学外への認知と印象の定着、③地域・企業との関係強化という三つの効果を期待している。

2025年度は、なんぼーくんをブランド化するための基盤づくりを重視し、キャラクターの拡大展開に不可欠となる利用レギュレーションの策定を推進した。また、「日常空間における接点の創出」として「なんぼーくんラウンジ」の設置を計画中である。これは、本学の岡本キャンパス1号館3階にある既存のラウンジ（学生自習スペース）を改装することで、「なんぼーくんに囲まれた空間」としていく。具体的には、ガラス扉にはバリエーションに富んだなんぼーくんのカットイングシールを配置し、室内にはなんぼーくん等身大パネルのほか、ミニ

のぼりやポスターなどを設置する予定である。なんぼーくんを日常的な学生生活の中に取り込むことで、大学への愛着を感じられる拠点の創出を狙っている。

続く2026年度には、2025年度の基盤をさらに発展させ、「日常接点の拡大」、「空間演出によるブランド体験」、「会えるブランディング」を3つの柱として、施策の展開を予定している。

まず、「日常接点の拡大」として、学内にある食堂やカフェにおいて、料理そのものや、メニュー表・デジタルサイネージになんぼーくんを登場させることで、学生や教職員が日常的な食事の中でも自然に愛着を感じられる機会を創出していく。

また、広報部やキャリアセンターといった学外との接点が多い部署において、なんぼーくんデザインの名刺を導入し、親しみやすさを演出することで、学内外双方でのブランド認知を高めたい。

次に、「空間演出によるブランド体験」では、テーマパークのように学内の壁や柱などに「隠れなんぼーくん」を配置し、日常の中でなんぼーくんを偶然発見するといふ楽しめる仕掛けを展開していきたい。こうした遊び心

のある空間演出によって、学生や来訪者にワクワク感を提供し、本学に対する親近感や愛着の醸成を目指す。

最後に、「会えるブランディング」も展開していきたい。これまでも入学式やオープンキャンパス、地域連携イベントなどで、なんぼーくんを登場させていたが、現在使用している着ぐるみ

は重量や暑さの問題から、限定された場所・時間での稼働することができなかった。そこで、機動性の高い着ぐるみを新たに製作し、より多くのイベントに積極的に登場していく予定である。イベント参加者との交流を拡大させることで、より多くの方の記憶に残る体験を提供していく。



おわりに

なんぼーくんはこれらの新たなブランディング戦略を通じて、単なるかわいいマスコットキャラクターとしてではなく、「甲南らしさを体現・発信する存在」となり、学生や教職員の日常に溶け込み愛される存在となることに自信を持っている。また、学外においては、受験生や保護者、地域・企業・高校などに対して、甲南大学ひいては甲南学園の魅力を伝える「顔」として機能し、SNSや各種メディアを通じて、より広く認知と愛着を広げる存在となるように、ブランディング戦略を推進していきたい。



大学公式キャラクターを用いたイメージ戦略 ―明治大学・めいじろうの事例―

野見山 智道

学校法人明治大学経営企画部
広報課長

はじめに

明治大学の公式キャラクター「めいじろう」は、誕生からまもなく19年を迎えようとしている。現在では、官公庁、地方公共団体、企業など、多くの組織においてイメージキャラクターが全国各地で活用されているが、誕生当時、大学が独自のキャラクターを有する事例は、まだ多くはなかった。大学キャラクターは、CIやVIの概念から派生した大学の「UI」（ユニバーシティ・アイデンティティ）整備が1990年代から2000年代

にかけて各校で進み、その後に到来した社会的な「ゆるキャラ[®]」ブームの影響もあってか、次第に数を増やしていったと考えられる。本稿では、そのような時代的背景の中で誕生し、成長してきた本学の公式キャラクター「めいじろう」についてご紹介したい。



〔写真1〕めいじろう

1 「めいじろう」の誕生経緯

本学では、学外における視覚的な大学認知を目的として、2001年にシンボルマークを制定し、広報活動におけるブランド展開を進めてきた。しかし、時間の経過とともに、より効果的で多面的な広報活動を推進してい



[写真2] オープンキャンパスに出勤

くためには、大学を象徴し、かつ親しみやすさを備えたキャラクターの存在が必要であるという認識が広報部（当時）の中で高まっていた。このような背景のもと、2006年に広報部キャラクターとして「明治大学にふさわしいマスコットの要素を持ったイメージキャラクターを募集しよう」と企画され、本学関係者（在学生、校友「卒業生」、父母、教職員等）を対象に、①キャラクター正面図②キャラクター名③イメージコンセプトを必須として、公募で実施することになった。

募集期間は3ヶ月ほどであったが、応募作品は100点を超え、その中から明治大学広報委員（当時）、広報学

生モニターら約130名による第1次審査で、まず5点まで絞られた。続く第2次審査では、在学生をはじめ明治大学に関心のある方に広く一般投票を呼びかけて厳正な選考が行われた。その結果、当時大学2年生だったTさんの作品が最優秀賞を獲得し、2007年3月に広報部キャラクターとして「めいじろう」が誕生した。

産声をあげた「めいじろう」は、以降、広報紙誌でその愛くるしい姿を披露して大活躍し、視覚的に強く印象づけるキャラクターとして徐々に認知を拡大した。2009年10月にはプロ野球球団の着ぐるみを参考に制作した着ぐるみ第一号が完成し、広報イベントなどに登場させたところ、他部署からの問い合わせや出動要請が多く寄せられ、各ステークホルダーから良い反響がみられた。また部署間を越えたキャラクターマーク使用の要望も増え、在学生をはじめ校友、父母、受験生からもキャラクターグッズ化の声が一層高まってきていた。こうした状況を受け、「めいじろう」を広報課キャラクターとしてのみならず、大学全体の公式キャラクターとして幅広く展開し、大学イメージの浸透及び親近感の向上に資するべきと考え、当時の理事会に大学公式キャラクターとしての

承認を上申することになった。当初は、お遊戯会でもやるのかね、という懐疑的な意見も聞こえてきたが、前年の2008年4月に国際日本学部が開設され、「漫画は日本の文化」とする認識が高まっていたこともあり、最終的に承認が得られ「めいじろう」は正式に大学キャラクターとして位置づけられるに至った。また、これに併せて、それまで総務課で管理されていた大学シンボルマークの商標とともに、「めいじろう」の商標管理を広報課で一元管理することになった。これにより、事務処理の効率化とマークの乱立によるイメージ分散を防ぎ、利用実態を確認しながら効果的な広報展開を推進できるようになった。

なお、「めいじろう」は、明治大学の「めいじ」と「ふくろう」を合わせた造語である。ふくろうは、知恵と学問の象徴であり、「森の賢者」として知的イメージを有するとともに、大きな翼を広げて飛翔する力強さと、遠方を見据える大きな眼を備えており、明治大学を象徴するキャラクターにふさわしいとして採用された。大学のスクールカラーである紫紺の羽と遠くまで見渡せる大きな目が特徴で、その愛くるしい姿はキャンパスの人気者となっている。

2 大学公式キャラクターとして飛躍

「めいじろう」が大学公式キャラクターと承認され、学内では広く横に拡げて活用できるようになった。まず、手始めに全部署の事務室窓口に設置してもらう目的で、特大「めいじろう」ぬいぐるみを制作した。この特大ぬいぐるみは予想以上に好評で、直ちに関連会社である明大サポートによって商品化され、入試日に受験生が売店で購入して帰る姿も見られた。聞くと地方からの受験生で、明治大学まで来た記念にどうしても欲しかったとのことだった。そこで翌年には、受験生を対象にPR活動を強化するため「めいじろうカイト」を制作し、入試日に広報課員総出で受験生を激励しながら手配りで無料配布も実施した。入学手続きの際、明治を選んでいたかとの想いであつた。

2011年には、年間を通じて統一テーマのもと、各月ごとに「めいじろう」の活動を描いた卓上カレンダーを制作した。以後も毎年継続して制作されており、2026年のカレンダーは、キャンパスの名所をテーマにしたもので、学内各部署の窓口用などとして利用している。さらに、東日本大震災後には、節電を呼びかける学内キャンペーンと

して「めいじろう」型のエコうちわを無料配布したところ、瞬く間に配布分が終了するほどの反響を得た。

キャラクターの使用ルールや設定なども整備が進められた。「めいじろう」自身が新聞・雑誌・通信社から取材を受けることも多くなり、着ぐるみは「東京グラフィティ」誌のグラビアを飾り、TBS系列情報番組「王様のブランチ」にも登場するなど社会的な注目を集めるようになった。

「めいじろう」の活動は多岐に渡っている。賓客のおもてなしもした。留学促進イベントでは、当時駐日米国大使であったキャロライン・ケネディ氏と対面し、外交の重責



[写真3] めいじろうカイロ(上)とめいじろうエコうちわ(下)

を果たした。広報課代表としてトロフィーを受け取ったこともある。日本BtoB広告賞ウェブサイト部門で金賞に輝いた際、その愛らしい姿は授賞式会場で脚光を浴びた。ブランドブック及びVIMAニュアルを整備した際は、めいじろうの多様な魅力を引き出すため、それまで限定的なポーズしかなかったデザインに命を吹き込み、様々な感情を表す新デザインを揃えて全学的に使用できるよう共有インフラも整えた。LINEスタンプとしても展開してきた。当初は無料配布を予定していたが、配信元の規約上実現が難しく、代替案として「めいじろう募金」を構想し、売上金を奨学金に充当する企画を立てた。しかし、手続き上の課題で明大サポートに委ねる形となり、現在に至るまで発展的な運用がなされている。

さらに、都道府県ごとに特色をもたせた「ご当地めいじろう」も産まれた。誕生10周年(当時)を迎えるにあたり、広報課内でのブレインストーミングの中から若手課員からのアイデアを採用し、即実行に移した。商品化されたキーホルダーは、各地の父母会で高い支持を受け、グッズの中でも特に人気が高いと聞いている。10周年キャンペーンでは「めいじろうチャレンジ」動画の制

作、ゆるキャラグランプリ®への参加、特設サイトの開設、記念グッズ・ポスター制作など、多様なプロモーション活動が展開された。2021年には、本学博物館が制作した「捕方めいじろう」（十手と御用提灯を携えたデザイン）がミュージアムキャラクターアワードで1万4049票を獲得し堂々の1位に輝いた。他に「めいじろう」が活躍しているイベントを列举すると、入学式及び卒業式での記念撮影コーナー、オープンキャンパス、学園祭（明大祭・生明祭）、農場収穫祭、神宮球場で東京六大学野球応援、小学生向け学び体験イベント、地域商店街祭、消防出初め式、大学交流イベント、ホームカミングデー、父母会総会など、幅広い場面で大学と社会の架け橋として機能してきた。

商標ライセンスに関しては、基本的に本学の関連会社である明大サポートが企画・制作・販売を担うようにしている。広報課が制作した人気グッズは同社によ



〔写真4〕駅看板広告

り商品化され、さらに独自の企画による新商品も多数展開している。こうした文房具、クリアファイル、タオル、マスコットキーホルダーなどの各種グッズは、広報部門においては経済的利益はさておき、大学ブランドの物理的展開と認知浸透を促す広報媒体として機能している。2023年には大学オフィシャルグッズ店として「めいじろうショップ」がオープンし、人気の拡大を後押ししている。

学内関係者（在学生・教職員・校友・父母）での認知度は非常に高く、愛されるキャラクターになっており、今後も明治大学の一員であることの喚起・母校愛の醸成に繋がっていただくと考えている。また、学外に対しても、各種広報媒体や広告等での活用により、それまでの「バンカラ」「男くさい」から「親しみやすい」「かわいい」といった印象が拡散し、従来の広報手段を補完する新しい情報発信の核としての役割を果たしてきた。ある進学情報機関による高校生向け調査では、本学のイメージとして「活気がある」「親しみやすい」が上位に挙げられており、「めいじろう」の存在が親近感を高め、元気なブランドイメージの形成に寄与していると推察される。

公式キャラクターの導入効果としては、大学の認知度

向上（視覚的アイコンとしての役割、デザインと名称の印象効果）、広告媒体としての高い費用対効果、商品化による収益、キャラクターを通じた交流促進、さらには大学内外の一体感と組織への愛着を醸成することなどが挙げられるだろう。



〔写真5〕誕生10周年ポスター

おわりに

ゆるキャラブームのピークを過ぎたといわれる現在においても、オープンキャンパスでは「めいじろう」との記念撮影を希望する高校生が行列をつくっている。広報として期待された役割を「めいじろう」は今日に至るま

で十分に果たしているといえる。しかし、社会的環境の変化やデジタルメディアの発展に伴い、キャラクターの機能は新たな段階を迎えつつある。近い将来には、デジタル空間における展開、動画やアニメーション、SNSコンテンツなど、より動的かつ双方向的なコミュニケーション媒体として活用される可能性も高い。

「めいじろう」が右肩上がりの成長を遂げてきた時期は、ちょうど本学が広報戦略本部及び広報センターを設置し、広報活動に重点を置き始めた時期と重なる。「選ばれる大学」へ向けてのブランド展開として、各種パブリシティ戦略の実施、訴求先・伝えたい内容・伝える方法を精査、多岐にわたるマーケティングデータに基づいた広告改革、WEB時代を見据えたオウンドメディアの開設、教育・研究活動を中心とした専門的プロモーションの拡大など、費用対効果と情報価値の最大化を目指した業務改革が推進されてきた時期でもあった。様々な複合的要因により、志願者数の増加や複数の大学ランキング項目で1位を獲得するなど、成果が数値にも現れてきていたが、その中で「めいじろう」が果たしてきた象徴的・心理的效果は、その原動力の1つであったと考えられる。

V I V I 誕生から20年

―同志社女子大学の顔として―

川添 麻衣子

同志社女子大学
広報部広報室広報課長

はじめに

同志社女子大学公式キャラクター「V I V I（ヴィイ）」は、2003年に誕生した。V I V Iは在学生・教職員や卒業生らから、親しみを込めて「V I V Iちゃん」と呼ばれている。「同女のネコのキャラクター」といったように名前でもらえない時には、「この子の名前はV I V Iです」と多少感情的になって紹介した経験があるのは、きっと私だけではないと思う。

1 V I V Iの生い立ち

本学は2000年以降、新学部学科の開設など女子総合大学としての新たな歩みを始めていた中、ブランド力向上にも注力していた。2002年に在学生および教職員を対象に、原案となるキャラクターの募集を開始。約50件の応募があり、その中からネコをモチーフとしたキャラクターが完成した。ネコには自主自立・気高さと活発なイメージがあり、21世紀社会で本学がめざす女性像をアピールしやすいと考えた。2003年6月には名称も公募にて決定し、V I V Iは本学のプレゼンター役として活動を開始した。

名前「V I V I」には、英語の「vivid」を引用し、元気ではつらつとしたイメージが表現されている。V I V Iのそれぞれのパーツにも細かく意味があり、着用しているワンピースはキャンパス外観と同系のレンガ色で、本学の歴史を年輪風に表現したボーダー柄、靴には世の中の動きを素早く察知ししなやかに動けるよう、甲の部分にポンポンがあしらわれている。黒と青の2色の瞳は日本だけでなく世界を見渡し、手に持つステッキ（Vine）で人と

人とを結び合わせる。耳のリボンは同志社の徽章であり、全身で本学の歴史と3つの教育理念（キリスト教主義、国際主義、リベラル・アーツ）が表現された。

2 V I V I の活動範囲

2003年より、V I V Iを用いてさまざまな大学グッズが展開された。特に受験生向けのノベルティは好評で、文具のほか、携帯電話関連のグッズも展開された。卒業生にも認知度は高く、子ども向けに制作したV I V Iぬいぐるみを卒業生自身用に求められるケースは度々ある。誕生から10年以上が経過した2015年には、さらに親しみを得られるよう、11学科の学びの特徴を表した「学科ヴァージョンV I V I」が誕生した。

V I V Iは、単なるモチーフにとどまらず、学内のあらゆる掲示物の中で「お願いします。」と言っておじぎし、「応募待ってます。」と言ってウィンクしている。広報誌面上においては感想の一言を述べたり説明を補足したりするなどよく言葉を発し、誕生当初に願っていたとおり、プレゼンター役として非常に頼りにされている。当初か

らあらゆる場面での活用を想定して13ポーズを作成、ハロウィーンなど季節限定ヴァージョンを加えて計15ポーズのV I V Iが広報活動を行ってきた。規定ポーズ以外での使用は認めておらず、服装などの一部変更も原則として認めていない。一部変更の事例で記憶に新しいのは、2020年の新型コロナウイルス感染症拡大時、学内での使用に限っては、限定的にV I V Iにもマスクを「着用」させた。

おわりに

誕生から20年が経ち、平成レトロな雰囲気醸し出すようにもなってきたV I V I。時流を鑑みると、各種デジタルツールの中では3Dモデルの登場や声を聞くことができるなど、今後も展開の可能性は残っている。

本学にとって、V I V Iは皆に愛され、大切にされている存在と言える。単なるシンボルではなく、言葉をのせて思いを発信する役割を担うV I V Iは、真に本学構成員の「一人」であり、自身に与えられた責務をしっかりと果たしながら、今後も長く愛され続ける存在に違いない。

つながりを紡ぐえこぴよん

―学生・教職員・社会を

つなぐ存在として―

南雲 健介

法政大学総長室広報課課長

はじめに

私は現在、法政大学総長室広報課に所属し、大学公式キャラクター「えこぴよん」の管理・運用を担っている。かつては学生センターに所属し、学生のボランティア活動の推進を担当していた。この二つの経験の結びつきこそが、本稿を執筆する大きな動機となっている。

学生とともに活動した経験と、広報の立場から日常的にえこぴよんに関わっている現在の職務が重なり合うことで、えこぴよんが大学活動を支える存在であることを改めて実感するに至った。本稿では、学生センターで担当していた時期の取り

組みを一例として紹介し、えこぴよんが学生や教職員にとってどのような役割を果たしてきたのかを論じたい。

1 キャラクター誕生の経緯と公式化までのプロセス

えこぴよんは2008年、本学が推進する環境改善活動の一環として実施された学内公募により、学生が自らのアイデアをもとにデザインしたキャラクターとして誕生した。世界を舞台に環境問題解決のために活動するウサギである。その後、環境関連イベントなどでえこぴよんのグッズや着ぐるみが登場するようになり、学内で広く親しまれる存在となった。

2013年には大学公式キャラクターとして認定され、環境啓発にとどまらず法政大学の多様な活動を象徴する存在へと役割を拡大した。今日では、学生・教職員・卒業生・保護者・地域など、多様なステークホルダーと大学をつなぎ、親しみと信頼を醸成する役割を担っている。このように、えこぴよんは最初から「大学のマスコット」として誕生したのではなく、学生がデザインしたキャラクターが、その魅力や親しみやすさによつて支持を広げ、大学の公式キャラクターとして認知されるに至った、きわめて稀有な存在である。

2 コンセプト・デザインに込められたメッセージ

作者によると、えこぴよんには大学時代の思い出が込められている。中国での植林活動を伴うフィールドスタディに参加した際、現地の子どもたちに日本のキャラクターを描いたところ非常に喜ばれ、その経験を通じて、キャラクターが国籍を超えて愛される存在であることを実感したという。また、ゼミで小学校の環境教育を行った際、冊子にキャラクターを掲載すると子どもが喜んで問題を解いた。難しい環境問題でもキャラクターを通じて楽しく学べることを知り、深く感動したとのこと。さらに、えこぴよんが背負う地球儀のような気球は「自分の背中に地球の未来がかかっている」という思いを表し、服のオレンジとブルーは母校・法政大学のカラーを象徴している。

3 広報戦略と活用事例

印象深い事例として、2016年に学生が中心となって企画した「熊本物産展」と、そこで制作されたえこぴよんと熊本県PRキャラクター「くまモン」のコラボグッズが

ある「写真1」。熊本地震を受け、これを企画した学生たちは「自分たちにできる支援を形にする」ため議論を重ねた。当初は学内のグッズショップでの販売を想定していたが、「自分たちの手で売りたい」という学生の提案から、物産展の形式へと発展した。私は当時、学生センター職員としてショップ担当者への働きかけや在庫・価格調整、学生との打ち合わせの場の設定を担い、準備段階から企画を支えた。くまモンを使用するには熊本県側の審査が必要であり、その調整も大きな課題であった。

当日はトートバッグやパスケースなどのコラボグッズが販売され、利益はすべて義援金として被災地に寄付された。会場にはえこぴよんの着ぐるみも登場し、来場者との交流が生まれた。

新聞記事やプレスリリースによる広報の効果も相まって、学外からも多くの来場者が訪れ、一時は品切れとなるほどの反響を得た。さらに、



〔写真1〕えこぴよんとくまモンのコラボグッズ

後日、廣瀬克哉常務理事（当時、後の第20代総長）がコラボグッズを熊本県知事に届け、感謝の言葉をいただいたことも大きな成果であった。

この取り組みは翌年度以降もデザインを更新して継続された。重要なのは、学生主体の活動にえこぴよんを組み合わせること、大学の発信力や社会的メッセージを効果的に強化できた点である。学生のアイデアや行動力に大学公式キャラクターというシンボルを掛け合わせることで、活動そのものが大学のブランドを体现する広報素材となり、大学の理念や価値を社会に伝える戦略的手段として機能したのである。

4 キャラクターがもたらす効果

えこぴよんは、こうした実践を通じて「学生の活動に伴走する存在」として定着した。私は今でも当時のコラボバッグを手にする教職員を見かけるたびに、学生とともに歩んだ時間を思い出し、自らも前向きに取り組もうという気持ちが自然に湧き上がる。えこぴよんは法政大学に関わるすべての人の記憶と想いをつなぎ、もう一度前に進む勇気を与えてくれる存在で、次の行動を促す背

中押し役を果たしている。

また、学生・教職員・卒業生・保護者・地域の方々が一堂に会する大学イベント「法政フェア」や大学祭、オープンキャンパスなど全学的な場での登場、グッズやSNSを介した接触を通じて、卒業生や保護者、地域社会にも浸透してきた。えこぴよんが登場するブースには自然と人が集まり、写真撮影や短い会話が生まれる。こうした些細な接点の蓄積が大学への親近感を生み、情報発信の受け手を広げているのである「写真2」。



〔写真2〕卒業生のイベントに登場する着ぐるみのえこぴよん

5 運用体制と課題

えこぴよんは商標登録されており、使用にあたっては申請書の提出など所定の手続きが必要であり、営利目的の場合は手数料や使用料が定められている。学外利用や

商品化を希望する場合は、商標登録使用規程や取扱基準に基づき、正式な許可を得なければならない。

学内においても適切な管理が行われており、広報課が全学的な管理を担っている。利用にあたってはその用途や著作権等の観点から、基本的には登録商標と一致しないものは認められず、その都度確認と判断が行われてきた。大学ブランドを守る厳格さと、学生や教職員の主体的な活動を尊重する柔軟さの両立は、今後も課題である。

6 今後の展望

法政大学は2030年に創立150周年という大きな節目を迎える。この出来事は、単に記念年を祝うだけではなく、これまでの歩みを振り返り、次の時代に大学の理念や文化をどう継承するかを考える好機である。

えこぴよんは、その象徴として、これまで培われた「学生の挑戦を支え、ともに歩んできた存在」という役割を再確認し、未来に向けてさらに進化していくことが期待されている。周年事業は大学が社会へ発信する力を最も大きく発揮する場であり、えこぴよんは多様なステーク

ホルダーをつなぐ架け橋として機能し得る。

また、デジタル領域での展開も重要である。SNSやオンラインイベントでの活用は、若い世代や国際的な受け手に大学の魅力を伝える有効な手段となる。近年はダイアナ・コー総長が学生・教職員などとの対話で感じた言葉や体験を綴る公式コラム「総長の出会いメモ」などの企画にも登場しており、Instagram (@hosei_university) での発信においても重要な役割を果たしている「写真3」。こうした取り組みは、えこぴよんが150周年を見据えた大学ブランド発信において引き続き大きな力となることを示している。

最後に、ダイアナ・コー総長の言葉を紹介したい。

「えこぴよんは、学生の活動や大学の歩みを象徴する存在です。大学と社会をつなぎ、親しみやすさを通じて信頼を育む。その役割はこれからも大きく広がっていくでしょう。」



〔写真3〕本学Instagramに登場するえこぴよん

応援団長ライナンくん

―南山生の闘志に火をつけろ!―

吉田 敦

南山大学学生部長・理工学部教授

1 勇猛なライオンの誕生

南山大学体育会の公式キャラクターは、上南戦（上智大学・南山大学総合対抗運動競技大会）の大会50回目を記念して、2009年に体育会執行委員の学生の発案で誕生した。

上南戦は、カトリック修道会を設立母体とする上智大学と南山大学のスポーツ対抗戦で、1960年より続く伝統的な行事である。毎年7月頃に、約30の競技が行われ、選手だけでなく多くの観客も共に熱い戦いを繰り広げている。

大会に勝利するため、南山生の気持ちをひとつにまと

め、闘志を掻き立ててほしいという願いを込めて、上智大学のシンボルである鷹に対抗し、百獣の王、ライオンをモチーフにしたキャラクターが生み出された「図1」。たてがみの青色と胴体の橙色は南山大学のスクールカラーを採用してデザインした。名前は、「ライオン」と「南山」を合わせて「ライナンくん」と名付けられた。現在は、たてがみを立派にし、筋肉をつけて、より「自信に満ち溢れ、力強い印象」を与えるデザインへリニューアルしている。



〔図1〕ライナンくんのキャラクターデザイン

2 上南戦マスコットキャラクターから 大学内の大スターへ

ライナンくんの誕生後、ラッピングカーや、Tシャツ・タオルなどのグッズが制作されるとすぐに話題となり、写真撮影やグッズを求める人で溢れ返った「写真1」。学内だけでなく、高校生からもライナンくんのグッズがほしいという声上がるほどに評判を得た。上南戦で着ぐるみを登場させ、セレモニーや競技会場に駆け付けると、会場は一気に盛り上がり、期待通り、南山生の士気を大いに高めた「写真2」。結果として、誕生の翌年から2年連続総合優勝という結果をもたらした。現在もその人気は続いており、応援団長として南山大学の勝利のために活躍をしている。

最近ではその人気ぶりから、大会の応援だけでなく、体育会の顔として広報面でも活躍の場を広げている。春の新入生勧誘イベントでは一緒にビラ配りをして体育会入会希望者増員のための一翼を担った。夏に開催される南山ゆかたフェスでは、学内に設置されたフォトスポットに立ち、一般学生に対する認知度向上とともに、イベント



〔写真1〕ライナンくんのグッズ



[写真2] イベントに登場するライナンくん

の盛り上げにも貢献した。秋の大学祭では子供向けゲームに登場し、南山大学の課外活動を外部にアピールしながら、地域貢献も果たした。

イベント会場へひとたび登場すると巻き起こるライナンくん旋風は誰にも止められない。

3 一頭のライオンにかける 南山大学課外活動の未来

ライナンくんは誕生当初、上南戦に登場する応援キャラクターとして活躍していたが、現在は南山大学体育会公式キャラクターとして認定されている。2019年に行われた、学生部と体育会執行委員会との体育会強化検討会において、南山大学の体育会を盛り上げ、より強い選手に入会してもらうため、ライナンくんの知名度を活用していく案がでたことをきっかけに認定された。

近年、体育会の枠を超えて活躍するライナンくんは、課外活動全体の活性化に大いに貢献している。今後は、大学公認キャラクターに認定され、より幅広く学内外に南山大学の課外活動で活躍する学生たちの魅力を発信して



[写真3] ラINANちゃんと岡田 悦典副学長(左)と吉田 敦学生部長(右)

いくことを目指す「写真3」。

ライナンちゃんの活躍でより広く南山大学の課外活動を知ってもらい、頑張る学生たちを応援してくれるファンを増やしたい。そして、ライナンちゃんをきっかけに多くの学生が課外活動へ参加をし、自身の個性を磨いてほしい。互いの輝く個性を認め合い、切磋琢磨することで学生たちが大きく飛躍する未来を期待する。

もしワークショップの ファシリテーターが大学の 大教室授業をワークショップ として設計したら

菊地 映輝

武蔵大学社会学部准教授

はじめに

筆者は大学教員として働くとともに、様々な場所やテーマでワークショップの設計を行うことを生業としている。また、設計したワークショップを実際に進行するファシリテーターとしても活動している。そのバックグラウンドもあってか、筆者は大学の授業をワークショップとして捉えている。本稿では、履修人数が100～200人程度の比較的大きな規模の授業、いわゆる大教室での授業をどのように「ワークショップ化」するかについて、筆者なりの実践とそこでのアイデアを読者に提示したい。

1. 筆者にとつての「ワークショップ」

ワークショップと一口に言っても多種多様なものがあり、設計者や分野によって方法は異なる。筆者が設計・実施するワークショップは、日本に「フューチャーセンター※」という概念を紹介した野村恭彦氏(KIT(金沢工業大学)虎ノ門大学院教授)と、その周囲で実施されているものに近い。筆者がワークショップを設計する上で活用する『ゲームストーミング…会議、チーム、プロジェクトを成功へと導く87のゲーム』(オリリー・ジャパン、2011年)という書籍も、野村氏が監訳として携わっている。同書は、ゲームの仕組みを採用したワークショップの方法論集であり、様々な目的に応じた手法が掲載されている。この書籍に掲載されている方法論を用いたワークショップでは、参加者はゲームをしているかのように楽しみながら議論し、考え、アウトプットを行える。この仕組みを大学の授業にも導入することで、より効果的な教育ができるのではないかと筆者は考える。

筆者のワークショップの特徴は、ファシリテーターが筆者一人でも、数十人もの参加者を相手にワークショップを実施する／できる点にある。ファシリテーターの役割は、ワークショップの円滑な進行ならびに、参加者間の議論を

促進することにある。ワークショップ参加者に対してのファシリテーター比率が大きければ、より丁寧に参加者全員に対してケアが行き届いたワークショップの実施が可能である。

しかし、現実には予算や運営人員などに制約がある中でワークショップを実施しなければならないことも多い。そうした中で、ファシリテーターが自分一人の場合でも、ワークショップをどうにか成立させるためのテクニクを筆者は模索してきた。見つけ出したテクニクは2つある。1つは、実施するワークの細分化である。「あるテーマについてこれから話し合ってください」という漠然とした指示を参加者に出すのではなく、議論を細かなプロセスに細分化し、各プロセスをワーク(作業)として提示する。言い換えれば、参加者がそのタイミングで何をすればいいかを細かく指示するということである。そうすることで、各参加者の役割やタスクが明確になり、参加者が何をすべきか迷う時間を減らせる(得てして、そうしたタイミングに議論が停滞することが多い)。もう1つは、参加者全員をきちんと観察することである。筆者は定性調査を主たる方法論として採用する研究者であり、観察は比較的得意である。参加者をきちんと観察し、議論が止まっているグループを見つけれ

ば、直ちにそこに飛んでいく。そして、停滞の理由を聞き、ヒントや助言を与えるといった適切な介入を行う。今日まで筆者は、こうしたテクニクを駆使し、ファシリテーターが1人の場合でも大人数が参加するワークショップをなんとか成立させてきた。

2. 大教室での授業が抱える宿命

大教室での授業は、ともすれば教員から学生に一方通行で知識を伝えるものになることが多い。教員がとても良い授業をすれば、最初はみんな真剣に聞いてくれる。しかし、授業が進むに連れて段々と学生が飽きていき、つい私語や居眠りが始まってしまふ。これは、日本全国この大教室の大教室でも生じる現象で、いわば宿命ではないだろうか。もちろん、学生たちの多くは真剣に授業を受けようと努力している。しかし、いつ話が振られるかわからないという緊張感を伴った小規模教室での演習型授業とは異なり、大きな教室では集団の中に1人ひとりの学生が埋もれ、どうしても緊張感に欠ける空気が生まれたり、主体的に授業を受ける感覚が学生の中で希薄になったりする。その結果が、授業中の私語や睡眠なのではないかと考える。

3. ワークショップを大教室授業に導入する

この大教室での授業の宿命を乗り越えるために、筆者はワークショップを導入した授業を展開している。といっても、すべての回をワークショップ仕立てにしている訳ではなく、筆者が学生に対して知識を伝えることを主とする（いわゆる講義形式の）回も、学期中に半分以上存在する。筆者はこの講義形式の回をワークショップにおける「インスピレーショントーク」に位置づけて実施している。インスピレーショントークとは、ワークショップにおいて、参加者が議論したり考えたりする際のヒントやベースとなる話のことである。筆者が携わってきたワークショップでは、専門家に短めの講演を行ってもらったことが多い。筆者は、それを応用し、自らの講義をインスピレーショントークに位置づけている。そのために必要となるのが、履修者に対して議論したり考えたりする対象となる「お題」を事前に与えることである。筆者が本務校で担当する「メディアと社会」という授業（履修者数は毎年100～200人程度）では、履修者に対して「1つの社会問題を選び、その解決をはかるためのメディアアキャンペーンを考えてください」というお題を提示した

上で、講義を実施している。これにより、履修学生はただ漫然と授業を聞くのではなく、自分たちが行うメディアキャンペーンのアイデア立案のヒントや基礎となる知識を得るという目的意識のもと、主体的に講義を聞いてくれるようになる。その際にもう1つポイントとなるのは、履修者を複数名から成るグループに分け、グループでお題に取り組ませることである。それにより、グループ内での活躍のため（あるいは恥をかかないため）に、授業を真剣に聞こうというモチベーションを生み出せる。

もちろん、これだけではただのPBL (Project Based Learning) 型の授業と大差ない。大教室授業のワークショップ化の本質は、当然ワークショップ形式の回にこそある。先述の「メディアと社会」の授業では、「社会問題解決のためのメディアキャンペーン立案」というお題を考えてもらうために、計3～4回にわたって授業内でのグループワークを実施する。そのグループワークを筆者はワークショップとして設計するのである。例を示そう。先にも述べた通り、ただ漠然と「アイデアを考えてください」という指示を出すだけでは、学生たちの議論もアクションも停滞してしまう可能性が高い。そうさせ

ないために、アイデアを考えるプロセスを細分化する必要がある。この授業のお題に関しては、最初にグループ内でどのような社会問題をテーマにするかを議論してもらい、テーマを決定してもらおうとよい。その際にも、ただ「話し合ってください」という指示を出すだけでは、時間内にアイデアを生み出せないグループが出てきたり、あるいは終始一言も喋らずにグループワークに同席する学生が生まれるリスクがある。そうした状況を防ぎ、学生にグループワークを楽しんでもらうためには、例えば「ブレインストーミング」などのワークショップにおけるベーシックな手法を導入すればよい。筆者が採用するブレインストーミングでは、各人が思い浮かんだアイデアをひたすらに紙に書き、グループ内で共有してもらう。その上で、最も良かったアイデアをグループ内でメンバーに投票させ、最多票数のものをグループのテーマとさせる。これにより、何もしない状況を生み出さず、内気な学生にも活躍の機会を用意できる。筆者は「メディアと社会」授業のグループワーク回を、こうしたテクニックを用いてワークショップとして実施している。

4. 大教室授業をワークショップ化する際の敵

以上、大教室授業をワークショップ化する際の筆者なりの実践やそこでのアイデアについて述べてきた。紙幅の都合により全体像は示せなくとも、最低限のエッセンスは提示できたのではないだろうか。本稿の最後に、大教室授業をワークショップ化する際の「敵」についても言及したい。それは教室の形である。グループに分かれて議論をしても、それは教室の形である。グループ全員が向き合って議論を行うことが望ましい。そのため、大教室にありがちな階段教室などはワークショップに適さないのである。最良の解決策は、グループワークに向いた形状の教室を配当してもらうことだが、それが困難な場合も多い。そうした場合にも、諦めずに工夫をしてワークショップを実施する。それがファシリテーターの宿命であり、大教室授業でワークショップを試みる教員の基本姿勢となる。

※複雑な問題をスピーディに解決することを目的に、多様な専門家やステークホルダーを集めてオープンに対話すること。日本においては企業や大学によるオープン・イノベーション、市民参加型街づくりなどに活用されている。(参考：野村恭彦『フューチャーセンターをつくらう…対話をイノベーションにつなげる仕組み』(プレジデント社、2012年))

「食」を通じて人々の健康とWell-Beingに貢献

はじめに

日本女子大学（新制）が1948年に発足し、家政学部4学科の一つとして食物学科が設置された。翌年には食物学科を含む通信教育部が開講された。折しも国民の健康増進を目指して栄養士法、保健所法、医療法などが公布された時期である。戦後間もない時期であったが、食料不足が徐々に解消し始め、国民の食事と栄養に対する関心と期待が高まっていた。多くの栄養政策が施行され、栄養不良の改善と健康維持・増進が進み、日本は高度経済成長を迎えた。1962年には、高度な専門知識を持つ栄養の専門家として「管理栄養士」という国家資格が誕生した。このような背景を受けて1968年、本学家政学部食物学科では、食物学・食品学を主とする食物学専攻と、栄養学を主とする管理栄養士専攻という2つの専攻が設置され、より専門的な教育体制へ移行した。

また、1990年代には日本全国で、特に私立大学を中心に、食物学科や栄養学科が次々に新設され、ほぼ全国の都道府県に複数の食物学科や管理栄養士養成校が存在するようになった。以降四半世紀にわたり、本学はじめ、食と栄養に関係する全国の大学が、学生教育に尽力してきた。その結果、多くの卒業生が巣立ち、食品産業、医療、福祉、研究等々、多様な分野で現在も活躍し、社会貢献していることは周知のとおりである。

しかし、この四半世紀、食物と栄養の意義・評価は大きく変遷した。人々の健康とWell-Being（幸福・豊かな生活）には、食ることと栄養が不可欠であることが国際的にも明白になり、食事療法が薬物療法に比肩する科学的根拠をもって、具体的に疾患治療ガイドラインなどに明示されるようになった。

このような背景にも後押しされ、本学は伝統ある家政学部食物学科を閉じ、科学的観点を重視しながら食品・調理・栄養の3分野を総合的に学ぶ「食科学部」を20

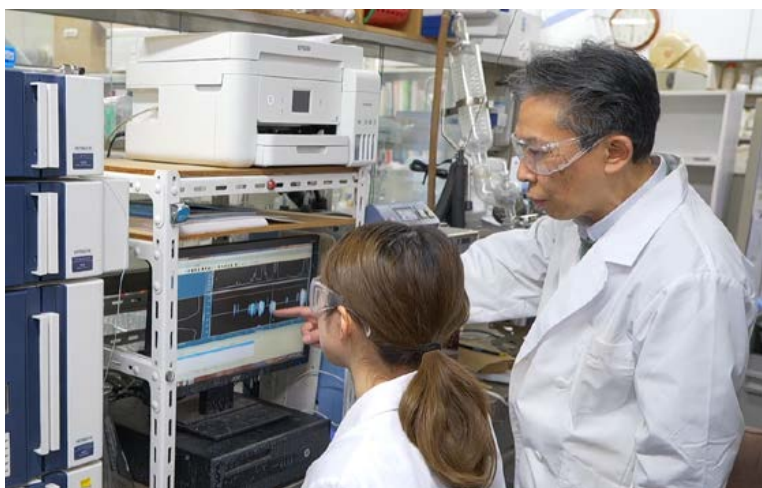
25年4月に開設した。前身である2つの専攻が学科化され、2つの学科を包含する形で食科学部が設置された。学科の名称は学問領域を反映するものに変更し、食物学専攻は「食科学科」へ、管理栄養士専攻は「栄養学科」となった。さらに、食科学科には通学不要の食科学部通信教育課程が設置された。

1 食科学部という名称への思い

本学食科学部の日本語の名称には、「栄養」の文字はない。しかし、英語表記は「Faculty of Food and Nutritional Sciences」であり、日本語表記にはない「栄養科学[Nutritional Science]」が含まれている。つまり、本学食科学部の「食」には、「栄養」の意味が込められている。近年の日本では、食品・食物の量と質はほぼ全国的に確保されている。しかし、諸外国では困難なところが現在もある。食の安定供給があつて初めて適切な栄養管理を行えるので、世界には栄養障害で苦しむ人々が多い。日本でも、長引く天候不良や災害等の不測時には、食の安定供給が絶たれる可能性はある。

また食品成分や機能は、味覚、食欲、消化・吸収などに影響し、最終的に栄養状態にも関与することが判明してきた。このような背景を俯瞰し、食品から栄養までの一連の流れをわれわれは「食」と捉え、食科学部という名称にした。

冠のない食科学という学部名称を付けたのは、本学が初めてである。家政学部という名称から、理系であることを明示した食科学部という名称になつても、受験産業では文理融合型の生活科学 (Life-Science) に分類されている。「食」は、文化、生活、宗教などに関係している。工学や理学のような純然たる理系分野に分類される必要はない。しかし、本学の食科学部



[写真1] 食品機能学研究室

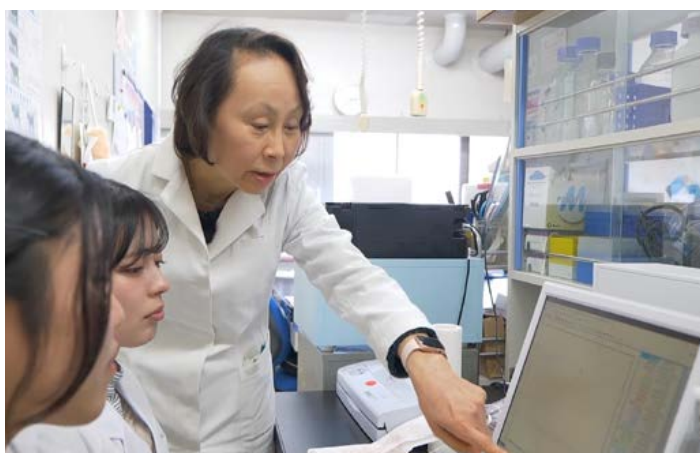
では、基本科目として化学と生物という理系科目を重視している。

2 本学食科学部の教育理念、特色

食科学部の教育理念は、「食」を通じて人々の健康とWell-Beingに貢献できる能力を備えた人材を育成することである。科学的視点から「食」を幅広く学び、現

代の食・栄養・健康・文化・環境などの課題に対応できる力を養う。農学系の「食」というより、生活者の視点を重視した実生活における「食」を想定している。栄養学科も、医科学的視点を重視している。

食科学科の特徴は、食品加工・調理・食品



[写真2] 調理・食味評価学研究室

機能・物性など「食そのものの科学」に重きを置いている。食文化から最先端テクノロジーまでを網羅し、「食」をつなぐ専門知識や技術を生かして、「食」の未来を切り拓くプロフェッショナルを育成することを目標としている。卒業後の進路は、食品産業における研究開発や流通、品質管理に関わる専門職、中学・高等学校の家庭科教員、フードスペシャリストなど、活躍できるフィールドは多彩である。

栄養学科では、厚生労働省が定める管理栄養士養成施設のカリキュラム等に基づいて教育・実習・実験等が行われている。栄養管理・健康増進・疾病予防・ライフステージに応じた栄養の応用など、人の健康に関わる栄養学を学ぶ。科学的な理解の土台となる「基礎



[写真3] 食品学・食品包装学研究室

科学」を学んだ上で、多様な領域・観点からの専門性が高い「栄養学」、人体の機能や健康の維持に関する「医学・保健学」を通じた医学的視点で栄養を深く追究する。さらに食品の成分や特徴について学ぶ「食品学」、栄養とおいしさの両面を追究する「調理学」について、講義・演習や実験・実習の体系化されたカリキュラムを通じて学修する。卒業後の進路は、管理栄養士として医療、行政、教育（栄養教諭）、研究、福祉、給食・中食・食品産業、スポーツ、国際協力など多くの幅広い領域がある。

各学科とも50人以下の少人数教育であり、実験・実習ではさらに少ない人数に分けて行っている。実践的な実験・実習授業が早期からあり、



[写真4]臨床医学・代謝内科学研究室

手を動かして学ぶ機会が多い。両学科のカリキュラムの特徴としては、他大学と同様に、基礎科目→導入科目→発展・応用科目→卒業研究という流れで学年が進み、教職課程（栄養教諭／家庭科教諭）の科目も配置されている。通信教育課程では、テキストまたはオンラインで履修可能な科目が多く開講されており、パソコンとインターネット環境があれば場所や時間に関係なく学修できる。そのため、入学者の年齢層、

職種、目的は多様である。また、食科学部通信教育課程の科目修了試験はオンライン試験であり、自宅、職場などで試験を受けることができる。スクーリング科目を除けば通学の必要はなく、遠隔地から入学・卒業、資格取得などができる。IT環境など課題は多々あ



[写真5]栄養代謝・臨床栄養学研究室

るものの、これからの学修形態の重要な選択肢の一つになると思われる。

近年、食と栄養に関する国内外のニーズに 대응するには、4年間の学部だけの教育と研究では不十分になりつつある。そのため現在、本学では、2027年度開設の大学院「食科学研究科食科学専攻（修士課程）（仮称）」を構想している。2025年に新設した食科学部に継続して

教育と研究ができるよ

うに、1つの食科学という専攻であるものの、食科学系と栄養学系の2つの領域の設置を予定している。「研究方法概論」と「専門科学英語」という2つの科目を新たに設置し、大学院生の研究着手と論文作成を積極的に支援する。



[写真6]食経営管理学的研究室

3 卒業後の進路・キャリアにおける課題

現在、企業側から食物と栄養の専門家が「理系専門職」として十分に評価されていない可能性がある。医学・薬学・工学などと比べ、「食科学」「栄養学」が社会インフラとしての重要性を十分に認識されておら

ず、卒業後の進路として、大学で学んだこととは別の職種、特に一般職、あるいは総合職に卒業生が就くこともある。専門性は高いが、企業、産業界での受け皿がいまだ限定的であることも関係していると思われる。また近年、医療従事者としての管理栄養士・栄養士の就



[写真7]解剖生理学・食物生物学研究室

業実態は不明瞭であった。2023年5月1日、医療従事者の職種として厚生労働大臣が定めるものに、管理栄養士・栄養士が追加された。これにより、管理栄養士の医療従事者としての就業実態が、他の医療従事者と同様に正確に把握されるようになった。今後、各業界において、その存在と職種の専門性が十分に認識されることを期待する。

4 将来の展望

1948年の開学当初に比べると、日本人の食・栄養に関する状況は大きく変わり、時代の逼迫ひっぱくした必要性は減弱した。しかし、若年者の潜在的栄養障害、中高年者の生活習慣病、そして高齢者のフレイルの予防・改善が今後も重要な課題であり、食と栄養の重要性が低減したわけではない。また、前述したように2000年以降は、国際的な食と栄養の意義・評価が大きく変化した。現代は、AIに代表されるように、膨大な情報の分析によって、貴重な知見を得られる時代になった。公衆栄養的視点で見れば、食品、栄養素の情報は一人当たりの次元が

多く、食品・食物×栄養素の情報量は、健診情報などに比べてもはるかに多量である。つまり、人々の食と栄養は、膨大な情報を常時生成している。それらがデジタル保存され、研究者・教育者の手元に届くことも遠い未来ではないだろう。食品機能や食品加工技術も、食材・食品の種類の数に応じて、食品機能性や食品加工技術があっても不思議ではない。しかし、食を「科学」というには、提示した事象・方法・結果などの再現性、普遍性、妥当性などを高め、科学的根拠を整える必要がある。変動と「ゆらぎ」のある食科学分野で、今後どのようにこれらを収束させるかが大きな鍵ではないだろうか。食科学分野は裾野が広く、伸びしろの大きい科学分野である。数十年後、「食」で拓いた新たな世界がどのようになっているか大変楽しみである。

[文教大学]

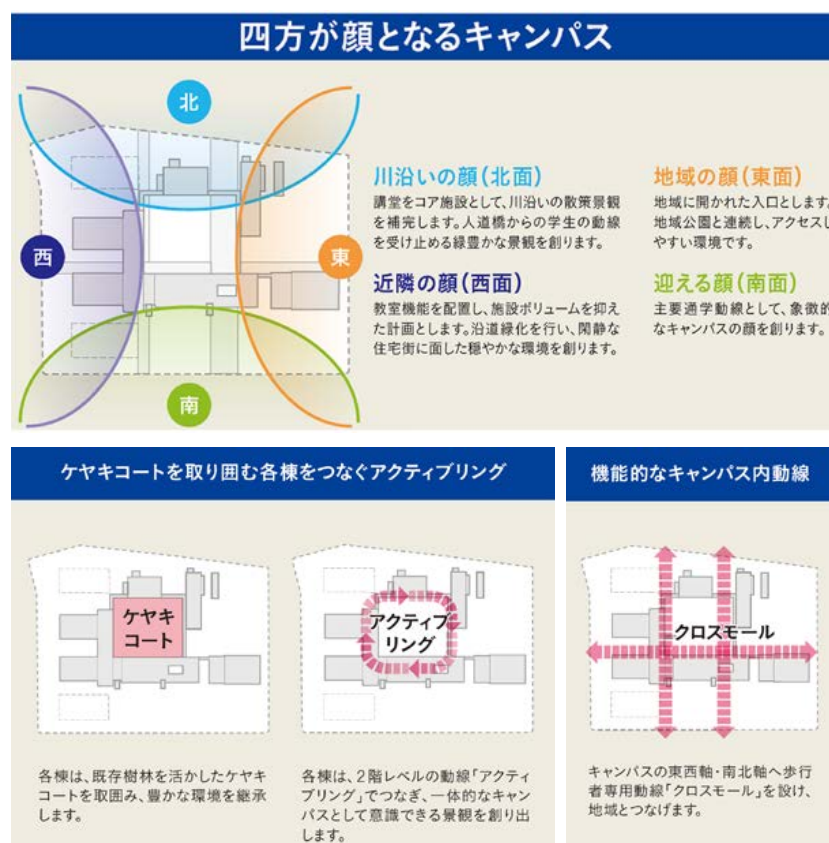
ケヤキコートが育む学生と地域の“わ” —学生生活と地域交流の場—

菅沼 隆昭 文教大学大学事務局局次長

1 キャンパスの特徴・機能

文教大学では、既設のキャンパス（越谷、湘南）に加え、2021年4月に「東京あだちキャンパス」を開設した。東京あだちキャンパスは「地域に開き、地域に溶け込み、学究のフィールドを拡げる」ことをコンセプトの一つとした「地域開放型キャンパス」である。「塀」などを設けず地域と隔たらない外観が特徴的であり、キャンパス中央に学生活動や地域との交流の「場」として「ケヤキコート」と称する中庭を配置した。そこには4本の「櫟の木」があつて、それが愛称の由来である。ケヤキコート内には芝生のエリアを設け、多くのベンチやテーブル・椅子を置いている。校舎はケヤキコートの周囲に配置さ

れ、ケヤキコートを周回する回廊でつなぐ構造としている（アクティブリング）。また、塀のないキャンパスは、四方向に出入口を有し、ケヤキコートを中心に東西南北へ通路を設けている（クロスモール）。ケヤキコートは、キャンパスの機能的な動線の中心であり、学生・教職員・地域の“わ”をつくる場の役割を持つ。



2 ケヤキコートが学生生活に果たす役割

学生生活においてケヤキコートは様々な機能を持つ。まず、日常の「憩いの場」であり、学生がベンチ等を利用して友人と昼食を共にしたり、会話を楽しんだりする場所になっている。また、「学園祭（華叉祭）」をはじめ学生団体が企画するイベント会場にもなり「賑わいの場」としても機能している。さらに、学生が卒業論文執筆にあたり、社会における広場や公園の機能に着目し、ケヤキコートを題材に「地域におけるオープンスペースの役割と今後の在り方」というテーマで取り上げた例や、教室を飛び出してケヤキコートでゼミの活動を行っている場面も見られ、「学修や研究の場」でもある。このように学生にとってケヤキコートは「成長の場」となっている。

3 地域と大学をつなぐケヤキコート

ケヤキコートは、多少のお断り事項はあるものの、日常的に地域の方々の通行や滞在にご利用いただいている。近隣の幼稚園や託児所のお散歩コースになっていたり、親子連れが遊ぶ様子なども見られたり。利用者からは「広

く安全な場所なのでよく利用している」とのお話を聞く。また、顕著な事例として、本学と包括連携協定を締結している足立成和信用金庫と地域町会との共同開催イベント「はなはた文教マルシェ」では、ケヤキコートをメイン会場としている。このマルシェには、地域事業者、自治体、区内の高校や小学校および本学の学生（ゼミの研究発表者や運営ボランティア）が出展・参加。多くの地域の方々のご来場があり、秋期の恒例行事として地域に定着してきた。

おわりに

地域に開き、溶け込むために様々な工夫が施されたキャンパスは、学生や教職員に地域共生の意識を自然にもたらしていると感じる。本稿冒頭に触れた樺の木はキャンパス開設前からあった足立区の保存樹である。また、キャンパス内には既設キャンパスへオマージュを込めた構造物がある。地域や本学の歴史、先人の想いを感じながら、地域と共に発展するキャンパスでありたいと願う。



はなはた文教マルシェ

[追手門学院大学]

教職学協働でつくる 「居心地のよい」大学

森田 学 追手門学院大学大学事務局教務・学生支援部部長

1 三角形の校舎と屋上広場

1966年、追手門学院大学は大阪府茨木市に茨木安威キャンパスを設け、開学した。

その後、学生数の増加などを背景に新たな校地を求め、2019年に京都と大阪の中間地点にあるJR総持寺駅から徒歩圏内の地に茨木総持寺キャンパスを開設。学院創立130周年記念事業の一貫として、1辺約130mの正三角形を基調とした象徴的な大学棟「Academic Ark」を開設した。さらに2025年4月には新校舎を開設し、収容定員は約9600人に達する。

「Academic Ark」は高さ約22mで、1階に「WILホール」

や紀伊國屋書店、各種窓口を配置し、上層階には教室や「アラムナイライブラリー（図書館）」を備える。最上階中央部には中庭「スカイガーデン」が広がり、OIDA Iモニュメントや芝生、ベンチが並ぶ。春や秋には学生が談笑する姿が見られる。

2 校舎の中央部に広場を設けた理由

本キャンパスの設計コンセプトは、「学びあい、教えあい」が自然に生まれる賑わいの空間を形成することにある。そのため、校舎中央部の機能配置については多くの議論が重ねられた。1階中央部のWILホールは、3カ所いずれのエントランスからも中心で交わる位置にあり、学生や来訪者がくつろぎ、談笑しながら交流を深める場となっている。頭上には図書館を置き、人の流れが交差する場所に知の蓄積の場を設けることで、議論と学びの相乗効果からイノベーションが生まれるよう設計されている。

その上層に位置するスカイガーデンは、学生が集い



Academic Arkの屋上俯瞰図

ラックスする場である。昼休みには友人とランチを楽しむ姿や、テラス席で勉強に励む姿が見られる。校舎中央部は人々が交差する場として設計され、屋上緑化は空調負荷の低減やヒートアイランド対策にも寄与している。

3 学生・教職員で考える “居心地のよい” 大学

スカイガーデンは学生が集う場として設けられたが、当初は緑化エリアのみが広がる空間で、学生たちは芝生に直接座ることが多かった。また、2025年4月の新校舎開設まで茨木総持寺キャンパスはAcademic Ark 1棟での運用だったため、学生の居場所づくりは学生生活上の課題であった。

そこで学友会組織「学友会追風^{おいかけ}」は、学生生活の充実を目的にアンケートを実施。結果、学生が空き時間に求めるのは「休息が取れる環境」「友人と談笑できる環境」であり、平均滞在時間や理想の空間イメージをまとめ、「憩いと出会い」をコンセプトとする新たな居場所創出を提案した。その後、学生支援課や管財課との協議を経て、くつろげるベンチや出入口にスロープ、また人が出会う象徴としてOIDAイモニュメントの設置が決

定。現在では、オープンキャンパスなどのイベントで訪れた人々がモニュメントを背景に撮影し、晴れた日には学生が周辺で昼食をとる光景が日常となっている。この提案を行った、学友会追風は、学生会員と教職員会員で構成される教職協働に学生を加えた、「教職学協働」で運営している学友会組織である。会長は学長がつとめており、総会の中では学生役員が直接学長に提案し、自分達の思いや意見を伝えながら、同じ立場で議論している。

このプロジェクト以後も、学生会員からの提案で学生生活向上の取り組みを展開している。たとえばAcademic Ark内のエリア別の床面色分けによる動線誘導など、学生の声を大学に届ける活動から実現した事例は少なくない。執筆者である私自身も総会では教職員会員として、学生からの提案に対して、同じ立場で議論を行っている。今後も学生の声を直に聞きながら、「教職学協働」で“居心地のよい”大学を目指していきたい。



スカイガーデンの様子

[東京女子大学]

真理を探求し、ともに学びを深める空間

春田 和恵 学校法人東京女子大学大学運営部長

1 VERA広場の概要

正門を入ると目の前に広がる芝生の広場がVERA広場である。

東京女子大学の代表的な卒業生のひとり、瀬戸内寂聴氏が、初めてキャンパスを訪れた時のことを小説『場所』に記している。

「鉄柵のようなさりげない門は、なかば開いていて、誘いこむようななつかしい感じがした。（中略）キャンパスを歩き廻るうち、何が何でもこの学校に入りたいと決意した」

本学は、1924年（創立7年目）に、それまで仮校舎のあった角筈から現在の善福寺に学びの場を移した。キャンパスの建物

群の設計者である建築家アントニン・レーモンドは、正面の本館と本館から左右に両手を広げたように広がる教室棟、そして、門を入った右手手前にチャペルと講堂を配置。それぞれを渡り廊下で繋ぎ、口の字で囲むことによりこの空間を造り出した。キャンパス内には、教員と学生の距離を縮め、ともに学びを深めるための配慮が随所に施されている。休み時間には校舎と校舎を行き交い、天気の良い日には芝生の上で語らう学生たちの声が響いている。

広場の中央には小さな池があり、6月には睡蓮の花が咲き、その水面がピンクに染まる。池の脇には時計が設置され、キャンパスの歴史と美しさを象徴するモニュメントとしても親しまれている。

2 VERA広場の名称の由来

大学をめぐる環境が変革の時代を迎えた2006年、第1期キャンパス整備計画が策定された。安全で質の高い教育施設の整備、環境に配慮した施設整備、計画的・効果的な整備と施設管理の三原則が打ち出された。このとき、新たに設置されたオープンスペース（学生が憩い集え

る空間。緊急時には避難誘導のスペース」と区別するため、2012年に学生・教職員を対象に名称を募り、本館前庭を「VERA広場」、オープンスペースを「cross広場」と呼ぶことが決定された。「VERA広場」は、正面に佇む本館に刻まれた本学の標語“QUAECUNQUE SUNT VERA”（すべて真実なこと※）から来ている。因みに「cross広場」は本学のキリストの精神を示す「犠牲と奉仕、(Service and Sacrifice)」を表した校章が由来である。真理の探求のための自由な学問の場、一人ひとりが「真実」を感じ取り、学び、尊ぶことを実現するための空間を提供し続けている。

3 VERA広場の四季

4月、講堂で行われる入学式に出席する新入生で溢れかえる。大地震発生を想定した年1回の全学避難訓練では避難場所となる。9月、授業が再開され夏の間に育った青々とした芝が気持ちを新たにした学生たちを迎え入れる。11月、大学関係者、地域の方たちを招き、大学祭VERA祭のメイン会場となる。12月、アドヴェントとともにクリスマスを象徴する本館前のツリーに光が灯さ

れる。3月、色とりどりの袴やスーツに身を包んだ卒業生たちが4年間の学びを胸に巣立って行く。

「キャンパスの環境が落ち着いていて、休日でもきてしまうくらい居心地がよかった」

本学は2028年に創立110年を迎える。この学びの空間をいつまでも守り続けていく。

※新約聖書フィリピの信徒への手紙第4章8節



東京女子大学本館とその前に広がるVERA広場




I N T E R V I E W

公立大学法人神奈川県立保健福祉大学大学院 保健福祉学研究科研究科長、
公認スポーツ栄養士

鈴木 志保子さんに聞く

〔聞き手〕 外川 智恵さん 大正大学表現学部教授



アスリートたちの健康と パフォーマンスの向上を目指し スポーツ栄養学の礎を築く

C L O S E U P

すずき・しほこ

1965年生まれ、東京都出身。公立大学法人神奈川県立保健福祉大学大学院保健福祉学研究科研究科長、公認スポーツ栄養士。公益社団法人日本栄養士会副会長。一般社団法人日本スポーツ栄養協会理事長。日本パラリンピック委員会強化本部員。1988年、実践女子大学卒業。同大学院修了。東海大学大学院医学研究科にて博士(医学)取得。2000年に国立鹿屋体育大学助教授に就任。2003年より神奈川県立保健福祉大学栄養学科准教授、2009年より教授、2021年より栄養学科長、2023年より現職。

健康の3原則に深く関わる スポーツ栄養学

外川 2008年に開催された北京オリンピックで、女子ソフトボール日本代表チームが金メダルの栄冠に輝きました。その時、アスリートの皆さんの栄養管理を手掛けていたのが、今回お話を伺う鈴木志保子先生です。最初に先生の専門分野を教えてくださいませんか。

鈴木 アスリートや普段の身体活動量が多い一般の方を対象とした、スポーツ栄養学が専門です。特にアスリートに関しては、栄養学の知見を基にパフォーマンスを向上させることが、大きな目的の一つです。「健康の3原則」は、栄養・運動・休養といわれますが、スポーツ栄養学はそのうちの栄養と運動に関連することから、健康の維持にも寄与します。

外川 スポーツ栄養学はまだ新しい学問分野だそうですね。

鈴木 約100年前にアメリカで「スポーツニュートリション」というタイトルの論文が発表されました。そして、1964年の東京オリンピックの開催前に、「スポー

ツ栄養」という言葉でその概念が日本に伝わってきたのです。しかしそれ以降、しばらくの間その概念が表舞台から姿を消してしまいましたが、80、90年代ごろになって再び「スポーツ栄養」が注目されるようになりました。「スポーツ栄養」は当初、タンパク質やビタミンB群といった栄養素をサプリメントで摂取することを推奨するような学問として捉えられていましたが、2000年後に「やはり食事が重要なのではないか」という考え方が広まり、スポーツ栄養を栄養管理として考える方向にシフトした経緯があります。

外川 概念自体は100年前からあったにもかかわらず、なかなか世の中には定着しなかったんですね。

鈴木 私は、前職の鹿屋体育大学に勤めていた時期に、日本スポーツ栄養研究会という組織を立ち上げました。その後、会長を務めながら組織を拡大し、現在は日本スポーツ栄養学会となっています。スポーツ栄養学



鈴木 志保子さん

に携わるアカデミアを強化していきたいと考え、活動を続けてきました。

外川 日本におけるスポーツ栄養学の確立を、自ら主導されたんですね。その背景にはどのような思いがあったのでしょうか。

鈴木 私は大学時代に管理栄養士の資格を取ったのですが、当時は、栄養管理は病気になった人に対してするものという考え方が一般的で、スポーツにおける栄養管理の重要性が認識されていませんでした。そのため、スポーツ栄養学の意義を広く伝え、そうした状況を変えたいと思ったのです。近年では、オリンピック・パラリンピックでアスリートが活躍するたびに、管理栄養士が栄養サポートしたことをメディアでも取り上げるようになりました。また、国立スポーツ科学センターにも栄養部門が設けられるなど、スポーツ栄養学の必要性が広く認められています。

北京オリンピックを機に 公認スポーツ栄養士資格を創設

外川 管理栄養士とは具体的にどのような仕事をされて

いるのでしょうか。

鈴木 管理栄養士の仕事は献立を作るのだと思われがちです。

確かにその仕事もありますが、それは管理栄養士の仕事の一部に過ぎません。例えば、外川さんが何か課題を抱えていて、今よりもっと健康になりたいとしたら、管理栄養士は「あなたが気

になっている健康課題を解決するために、栄養サポートを受けてみませんか？」といった提案をします。栄養サポート（栄養管理）は、目的を決め、現状を把握して課題を抽出（アセスメント）し、その結果を根拠として、食生活・食事や運動、サプリメントの摂り方などについて綿密な計画を立て、計画実行中、支援を続けることで目的を達成する。それが管理栄養士の仕事なのです。

外川 人が健康に生きていくための、さまざまなサポートをされるんですね。私もそこまで徹底した栄養管理を行っているとは知りませんでした。

鈴木 日本で生まれ育った皆さんのほとんどは、学校給食



外川 智恵さん

を通して管理栄養士が作った献立を食べています。それはとてもすごいことなのですが、そのイメージが強過ぎることで、管理栄養士は献立を作ることが仕事だと思われがちなのです。実際は、ただ献立を立てているのではなく、対象者の課題を明確にして課題解決のための献立を作り、その後の状態を確認しています。栄養管理の例では、睡眠に課題があつて食欲が低下している方には睡眠課題を解決するためのサポートもした上で、栄養状態を良好にするなど、栄養管理に必要なこと全てが仕事です。

外川 2008年の北京オリンピックでは、女子ソフトボール日本代表チームが金メダルを獲得して大きな話題になりました。チームの栄養管理を担当していた鈴木先生にとって、どのような意味があつたのでしょうか。

鈴木 北京オリンピックを経験したことで、さまざまなノウハウが蓄積されました。それを基に、同年に公認スポーツ栄養士という新たな資格を創設しました。スポーツの世界では、結果を出すことが何よりも重視されます。そのため、女子ソフトボール日本代表チームが金メダルを獲得したことは、スポーツ栄養学を発展させる上で大きな追い風になりました。



外川 公認スポーツ栄養士になるためには、どのようなキャリアを積む必要があるのでしょうか。

鈴木 大学で学んですぐに公認スポーツ栄養士として活動することは難しいです。なぜなら、アスリートは経験値のない人に栄養管理を任せたくないからです。そのため、学生には、まずは病院や福祉施設に勤務しながら勉強し、公認スポーツ栄養士の資格を取るように勧めています。養成プログラムにはインターンシップも組み込まれているので、それを経験した上で、現場で活動することになります。

外川 公認スポーツ栄養士は現在何人くらいいるのでしょうか。

鈴木 約600人が活動しています。養成する人数は、年間70人と決められています。かなりハードなプログラムなので、実際に資格を取得する人はそのうち60人くらいです。

生粋の実践っ子

互いを認め尊重し合う、女子教育の中で

外川 先生は実践女子大学で栄養学を学んだことから、

管理栄養士としての道に入られました。どのような学生時代を過ごされたのですか。

鈴木 私は中学から大学院修士課程まで実践に通った生粋の実践っ子なんです。中学生の頃からずっと実践が大好きで、大学まで進みました。大学はとても居心地が良かったですね。学生同士がお互いを認め合い、尊重する気風がありましたし、女子だけで自由に過ごせたことも良かったです。今思い出しても、女子教育ならではの良さがあったと思っています。ただ、私は自由にやり過ぎて、「あなたは一度、外に出た方がいい」と先生から言われてしまいました。

外川 スポーツ栄養を学ぼうと思われたのは、大学時代ですか。

鈴木 きっかけは高校生の時に見た陸上競技の世界大会でした。カール・ルイスがドクターとトレーナー、栄養士を帯同させていることを知り、アスリートにとっても栄養が重要なのだと興味を持ったのです。その後、高校の先生から管理栄養士という資格があることを教えてもらい、大学で栄養学を専攻することにしました。

外川 管理栄養士の資格を取得し、大学院を修了されて

からは、鹿屋体育大学の助教授に着任されました。体育大学という環境は、スポーツ栄養の研究にどのような影響を与えましたか。

鈴木 大学教育、特に教室での授業は、基本的に学生の集団を対象に行いました。研究として、チーム競技から個人競技まで、さまざまなアスリートの栄養管理ができ、最高に幸せな環境でした。

外川 神奈川県立保健福祉大学に移られた理由は何だったのでしょうか。

鈴木 鹿屋体育大学では、とても楽しく仕事をさせていたのですが、スポーツ栄養学に興味を持つ学生がいるものの、管理栄養士の資格を取ることができない環境であったため、私の後継者を生むことができないと考えるようになりました。また、2000年の法改正により、管理栄養士の中心となる専門の考え方が、「食物栄養学」から「人間栄養学」に変わり、より個人を重視する学びに変わったこともきっかけとなりました。将来的に、私と同じマインドを持った管理栄養士を育て、裾野を広げていきたいと考え、現在の大学に移りました。

外川 移籍後、先生の薫陶を受けた学生たちの中から、先

生のマインドを受け継いだ公認スポーツ栄養士が次々に巣立っているわけですね。

鈴木 プロ野球チームで公認スポーツ栄養士をしている卒業生もいますし、スポーツ強豪校に管理栄養士として勤めている卒業生もいます。本学にも3名の公認スポーツ栄養士がいます。

思い込みを捨てる

外川 先生が管理栄養士として仕事をする上で、大切にしていることは何ですか。

鈴木 思い込みを捨てることです。経験値が高くなると「今回も同じパターンかな」と思い込んで動いてしまうことが多くなります。しかし、誰一人として同じ身体作り人間はいません。ですから、思い込みを捨てて、しっかり一人一人を見るようにしています。例えば、パラアスリートの場合、アスリート自身が「コンディションが良い」という状態を分かっていることがありません。身体の一部が動かないなどの自分の障害を受け入れ過ぎてい



て、パフォーマンスが落ちていても「仕方がない」と諦めてしまうのです。しかし、それは思い込みで、パラアスリートもコンディションの良い状態を作れるはずなのです。公認スポーツ栄養士の仕事を通して、そうした思い込みを払拭していきたいと思っています。また、管理栄養士の側も思い込みにとらわれていることが多いです。「他人の食生活にどこまで踏み込んでいいか分からない」という栄養士がいますが、それも勝手な思い込みなのです。相手にとって踏み込む方がいいと思ったら、踏み込むしかないのです。そういう思い込みが可能性を狭めているように思います。

外川 先生のお話を聞いていると、心の栄養まで考えられているように感じます。

鈴木 やはり教育が大切なのです。日本のスポーツ界も思い込みに縛られています。アスリートはお菓子を食べてはいけないと思っていないませんか？ 実はそれは大きな間違いです。激しい運動をしてエネルギーを大量に消費すると、1日3食だけでは足りない場合もあります。お菓子は小さくて高エネルギーな食品なので、その際の栄養素摂取の方法としてとても効果的なのです。しかし、日

本ではアスリートはお菓子を食べてはいけないという風潮がある。栄養の専門職ではない監督やコーチが、自身でお菓子を食べる種類や量を難しくして教育できないことから、「こういうものは食べるな」と教育しているのです。私は公認スポーツ栄養士が正しい知識を基に教育することで、そうした現状を変えたいと思っています。

現場に立ち続けるからこそ 伝えられることがある

外川 先生は現在、公認スポーツ栄養士としてどのような活動をされているのでしょうか。

鈴木 日本パラリンピック委員会の強化本部員として、基本的に全競技の状況を確認して、さまざまなアドバイスをしています。個人としては、駅伝の実業団チーム、車いすバスケットボールの代表チーム、プロゴルフアーなどのアスリートの栄養管理を担当しています。

外川 大学教育に携わる一方で、現場にも積極的に立ち続けているんですね。

鈴木 現場に立つことはやめられません。現場から離れ

てしまったら、今までの経験を基にしたことしか伝えられなくなります。現場にいる人間から出る言葉と、そこを離れた人間から出る言葉は全く違うと思います。また、現場での仕事を通じて、新しい研究のタネを見つけたり、自分の研究結果や考え方が間違っていないか確かめたりという意味合いも大きいですね。

外川 現場での経験が教育に生かされているんですね。

鈴木 公認スポーツ栄養士として活動している中で、たくさん失敗もしてきました。でも、この世界はトライ&エラーです。エラーを恐れていては、トライできません。大学で教えていると、失敗を怖がる学生がとても多いことが気になります。

外川 よく分かります。失敗したことを言い出せない学生が多いことも気になります。

鈴木 学生がつまずいた時に「転ばぬ先の杖」をつかせてしまうと、その後のもっと大きなつまずきで転んでしまうことの方が怖いと思います。ですから、学生がつまずいた時は、彼らが答えを出すまで何も言わず、じっと待ちます。そうすると学生は考える。その結果、いいアイデアが出てくるものなのです。

外川 あえて「教えない」ということも、大学教育では大切なかもしれませんね。先生の中で今の大学教育に対して求めることはありますか。

鈴木 現在の大学は、文部科学省の方針で学修者本位の在り方になっています。しかし、学修者によってモチベーションの高さは違います。大学全入時代が本格化してきた今、学修者本位の在り方を続けるには、学生の意欲を高める体制がないと、大学の存在意義が揺らぐことになるのではないかと懸念しています。

外川 最後にスポーツ栄養学の先駆者として、今後、取り組んでいきたいことを聞かせていただけますか。

鈴木 スポーツ栄養学のエビデンスやスキルは、スポーツ以外の分野でも生かすことができます。例えば、女性の身体は、妊娠前にエネルギーや栄養素が不足した栄養状態では妊娠後に胎児を良好に発育できないと判断すると、妊娠の可能性が低くなると思います。男性のアスリートの場合、

エネルギー摂取量に比べて消費量が多すぎると精子の量が少なくなるケースもあります。私の経験では、妊娠を希望するアスリート夫婦に栄養管理をすることで、栄養状態が改善し、翌年には子どもを授かることができたケースも多くあります。また、日本では、更年期についての教育が女性とそのパートナーに対して充実されていない現状があります。更年期の教育・支援も進めていきたいと考えています。



栄養状態を適切に維持することは、実はとても難しいのです。いつでもどこでも食べたいものを食べることができる環境だからこそ、食育の知識だけでは栄養状態を良好にできない時代がやってきています。栄養の専門職である管理栄養士の力を借りて「本当の健康」を手に入れてもらうことが

きるように、「パーソナル管理栄養士」の仕組みを作るとも、これからの目標です。

外川 私も食生活に気を付けて「本当の健康」を目指したいと思います。本日はありがとうございました。

豊田工業大学

なかの よしあき
中野 義昭

豊田工業大学 学長



保立和夫前学長の任期満了に伴い、中野義昭副学長が2025年9月1日付で、第8代学長に就任した。

中野新学長は1959年生まれ。1982年に東京大学工学部電子工学科を卒業後、同大学大学院にて電子工学専門課程の修士・博士課程を修了した。1987年に同大学工学部電子工学科に助手として採用され、1988年に専任講師、1992年に助教授。2000年に同大学大学院工学系研究科電子工学専攻教授へ就任した。2002年、同大学先端科学技術研究センターに異動、2008年に副所長、2010年に所長を歴任した。

2013年からは再び工学系研究科教授を務め、2025年3月に同大学を定年退職。4月に豊田工業大学副学長・教授に就任し、9月より現職。

専門分野は光電子デバイス工学。半導体レーザ、光集積回路、高効率太陽電池等の研究に従事した。

豊田工業大学の教育の特色は機械システム・電子情報・物質工学の3分野を融合した「分野横断型履修」。安定した経営基盤のもと研究環境を充実させ、必修科目の学外実習等を通じて実践的な能力を育成する。2031年の開学50周年に向け、従来の特長と強みを錬磨し進化していく。

私大連フォーラム2025 開催！

テーマ | 2040年、大学教育のニューノーマルを描く

【発題者】

- 伊藤公平氏(慶應義塾長)
- 竹安栄子氏(京都女子大学学長)
- 小路明善氏(アサヒグループホールディングス株式会社社長)

【司会・コーディネーター】

- 高橋智幸氏(関西大学学長)

日時 令和8年3月17日(火)

13:00~15:30

情報交換会…15:35~16:10

会場 ステーションコンファレンス東京/
YouTubeライブ配信有

● プログラム詳細、参加お申込みはこちら

会場参加 ▶ 先着70名
オンライン視聴 ▶ 定員制限なし
[締切] 令和8年3月9日(月)

こちらから
お申し込み
ください



河合 久（かわい ひさし）

中央大学学長。’83中央大学大学院商学研究科博士前期課程修了。’21より現職。専門は会計情報システム論。

田中 愛治（たなか あいじ）

早稲田大学総長。’85米国オハイオ州立大学政治学研究科修士博士一貫コース修了。政治学博士（Ph.D.）。早稲田大学教授、理事、世界政治学会（IPSA）会長等を経て、’18より現職。

小池 茂子（こいけ しげこ）

聖学院大学学長。’93青山学院大学大学院文学研究科教育学専攻修士後期課程単位取得満退学（文学修士）。’23より現職。専門は成人教育学、生涯学習論。

湯澤 恵介（ゆざわ けいすけ）

学校法人梅村学園中京大学学術情報システム部情報システム課主任。中京大学情報理工学部情報知能学科卒業。市役所を経て、’25中京大学に入職。主にDX推進を担当。

坂倉 康平（さかくら こうへい）

学校法人上智学院総務局経営企画グループ。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修士課程修了。富士通総研でICT活用に係る

コンサル・調査に従事後、’21上智学院入職。

武田 享也（たけだ ゆきや）

駒澤大学総合情報センター情報ネットワーク課。駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部卒業。’14駒澤大学に入職、’19より現職。

喜多 真一（きた しんいち）

国立大学法人大阪大学情報推進部デジタル戦略推進室専門職員。’06大阪市立大学理学部地球学科卒業。民間企業を経て、’09大阪大学に入職、’21より現職。

河越 英代（かわごえ ひでよ）

慶應義塾広報室長。

今永 典秀（いまたの のりひで）

コー・イノベーション大学事務局長・教授。博士（工学）。民間企業勤務、岐阜大学などを経て現職。『長期実践型インターンシップ入門』（ミネルヴァ書房）。

澤田 英行（さわだ ひでゆき）

芝浦工業大学システム理工学部部長・環境システム学科教授。キャンパス整備・SDGs推進担当理事。’87芝浦工業大学大学院建

設工学専攻修了。

永野 誠（ながの まこと）

関西学院大学社会連携・インキュベーション推進課長。関西学院大学社会学部卒業。機械メーカー勤務を経て、’02関西学院入職。人事部、入試課等を経て、’22より現職。

三宅 雅人（みやけ まさと）

立命館大学副学長・社会共創推進本部長・OIC総合研究機構教授。’03奈良先端大博士後期課程研究指導認定退学。博士（工学）。同大学准教授を経て、’23より現職。

北野 寧彦（きたの やすひこ）

早稲田大学キャンパス企画部長。早稲田大学理工学部建築学科卒業。一級建築士。総合建設会社を経て、’04早稲田大学入職。’08より企画・建設課長、’23より副部長、’25より現職。

太田 幸治（おた こうじ）

愛知大学ささしま地域連携研究センター（ASTASIA）センター長・地域連携室副室長・経営学部教授。専攻はマーケティング。主著『はじまりのアートマネジメント』（共著・水曜社）など。

吉村和真（よしむら かずま）

学校法人京都精華大学理事長、京都精華大学マンガ学部教授。'99立命館大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。修士（文学）。'06准教授、'13教授、'24より理事長。

宮越美紀子（みやこし みきこ）

学校法人成蹊学園総務部長兼企画室広報担当部長。ピーチくんの作者でありプロデューサー。作者としての名前はコキミセルナ。

長谷川裕晃（はせがわ ひろあき）

甲南学園広報部職員。'18甲南学園入職、アドミSSIONセンターを経て、'24より現職。

野見山智道（のみやま ともみち）

学校法人明治大学経営企画部広報課長。

川添麻衣子（かわそ えまいこ）

同志社女子大学広報部広報室広報課長。同大学学芸学部音楽学科卒業。同大学、'04入社。'1710月より広報部広報室広報課にてブランディング広報関連業務に従事。'2510月より現職。

南雲健介（なぐも けんすけ）

法政大学総長室広報課課長。

吉田敦（よしだ あつし）

南山大学学生部長・理工学部教授。'96名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（工学）。豊橋技術科学大学助手、和歌山大学講師を経て、'09南山大学着任、'14より現職。

菊地映輝（きくち えいき）

武蔵大学社会学部准教授。博士（政策・メディア）。国際大学講師を経て、'24より現職。専門は文化社会学、情報社会論等。

中島啓（なかじま けい）

日本女子大学食科学部教授。'01防衛医科大学校医学研究科修了。博士（医学）。神奈川県立保健福祉大学教授を経て、'22より日本女子大学家政学部教授。'25より食科学部長。

菅沼隆昭（すがぬまた かあき）

文教大学大学事務局局次長。

森田学（もりた まなぶ）

追手門学院大学大学事務局教務・学生支援部部長、(株)オーティエム監査役。'06入職後、教学系及び法人部署を複数経験。'23より現職。日本私立学校振興・共済事業団第20期研修生。

春田和恵（はるた かずえ）

学校法人東京女子大学大学運営部長。同大学文学部卒業。教育研究支援部を経て、総務課長を務めた後、'19より現職。

鈴木志保子（すずき しほこ）

公立大学法人神奈川県立保健福祉大学大学院保健福祉学研究科研究科長、公認スポーツ栄養士。東海大学大学院医学研究科修了。博士（医学）。'00国立鹿屋体育大学助教。'23より現職。

外川智恵（とがわち え）

大正大学表現学部教授。同大学卒業。カリフォルニア臨床心理大学院修士課程修了。山梨放送を経てフリー。NTT技術ジャーナル巻頭インタビュー、新語・流行語大賞の総合司会など。

（お断り）本稿は、お書きいただいた資料から、できる限り統一して掲載いたしました。

会長の動き

● 11月11日(火)

全私学連合の代表として、全私学連合構成団体会長とともに文部科学大臣を表敬訪問
第8回常務理事会に出席
国会議員に令和7年度補正予算に係る要望

● 11月19日(水)

私立大学団体連合会 私立大学振興協議会に出席

● 11月25日(火)

第7回理事会、第2回総会に出席

● 12月16日(火)

第9回常務理事会に出席

開催報告

● 12月2日(火)～3日(水)

財務・人事担当理事者会議(第2回)



加盟大学学長インタビュー動画
「学長ときどき私」を公開

この動画は、私大連会員大学の学長にフォーカスし、学長としてのお仕事、研究者としての活動、プライベートの過ごし方などをお伺いし、学長の魅力を伝えることを通じて、私立大学での多様な学びや学ぶことの楽しさなど、私立大学の魅力を視聴者にお届けしています。

新たに関西大学 高橋智幸学長へのインタビューを公開、今後も随時公開予定です。



<https://www.youtube.com/playlist?list=PLXbCoVKSQa11Rlej5Na3BL25aCdvs1hT>



詳細は、私大連Webサイトを
ご覧ください。



<https://www.shidairen.or.jp/>

私大連TOPICS

令和7年秋の叙勲・褒章

(私大連事業関係者)

◆ 旭日中綬章

ハンス ユーゲン・マルクス

(南山大学名誉教授、
南山学園元大学長・元理事長)

◆ 瑞宝重光章

吉田 美喜夫

(立命館元総長・大学長)

◆ 瑞宝中綬章

大久保 信行

(中央大学名誉教授)

河合 宣孝

(同志社大学名誉教授)

馬本 誠也

(福岡大学名誉教授)

木南 英紀

(順天堂大学学長特別補佐、
元大学長)

内田 勝一

(早稲田大学名誉教授)

座談会 「大学スポーツがつくる“誇り”と“つながり”—ブランディング戦略としての新展開—」

特集 「教育視点から高大連携を考える」

小特集 「外国人留学生受け入れ拡大とキャリア支援—大学の国際化と日本定着の未来—」

だいがくのたから 専修大学

大学点描 同志社大学

クローズアップ・インタビュー

室屋 義秀さん(エアレース・パイロット／エアロパティック・パイロット)

編集後記

◆ 今回の特集で見えてきたのは、大学が「知」を閉じ込める場から、社会に循環させるハブへと変貌している姿である。キャンパスをひらき、地域と共に価値を創るという共通の理念があり、図書館やカフェ、広場、相談窓口などの空間の開放は単なる施設利用にとどまらず、研究成果や教育プログラムを地域に還元する仕組みを伴っている。そこでは、学生が地域課題に挑み、企業や自治体と協働しながら、学びを実社会に接続する実践が広がっている。大学は今、立地するまちのインフラとして、文化と知の発信拠点の役割を担っており、キャンパスはもはや「囲われた学びの場」ではない。地域住民にとっては、学びや交流の場であり、課題解決のパートナーともいえる。一方、セキュリティや運営負担という課題もあり、持続可能な仕組み作りが求められる。今回の特集を通じ、地域と共生し、未来を共創する大学の挑戦は、日本社会の持続可能性を支える新しいモデルとなる可能性を強く感じた。〈広報・情報委員会大学時報分科会委員・関西学院広報部企画広報課課長中谷良規〉

◆ 自分で企画しておきながら言ってしまうが、テーマが大学発のキャラクターであり、各校、割とほっこりとした記事になるのかと想像していたら大間違いであった。6校とも各担当部署や自分の大学のキャラクターに愛情を注ぐ学生や教職員の熱量、そして緻密な広報戦略を感じる素晴らしい事例紹介である。どの事例でも、学生、教職員、保護者など大学を取り巻くステークホルダーへのブランディングの促進やコミュニケーションの役割をキャラクターがしっかり担っている。とりわけ2010年代以降のSNS登場により画像やデジタルスタンプ、動画などのコンテンツにおいて、既存の着ぐるみ活動やグッズ展開だけでなく、その活躍の場をより拡大している印象だ。最後に、成蹊大学のピーチくんのように公募ではなく1人の職員のイラストから始まる展開は大変興味深かった。大学キャラクターの今後がますます楽しみである。〈広報・情報委員会大学時報分科会委員・早稲田大学エクステンションセンター事務長兼コンテンツニング・エ

デュケーション推進室課長小泉邦人

◆ 「思い込みを捨てる」—鈴木先生のこの一言から始まるお話は、強く印象に残るものであった。取材した2025年は昭和100年にあたる年。元号が平成となった1989年以降を思い起こすだけでも、昭和の時代には考えられなかった様々なことが起きている。携帯電話やインターネットの登場、世界的なパンデミックの経験などが思い浮かぶが、座談会のテーマとなった生成AIの登場と活用もその一つである。「これを脅威と捉えるか、機会と捉えるか」と座談会では坂倉氏が発言しているが、「思い込みは可能性を狭める」との鈴木先生の言葉とも通じるものを感じる。生成AIもスポーツ栄養学も、人類の歴史で考えると生まれたての存在である。新しいものや変化は脅威にも感じられることはあるが、これを夢や可能性と捉えるマインドが重要と感じる。

かく言う私は、まだ生成AIと出会えていない側にある。昭和101年目、新たな出会いに向き合う時かもしれない。〈日本私立大学連盟事務局 加賀崎奈美〉

一般社団法人 日本私立大学連盟 加盟大学一覧

※ 大学名ABC順 / ※ } は同一学校法人 (118大学 令和8年1月20日現在)

愛知大学
亜細亜大学
青山学院大学
跡見学園女子大学
梅花女子大学
文教大学
筑紫女学院大学
中央大学
中央大学
大東文化大学
獨協大学}
獨協医科大学}
姫路獨協大学}
同志社大学}
同志社女子大学}
フェリス女学院大学
福岡大学
福岡女学院大学}
福岡女学院看護大学}
学習院大学}
学習院女子大学}
白鷗大学
阪南大学
広島女学院大学
広島修道大学
法政大学
実践女子大学
上智大学
城西大学}
城西国際大学}
順天堂大学
金沢星稜大学

関西大学
関西学院大学
関東学園大学
関東学院大学
慶應義塾大学
敬和学園大学
神戸女学院大学
皇學館大学
國學院大學
国際武道大学
国際基督教大学
駒澤大学
甲南大学
久留米大学
共立女子大学
京都産業大学
京都精華大学
京都橘大学
九州産業大学
松山大学
松山東雲女子大学
明治大学
明治学院大学
宮城学院女子大学
桃山学院大学
武蔵大学
武蔵野大学
武蔵野美術大学
名古屋学院大学
南山大学
日本大学
日本女子大学

ノートルダム清心女子大学
大阪学院大学
大阪医科薬科大学
大阪女学院大学
大谷大学
追手門学院大学
立教大学
立正大学
立命館大学}
立命館アジア太平洋大学}
龍谷大学
流通科学大学
流通経済大学
西武文理大学
聖学院大学
成城大学
聖カタリナ大学
成蹊大学
西南学院大学
聖路加国際大学
聖心女子大学
専修大学}
石巻専修大学}
芝浦工業大学
白百合女子大学}
仙台白百合女子大学}
昭和女子大学
創価大学
園田学園大学
大正大学
拓殖大学
天理大学

東邦大学
東北学院大学
東北公益文科大学
東海大学
常磐大学
東京女子大学
東京女子医科大学
東京経済大学
東京国際大学
東京農業大学}
東京情報大学}
東京歯科大学
東洋大学
東洋英和女学院大学
東洋学園大学
豊田工業大学
津田塾大学
和光大学
早稲田大学
山梨英和大学
四日市大学}
四日市看護医療大学}

大学時報

University Current Review

2026/1月号

第75巻426号(通巻439号)

令和8年1月20日発行

編集人 音好宏(上智大学文学部教授)

発行人 高橋智幸(関西大学学長)

発行所 一般社団法人 日本私立大学連盟

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25

私学会館別館

電話 03-3262-8672 FAX 03-3262-4363

<https://www.shidairen.or.jp>

編集 株式会社 WAVE

〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田3-3-20

明治安田生命大阪梅田ビル 3階

〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-2-1

住友不動産虎ノ門タワー 20階

松田美佐(中央大学文学部教授)

須藤智徳(法政大学多摩事務課課長)

藤野圭(上智大学ダイバーシティ・サステナビリティ推進室室長)

玉村まゆか(関西大学総合企画室広報課長)

中谷良規(関西学院広報部企画広報課課長)

河越英代(慶應義塾広報室長)

野見山智道(明治大学経営企画部広報課長)

大野百合子(立教学院総長室渉外課課長補佐)

勝屋藍太(立命館大学総合企画部広報課長)

山田健太(専修大学文学部教授)

高橋慈海(大正大学理事長室室長)

大谷奈緒子(東洋大学社会学部教授)

中條賢二(津田塾大学経営企画課課長)

(早稲田大学エクステンションセンター事務長兼

コンティニューイング・エデュケーション推進室課長)

春名貴明(日本私立大学連盟事務局)

加賀崎奈美(日本私立大学連盟事務局)

長尾早姫(日本私立大学連盟事務局)

吉田匡孝(日本私立大学連盟事務局)

